福岡市埋蔵文化財調査報告書 第618集

# 峯 遺 跡 2

## － ほ場整備事業に伴う峯遺跡第２次調査報告 －

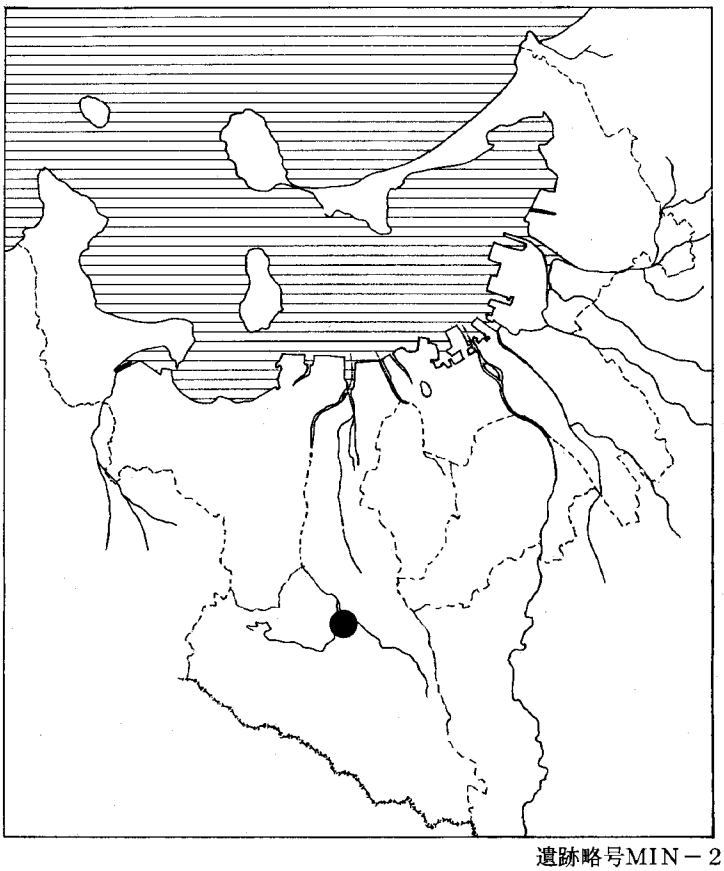
1999

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第618集

# 峯 遺 跡 2

## ― ほ場整備事業に伴う峯遺跡第２次調査報告 ―



遺跡略号MIN－2
調査番号　9718

1999

福岡市教育委員会

# 序　文

玄界灘に面して広がる福岡市には、豊富な自然と数多くの遺跡が残されており、それらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな環境を作り出しています。私たちはこの環境を後世に引き継ぐことを目標としたまちづくりを行っています。

その一方で本市では都市基盤整備などの事業を行い、活力のある都市の建設を行っていますが、そのために一部の遺跡が止むを得ず影響をうけるのもまた事実です。福岡市教育委員会ではこれらの遺跡についてはあらかじめ事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めております。

本書は早良区内野地区における団体営ほ場整備事業にともなう発掘調査のうち、平成９年度に調査を行った峯遺跡群第２次調査の成果を報告するものです。調査によってこれまで資料の少なかったこの地域での中・近世における歴史を説くための貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られるとともに、学術研究資料の一環として御活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、事前協議、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力を頂いた農林水産局、内野ほ場整備組合、地元の関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成11年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　**町　田　英　俊**

# 例　言

1．本書は、1997年度に福岡市教育委員会が調査を実施した峯遺跡第２次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也、大塚紀宜である。
2．本書に使用した遺構の実測は、青柳美智子、土生喜代子、山田ヤス子、加藤、大塚が、遺物の実測図は田中克子、加藤、大塚が行った。製図は田中、加藤、大塚が行った。使用した遺構の写真は加藤、大塚が撮影した。
3．本書で用いる方位は全て磁北である。遺構の呼称は記号化し掘立柱建物をＳＢ、土坑をＳＫ、溝をＳＤ、柱穴をＳＰとした。
4．旧石器時代遺物においては吉留秀敏の協力を得た。編集は加藤の協力を得て大塚が行った。
5．本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡調査番号 | ９７１８ | | 遺跡略号 | ＭＩＮ－２ | |
| 調査地地番 | 早良区大字西地内 | | | | |
| 開発面積 | 8.7ha | 調査対象面積 | 10,500㎡ | 調査実施面積 | 10,500㎡ |
| 調査期間 | 1997年６月６日～1997年12月26日 | | | | |

# 本　文　目　次

第１章　はじめに
　１．調査に至る経緯……1
　２．調査組織……1
　３．調査の経過……2
第２章　遺跡の位置と環境……3
第３章　調査の記録
第１節　第１地区の調査
　１．調査の概要……5
　２．検出遺構……5
　３．まとめ……8
第２節　第２地区の調査
　１．調査の概要……9
　２．検出遺構……9
　３．土坑・焼土坑……9
　４．その他の遺物……16
第３節　第３地区の調査
　１．調査の概要……17
　２．検出遺構……17
　３．まとめ……20
第４節　第４地区の調査
　１．調査の概要……21
　２．検出遺構……21
第５節　第５地区の調査
　１．調査の概要……25
　２．検出遺構……25
　３．小結……44
第６節　旧石器時代の遺物
　１．峯遺跡出土旧石器時代資料について……45
　２．出土石器の観察……45
　３．出土石器の評価……45
第４章　峯遺跡の自然科学分析　（パリノ・サーヴェイ株式会社）
　はじめに
　１．試料……47
　２．方法……47
　３．結果……48
　４．考察……48

# 挿　図　目　次

Fig．1　調査地区と試掘トレンチ位置図（1/2,000）……折り込み
Fig．2　周辺遺跡分布図（1/25,000）……4
Fig．3　第１地区遺構配置図（1/100）……6
Fig．4　土坑（SK）実測図（1/40）……7
Fig．5　出土遺物実測図（1/3、1/1）……8
Fig．6　第２地区遺構配置図（1/200）……10
Fig．7　掘立柱建物（SB）実測図（1/80）……11
Fig．8　第２地区出土遺物実測図（1）（1/3）……11
Fig．9　土坑（SK）実測図（1/40）……12
Fig．10　第２地区出土遺物実測図（2）（1/3）……13
Fig．11　第２地区出土遺物実測図（3）（1/3）……14
Fig．12　第２地区出土遺物実測図（4）（1/3・1/4）……15
Fig．13　第３地区遺構配置図（1/400）……18

Fig .14　検出遺構実測図 ( 1/40 ) …… 19
Fig .15　出土遺物実測図 ( 1/3 ) …… 20
Fig .16　第４地区遺構配置図 ( 1/400 ) …… 22
Fig .17　検出遺構実測図 ( 1/40 ) …… 23
Fig .18　第４地区出土遺物実測図 ( 1/3、1/1 ) …… 24
Fig .19　第５地区遺構配置図 ( 1/250 ) …… 26
Fig .20　掘立柱建物 (SB) 実測図 (1/80) 1 …… 27
Fig .21　掘立柱建物 (SB) 実測図 (1/80) 2 …… 28
Fig .22　掘立柱建物 (SB) 実測図 (1/80) 3 …… 29
Fig .23　掘立柱建物 (SB) 実測図 (1/80) 4 …… 30
Fig .24　掘立柱建物 (SB) 実測図 (1/80) 5 …… 31
Fig .25　掘立柱建物 (SB) ・柱穴 (SP) 出土遺物実測図 ( 1/3 ) …… 32
Fig .26　溝 (SD) 出土遺物実測図 ( 1/3 ) …… 33
Fig .27　土坑 (SK) 実測図 ( 1/40、1/60、1/80 ) 1 …… 35
Fig .28　土坑 (SK) 実測図 ( 1/40、1/60、1/80 ) 2 …… 36
Fig .29　土坑 (SK) 実測図 ( 1/40、1/60、1/80 ) 3 …… 37
Fig .30　土坑 (SK) 出土遺物実測図 ( 1/3 ) 1 …… 38
Fig .31　土坑 (SK) 出土遺物実測図 ( 1/3 ) 2 …… 39
Fig .32　土坑 (SK) 出土遺物実測図 ( 1/3 ) 3 …… 40
Fig .33　焼土坑 (SK) 出土遺物実測図 ( 1/3 ) …… 43
Fig .34　旧石器時代遺物実測図 ( 1/1 ) …… 46

## 図　版　目　次

ＰＬ．１　（１）第１地区全景（南東から）　（２）第２地区全景（西から）
ＰＬ．２　（１）第２地区西半全景（南から）　（２）SK－108（南から）
ＰＬ．３　（１）第３地区西側全景（北東から）　（２）第３地区東側全景（北東から）
ＰＬ．４　（１）第４地区全景（北東から）　（２）SK－006（南から）
ＰＬ．５　（１）第５地区全景（北東から）　（２）第５地区南側遺構集中部（南東から）
ＰＬ．６　（１）SB－016 調査状況（東から）　（２）SB－081 調査状況（北から）
　（３）SB－082 調査状況（北から）　（４）SB－083 調査状況（北から）
　（５）SB－084 調査状況（西から）　（６）SB－085 調査状況（西から）
　（７）SB－088 調査状況（南から）　（８）SB－089 調査状況（南から）
ＰＬ．７　（１）SK－005 調査状況（南から）　（２）SK－010 調査状況（西から）
　（３）SK－022 調査状況（東から）　（４）SK－048 調査状況（東から）
　（５）SK－060 調査状況（西から）　（６）SK－062 調査状況（北西から）
　（７）SK－065 調査状況（西から）　（８）SK－071 調査状況（北東から）
ＰＬ．８　（１）SK－017 調査状況（南から）　（２）SK－021 調査状況（南東から）
　（３）SK－029 調査状況（西から）　（４）SK－032 調査状況（南西から）
　（５）SK－039 調査状況（西から）　（６）SK－040 調査状況（北から）
　（７）SK－041 調査状況（西から）　（８）SK－059 調査状況（西から）

## 表　目　次

表１．掘立柱建物一覧表 …… 25
表２．土坑観察表 …… 34
表３．焼土坑観察表 …… 42

## 写　真　目　次

第５地区全景（南から） …… 表紙

# 第１章　はじめに

## １．調査に至る経過

1997年度（平成９年度）から1999年度（平成11年度）の３ケ年にわたる福岡市早良区内野西地区における団体営土地改良総合整備事業の平成9年度該当地内の埋蔵文化財事前調査願が福岡市農林水産局農業土木課から同市教育委員会埋蔵文化財課に平成８年10月提出された。

これを受けて埋蔵文化財課では当該地の大半が峯遺跡群に含まれることを考慮し、初年度事業対象地10ha全域を対象として、翌平成９年１月９日より同１月31日まで試掘調査を実施した。試掘調査は65ヶ所にバックホーによる試掘溝を掘削し、必要に応じて人力による遺構・遺物の精査を行うものであった。その結果、対象地のうち谷部分については河川の氾濫原に当たっており、遺構は存在しない。また対象地の南側部分についても後世の水田構築による削平が著しく、遺構は看取できない。しかし段丘中段部分の鳥栖ローム層が良好に遺存する尾根線上の地点で焼土坑、土坑、柱穴が削平を免れており、その範囲は調査区全体で12,000㎡以上におよぶ広範囲なものとなった。

その後両者の協議により、遺構の遺存する箇所については設計変更を行い、盛土による遺構の保存をめざす方向で調整が進められたが、止むを得ず遺構面が掘削される部分、及び道路、水路などの構造物施工箇所について発掘調査を実施することとなった。調査は平成９年５月26日から同11月４日まで行われた。

なお、試掘から本調査に至る一連の発掘調査の実施、及びその後の整理作業と本書の刊行に際しては、多数の作業員、及び農業土木課、それと地元の方々の多大な協力を頂いた。心から御礼申し上げます。

また、九州大学地球惑星学科下山正一先生には現地でご指導いただいた。ここに記して感謝いたします。

## ２．調査組織

| | | |
|---|---|---|
| 調査委託 | 福岡市農林水産局農業振興部農業土木課 | |
| 調査主体 | 福岡市教育委員会　教育長 | 町田英俊 |
| 調査総括 | 文化財部長 | 平塚克則 |
| | 埋蔵文化財課長 | 荒巻輝勝（前）　柳田純孝（現） |
| | 埋蔵文化財課第１係長 | 二宮忠司 |
| 調査庶務 | 文化財整備課 | 内野保基（前）　木原淳二（現） |
| 試掘調査 | 埋蔵文化財課 | 大塚紀宜 |
| 調査担当 | 埋蔵文化財課 | 加藤隆也　大塚紀宜 |
| 整理作業 | 田中克子　樋口三恵子　大上康子　樋口勝子　青柳智香子　尾崎君枝 | |
| 発掘作業 | 青柳美智子　伊藤ミドリ　井上八郎　牛尾秋子　牛尾二三子　海津宏子　金子ヨシ子<br>鶴田喜美枝　中園登美子　西嶋彰子　土生喜代子　土生ヨシ子　平川富美子　平川史子<br>廣瀬梓　細川友喜　満田雅子　三好道子　山口タツエ　山田ヤス子　山西人美　吉岡勝野<br>岩見敏子　川嶋ツキエ　山尾タマエ　土生ヒサヨ　高橋茂子　平川英子　石橋マサ子<br>鶴田祐子　税所通泰　川岡涼子　長島光儀　大鶴好子　宮脇良浩　倉光政彦　矢野和江<br>川嶋京子 | |

## 3．調査の経過

調査に当たっては、調査区が５地点に分散したため各々第１地区から第５地区まで便宜上区名を通して付け、各調査区ごとを小単位とした調査、整理方法を取っている。そのため遺構番号についても各地点ごとでまとめており、調査全体を通したものではない。

調査は、圃場整備工事と併行して進められ、調査の進行も工事の進捗に左右された。特に１、２地区に関しては工事当初に施工される部分だったこともあり、厳しい時間的制約があった。

本調査は平成９年５月26日に第１地区の表土はぎで開始し、その後第２地区の表土はぎに移り、両地区を各々の調査担当者が同時に調査を併行して行う形式で行われ、この状況は第4地区終了時まで続いた。これも、調査の時間的制約によるものである。以下、各調査区ごとに概要を記す。

第１地区は遺構密度は低く、柱穴、焼土坑を中心とした遺構群で、方形竪穴遺構が1基検出されている。

第２地区は柱穴、土坑を中心とする密度の高い遺構群が検出され、中世～近世を主とする時期の遺物を検出する。

第３地区は遺構の密度は低く、焼土坑、柱穴を主とする遺構を検出し、方形竪穴遺構も遺存状況は悪いが１基検出している。

第４地区では焼土坑を中心とする遺構群を検出し、内部に炭化材が焼成時の状況で遺存した遺構も出土し、焼土坑が炭焼用として使用された状況を明らかにしている。

第５地区では掘立柱建物群、焼土坑、中世墓、方形竪穴遺構等を検出する。掘立柱建物は台地の東側に集中し、台地の方向に沿ってほぼ同じ方向に並ぶ。中世墓は台地西側の、集落から離れた地点で1基検出され、龍泉窯系青磁碗が１点出土する。方形竪穴遺構は台地の東側に、掘立柱建物とほぼ同じ範囲に分布し、規模は２ｍ四方のものが多い。

出土遺物は１区、３区、４区は遺物の出土量が少ない。２区からは近世陶磁器が、５区からは13～14世紀を中心に限られた陶磁器が出土する。総量でコンテナ約30箱相当が出土する。

（調査日記抄）

５月26日　第１地区表土はぎ開始（～５月27日）
５月28日　第２地区表土はぎ開始（～５月29日）
６月３日　第１、第２地区作業員投入
７月４日　第２地区終了
７月５日　第４地区遺構検出開始
８月２日　第３地区、第４地区全景空撮
８月11日　第３地区終了
８月19日　九州大学　下山正一先生来訪
８月20日　第５地区開始
８月21日　第４地区終了
10月27日　第５地区全景空撮
11月４日　第５地区終了

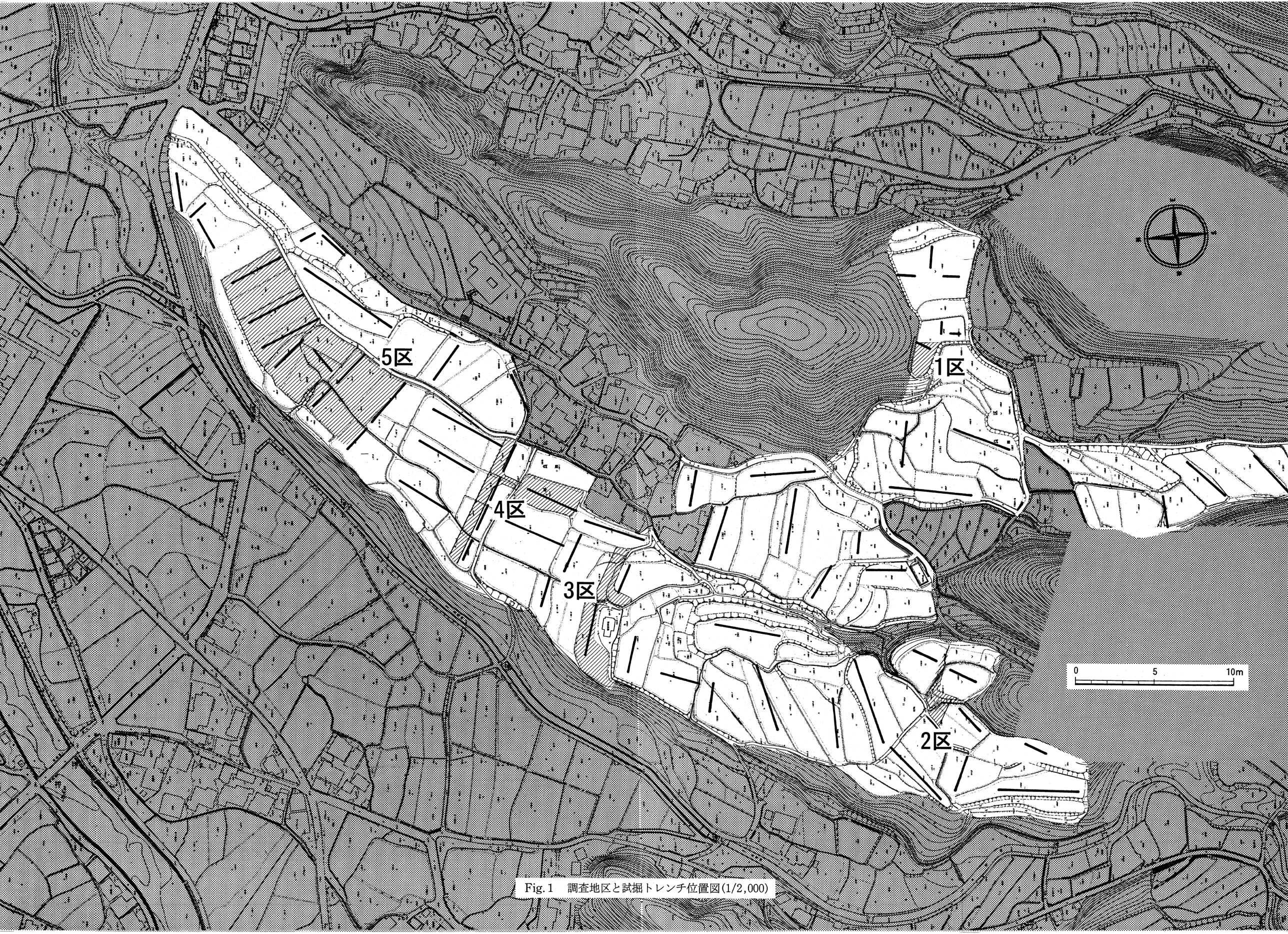



Fig. 1　調査地区と試掘トレンチ位置図(1/2,000)

# 第２章　遺跡の位置と環境

## （１）地形

福岡市域の地勢は大きく東、南両方向に山系が延び、北は玄界灘に開く、ということができよう。その中で、南側の背振山系から北に流れるいくつかの河川は、中下流域で肥沃な平野を形成しながら博多湾に流れ込み、それらの平野は古くから多くの遺跡を育みながら今日までおよんでいる。

今回報告される峯遺跡群は、それら平野のうち、福岡市西部に位置する早良（さわら）平野の上流部に位置する。国土地理院発行の2.5万分の一「背振山」の左上を基準として、東に328㎜、南に55㎜の位置にあたる。遺跡が立地する舌状丘陵は室見川東岸に背振山系から舌状に延びる台地で、遺構・遺物はその台地の先端部から中断に及ぶ。

早良平野は東を油山および油山から北に派生する丘陵によって、また西を背振山系から北に派生する飯盛・長垂山系によって周囲と明瞭に区別され、平野のほぼ中央を室見（むろみ）川が北に流れる、北に向かって扇型に開けた形状を呈する。この早良平野では下流域で有田遺跡群、藤崎遺跡群、西新遺跡群、中流域では飯盛遺跡群、吉武遺跡群、東入部遺跡、浦江谷遺跡群といった、縄文時代・弥生時代から中世に至る集落遺跡が数多く見られ、この地一帯が古くにはある程度のまとまった集合体を形成していたことが伺える。

しかし、これら中下流の様相と比較して、室見川上流域、およびその支流の小笠木（おかさぎ）川・椎原（しいば）川流域では、これらの河川によって形成された扇状地と河岸段丘が展開し、地勢的にも中、下流とは区画される。したがって、これら上流域では中下流の様相とは異なった遺跡群が展開する。以下、これまでの発掘成果に基づいた具体的な状況を概説する。

## （２）周辺の遺跡

旧石器時代には遺物としてこれまで脇山A遺跡２次調査で細石核が、同３次調査で尖頭器が各1点出土し、また志水A遺跡１次調査でナイフ型石器が１点出土しているが、当該時期の遺構は未検出である。

縄文時代には脇山A遺跡で早期から晩期に至る遺物が出土している。同じく栗尾B遺跡、谷口遺跡でも同様の内容が検出され、脇山B遺跡では早期押形文土器が出土するなど、小笠木川・椎原川流域一帯に縄文時代に属する遺跡群が集中していたことが認められる。

対して、弥生時代には室見川上流域での遺構・遺物の分布は極端に少なくなる。遺構としては谷口遺跡でわずかに見られる程度で、そのほかには遺物が各遺跡で散見される程度である。

古墳時代にもこの地域での遺構、遺物の出土は少なく、古墳自体の分布も、室見川中流域で見られる群集墳の濃密な分布はこの地域ではみられない。

峯遺跡群１次調査では、奈良時代と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、その後中世には同遺跡の他、脇山A遺跡４・５次調査で12、13世紀代の掘立柱建物跡、土壙墓群、同７次調査で14世紀から16世紀にかけての遺構群が出土している。また近接した内野遺跡群では12、3世紀代の遺物が出土しており、そのほか、各遺跡で中世の舶載陶磁器を含む中世の遺物が多く見られるが、この背景として中世背振山における上宮東門寺を中心とした一山組織の存在が大きく、室見川上流地域がこの背振山領の一つとなっていたこと、この地域一帯の灌漑開墾が中世に開始されたこと、さらに博多・聖福寺がこの地域に寺領を持っていたという密接な関係もある。その結果、室見川上流域の遺跡ではおよそらしからぬ量、内容の遺構・遺物を認めることになるのである。

＜参考文献＞
『筑前国続風土記』
吉良国光「背振山の所領支配と村落ー筑前国早良郡脇山を中心として」『九州史学』特集号　1987
発掘調査内容については各報告書を参照して頂きたい。

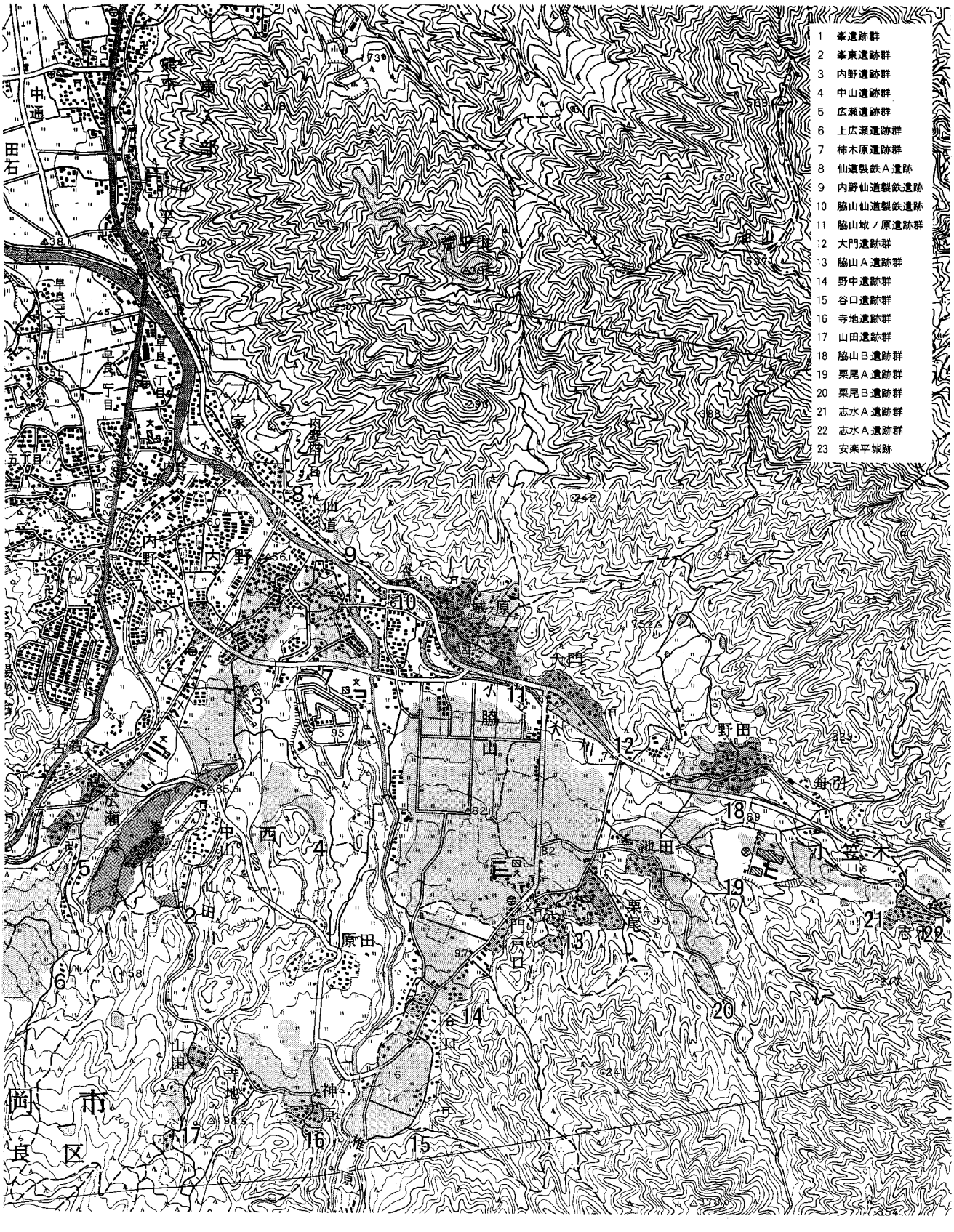



Fig. 2　周辺遺跡分布図(1/25,000)

# 第３章　調査の記録

## 第１節　第１地区の調査

### １．調査の概要

調査地は調査対象地全体からみると東側に位置し、南から北へのびる丘陵のやや低くなった鞍部に位置する。調査地は北側頂部の南側斜面をやや西側に下がった部分にあたり、視界は西側がひらいているのみで狭い。調査区の北側は本来斜面であったところをある時期に削平して棚田にしており、北側には顕著な遺構はみられない。また、南西側も比高差1.5mの段落ちになっており、現況では石垣が築かれている。切り土で遺構面が削られる271㎡の調査を行った。層序は現耕作土、床土の下はやや赤みをおびた黄褐色の岩盤となり、この面にて遺構が検出された。調査区北側のおおきく削平を受けたと思われる部分では地山の赤みが強くなる。検出した遺構は、焼土坑２基、平面方形の土坑２基とピットである。

### ２．検出遺構

SK-001（Fig. 4）

調査区西端に位置する。上面では不定形を呈するが、一段掘り下げると長さ1.7m、幅1.1mの隅丸長方形のプランがみられる。壁は被熱により赤色化しており、部分的に硬化したところがみられる。遺構のほぼ中央には55×40cm深さ10cmのへこみがみられる。ただし、へこみ内には炭化物や焼土の堆積はみられない。出土遺物はみられなかった。

SK-002（Fig. 4）

調査区東側に位置する。南北1.5、東西1.7m、深さ65cmを測り、平面は隅丸方形を呈する。東壁ほぼ中央にピットがみられるが同一遺構かどうか土層からは判断できなかった。床面は平坦で壁は真っ直ぐ上方に立ち上がる。覆土は自然堆積を示しており、床面や遺構周辺には遺構に伴うようなピットなどはみられなかった。

SK-003（Fig. 4）

調査区東端に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長軸64cm、短軸46cm、深さ10cmを測る。床面は船底形を呈し、全面被熱のため硬化、赤色化をしている。覆土は風化花崗岩の黄褐色粗砂土の単層で顕著な炭化物の堆積はみられなかった。遺構の規模や床面の焼け方などから、他の焼土坑とは区別される。遺物は出土していない。

SK-004（Fig. 4）

調査区中央、SK-002の西側にて検出した。平面は隅丸方形を呈し、南北1.2m、東西1.1m、深さ15cmを測る。床面は平坦で壁は真っ直ぐ上方に屈曲する。床面に浅いへこみがみられる。覆土は自然堆積であり、SK-002と方向を同じにすることと平面形がともに略方形を呈することから近い時期につくられたと考える。遺物は出土していない

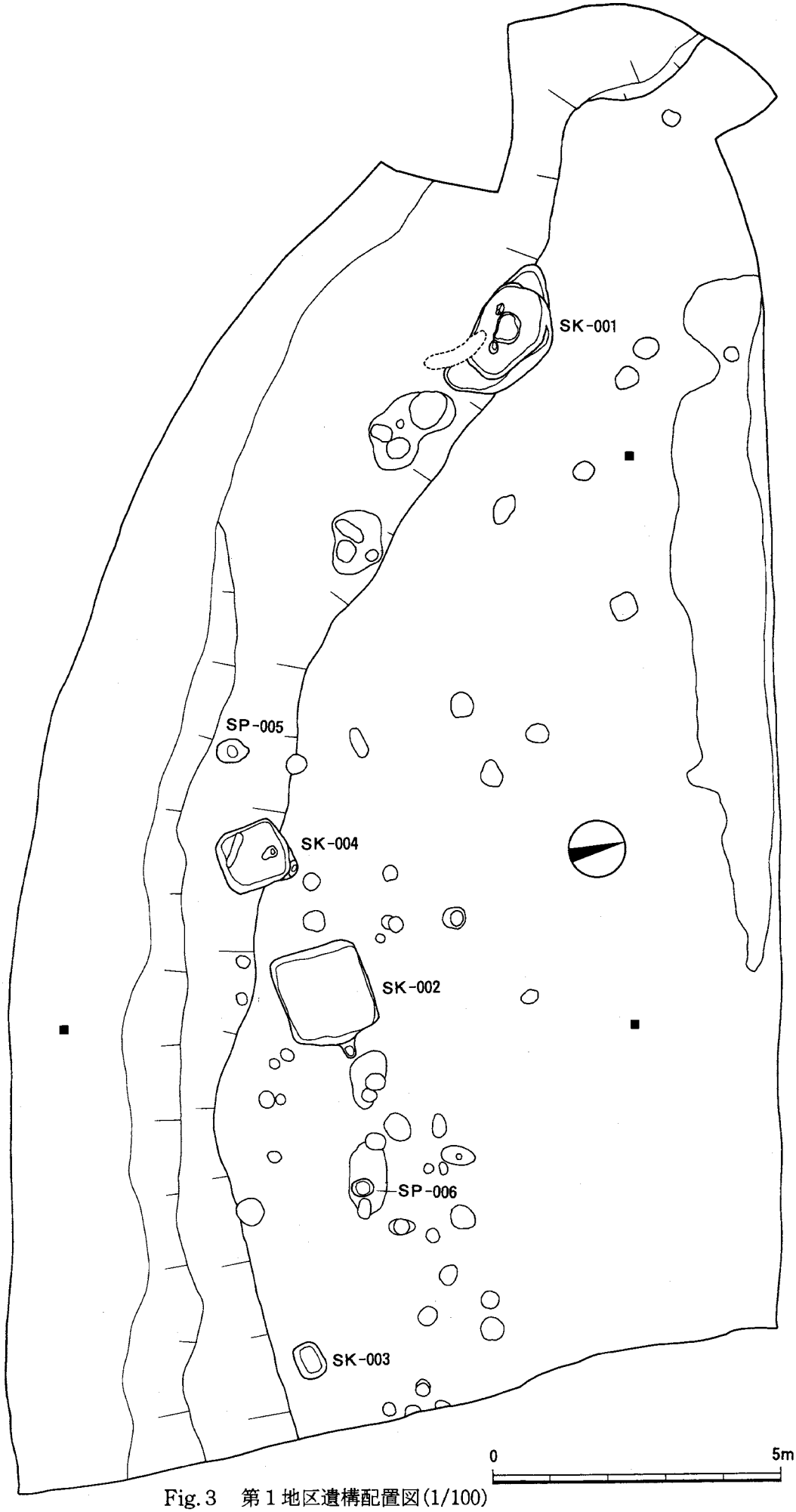



Fig. 3　第１地区遺構配置図(1/100)

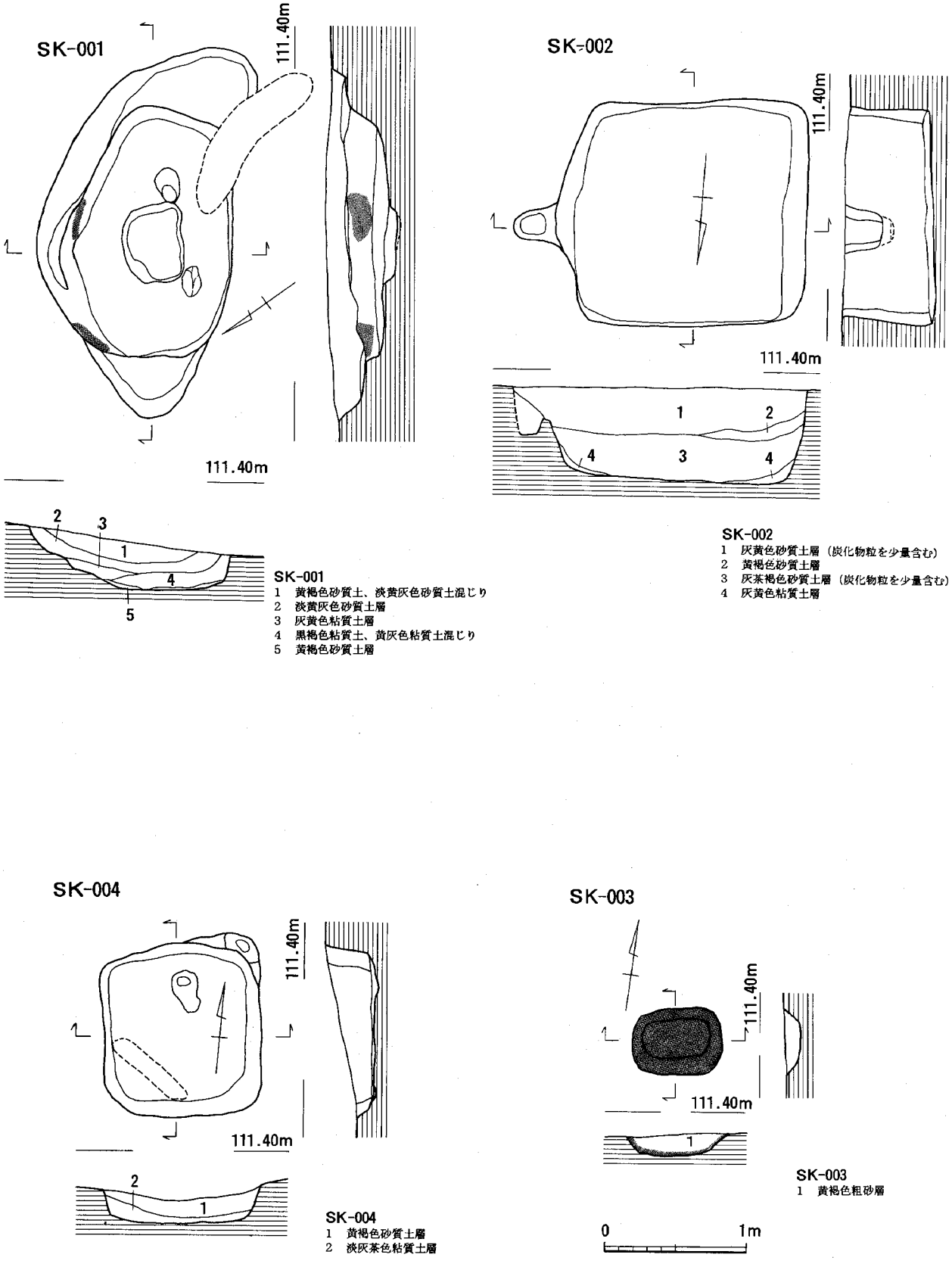



Fig.4　土坑（ＳＫ）実測図（1/40）

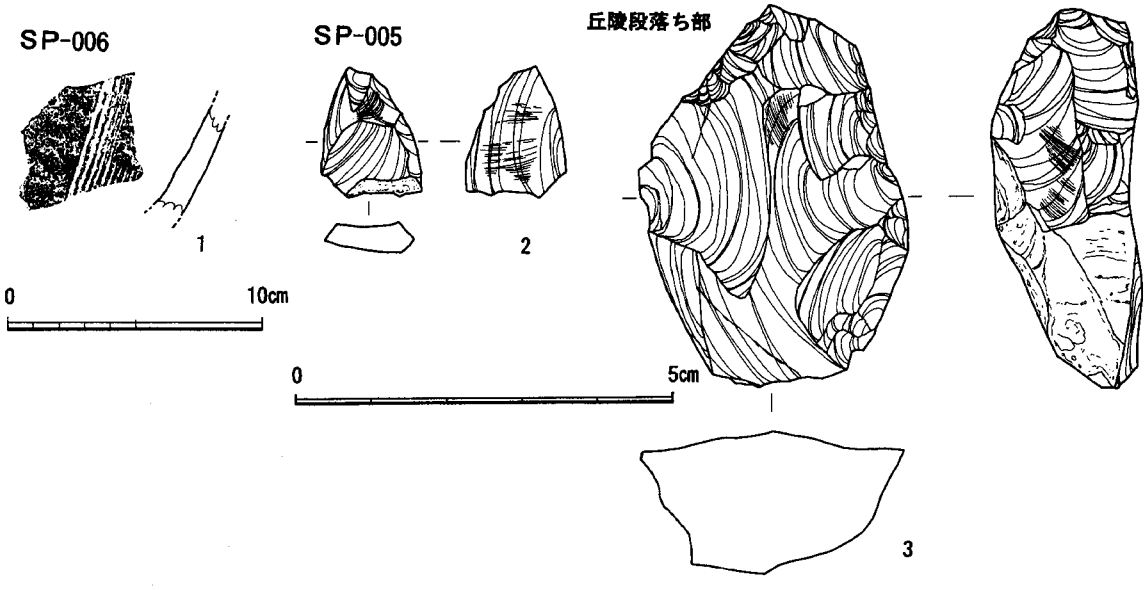



Fig. 5　出土遺物実測図（1/3、1/1）

**出土遺物**（Fig. 5　1～3）

出土遺物は非常に少なく、図示したもの以外では、丘陵段落ち部から土師器坏・小皿の小片、土鍋、瓦質土器片、備前焼片が少量出土したのみ。

**1**は備前焼擂鉢。SP-006出土。胎土はやや橙色がかった淡灰色を呈し、細かな白色砂粒を含む。焼成は良好で硬質。**2**は黒曜石剥片。片面には主要剥離面を残し、大剥離面の剥離方向は不定。二次加工または使用痕等は認められない。SP-005出土。**3**は黒曜石石核。裏面に自然面を残しており、正面と側面の一部のみを剥離作業面としているが、主要剥離面が多く残っており、剥離作業途中で放棄したものと思われる。北側丘陵段落ち部出土。

## 3．まとめ

現在は幅10m以上の平坦地になっているが、調査区北側には遺構が広がらないことと全体的な地形から遺構が掘られた時点では丘陵の南側斜面のやや傾斜の緩やかな程度の立地ではなかったかと考えられる。遺構は炭焼と考えられる焼土坑と方形の土坑である。２基の土坑は床面を平坦につくっており、また掘削の深さもしっかりしていることからも山中の道具小屋や仮設の小屋であった可能性も考えておきたい。

# 第２節　第２地区の調査

## １．　調査の概要

第２地区調査地点は調査対象地全体の南西側に位置し、尾根上の平坦面が最も奥まった部分に設けられる。試掘段階では調査区全体の中で比較的遺構が濃く検出された箇所で、現地は現況では水田面の段差があるが、ほぼ平坦と考えてよい。東側は急峻な崖となり、南側は未削平の斜面で、遺構がのる平坦面とは明瞭に区別される。調査区より西側では試掘段階で、遺構は検出されておらず、水田造成時に削平されたと考えられる。

調査区は、切り土造成により遺構面が削られる部分と、水路施工の部分におよび、調査面積は488㎡で、遺構は調査区のほぼ全体に分布している。遺構面は水田耕作土直下で検出され、粘性の高い明黄色～薄黄色シルト層に遺構が掘込まれている。遺構の多くは黒色粘土を覆土としており、地山とは明瞭に区別できるが、遺構の切り合いが不明瞭で、一部の柱穴の切り合いが明らかでない。検出された遺構は柱穴、焼土坑、溝状遺構で、柱穴の中で掘立柱建物を2棟構成する。出土遺物は量的に多く、遺物の大部分が近世に属する。

なお、調査に当たっては、撹乱を除く遺構のうち、土坑、焼土坑、主要な柱穴に遺構番号を通して付け、掘立柱建物の遺構番号は全遺構が最終的に確定した後に決定した。

## ２．　検出遺構

1）掘立柱建物（SB）

SB-**132**（Fig. 7）

調査区西側で検出した、建物規模2間×2間の総柱建物である。梁全長300～350cm、桁全長390～400cm、推定床面積12.8㎡で、建物主軸方位はN-28°-Eである。柱痕埋め土は黒褐色粘質土で、柱穴径は40～60cmと比較的大きく、現況での柱穴掘り方も深いが、柱痕は検出されていない。柱穴の配置は、北側、東側で各々幅広くなり、若干歪んだ四辺形を呈する。また中央柱穴と東側中央柱穴は複数の柱穴が重複し、建物を構成する柱穴の確定が難しい。柱穴は他の柱穴との切り合いが見られるが、切り合いの明瞭なものはない。

**出土遺物**（Fig. 8　4）　**4**は唐津焼皿。淡灰色の硬陶質の素地にわずかに黄味がかった白濁不透明釉がかかる。体外面下位は露胎。見込みに３ヶ所砂目が残る。高台径4.0cm。**5**は土師質土器擂鉢。胎土は粗砂粒を多量に含み、粗い。体外面はハケ目調整を施すが、下位には指押えの痕が顕著に残る。共にSP-075出土。他に土鍋片が出土。遺構の時期は17世紀初頭～前半と考えられる。

SB-**133**（Fig. 7）

調査区西側で検出した、建物規模２間×２間の総柱建物である。梁全長432～460cm、桁全長438～470cm、推定床面積20.2㎡で、建物主軸方位はN-42°-Eである。柱痕埋め土は黒褐色粘質土で、柱穴径は35～60cmと大きく、柱穴掘り方も深いが、SB-131と同じく柱痕は検出されていない。柱穴の配置は西側で広がり、やや歪んだプランになる。SB-131と重複するようにして位置するが、SB-131との前後関係は明らかでない。

**出土遺物**(Fig.8　6)　**6**は肥前系染付碗。口径11.2cm。他に出土遺物はなく、詳細な遺構の時期は不明であるが近世と思われる。

## ３．　土坑・焼土坑（SK）（Fig. 9）

第2地区区内で多数の土坑、焼土坑が検出されたが、紙面の都合で全てに言及することができない。以下、特徴的な遺構のみ取り上げざるをえないことを了承されたい。

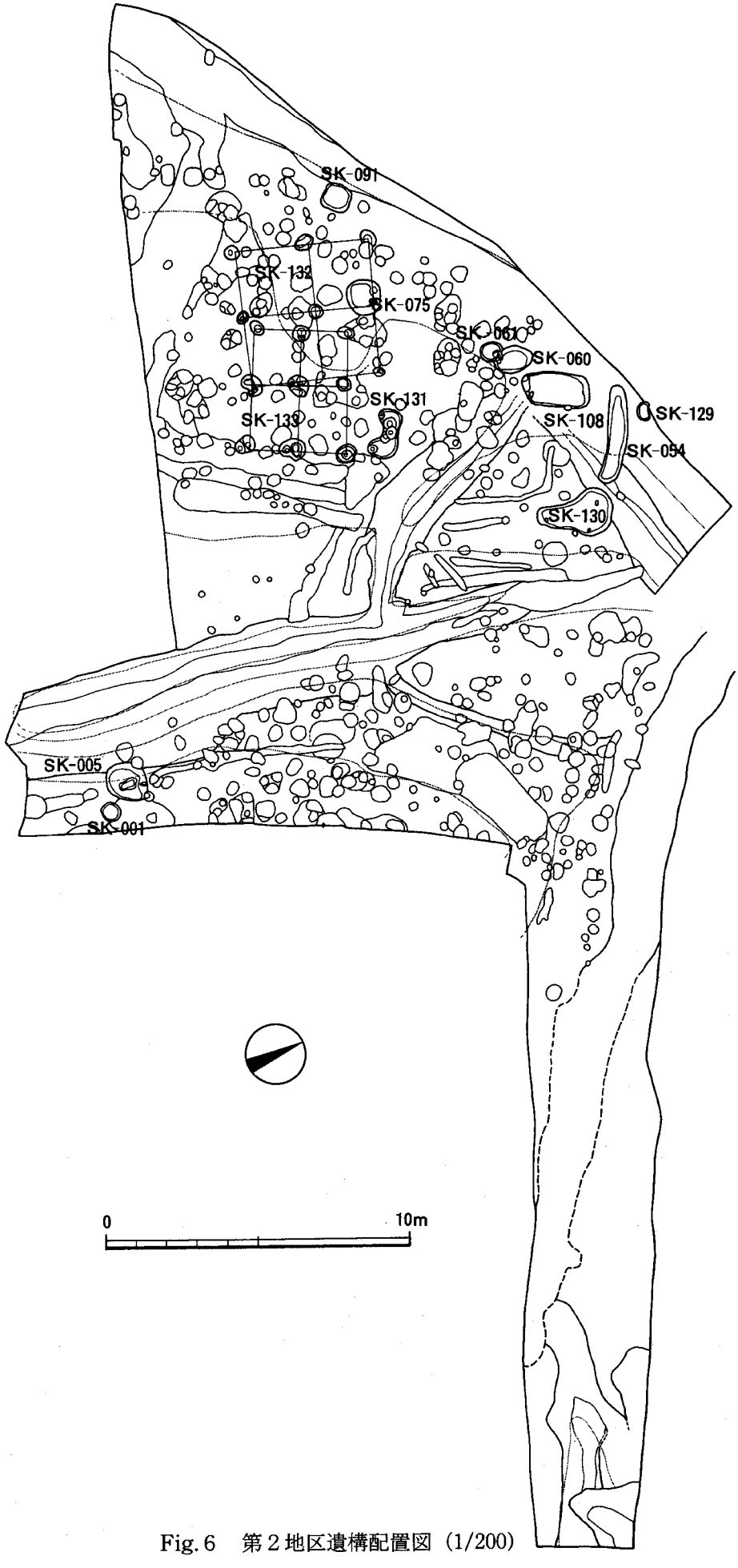



Fig. 6　第２地区遺構配置図（1/200）

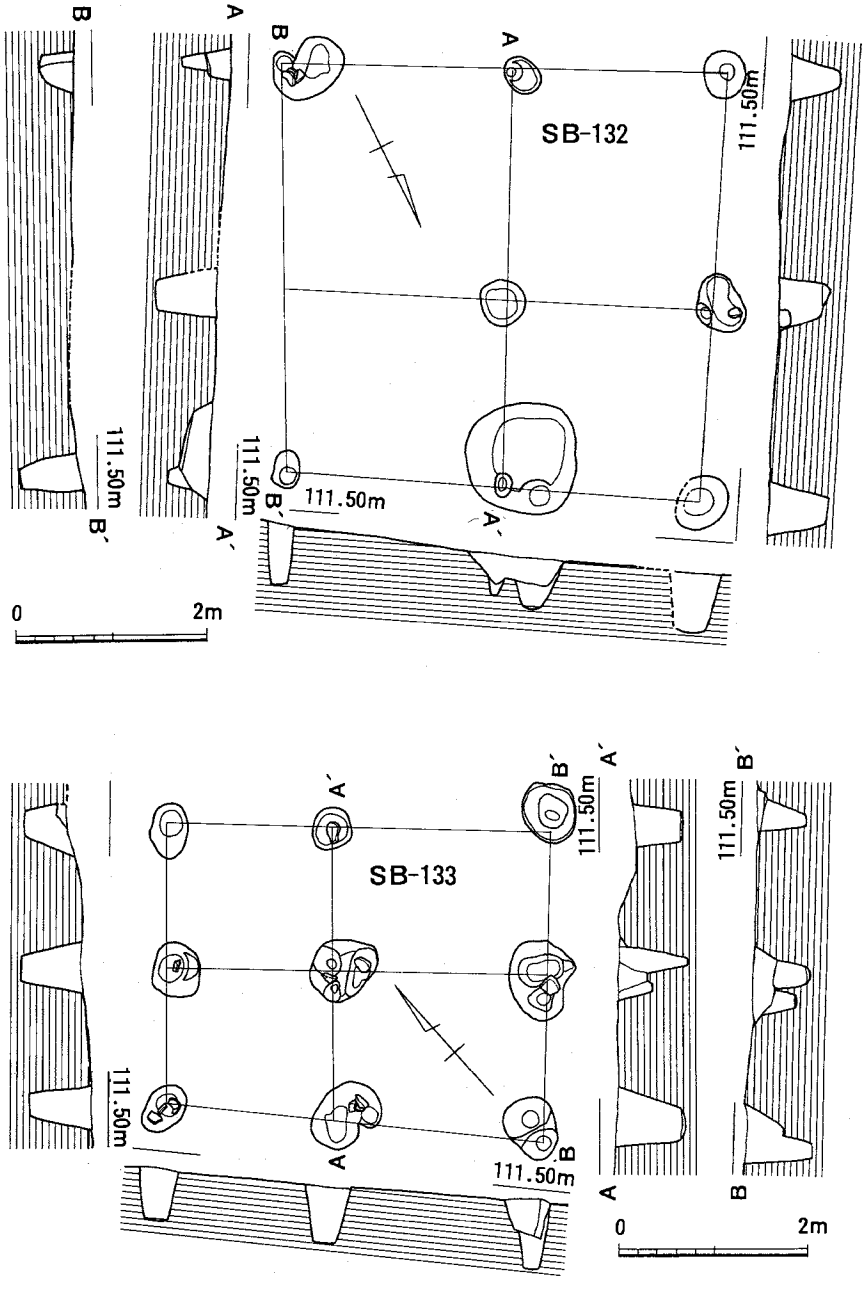



Fig. 7　掘立柱建物（SB）実測図（1/80）

**SK-001**

円形の土坑で、遺存状況が悪く床面付近のみ遺存する。直径65cmで、覆土に炭化物を多量に含む。本来焼土坑であった可能性がある。

**SK-005**

略楕円形の土坑で、径1.3m前後を測る。遺存状況は悪く、西側を大きく欠く。底面は平坦で、中央にピットが入る。土坑の性格などは不明。

**出土遺物**　唐津焼溝縁皿の破片が1点のみ出土。出土遺物が少なく不明瞭であるが、遺物から遺構の時期は17世紀初頭～前半と考えられる。

**SK-026**

円形の土坑で、直径1m前後を測る。底面は平坦で、壁面は直に立ち上がり、全体として円筒状を呈する。覆土は暗灰褐色土で、炭化物粒を含む。

**SK-054**

溝状の遺構であるが、削平が著しく本来の形状が不明なため、土坑としている。現存長3.2m、最大幅64cmで、現況ではごく浅い。区画溝の可能性があるが、方向など確定できない。出土遺物は土器片が1点出土したのみ。時期は不明。

**SK-060・061**

060は楕円形の土坑、061は円形の土坑で、061が060を切る。両者の接点付近に積み石があり、標石とも

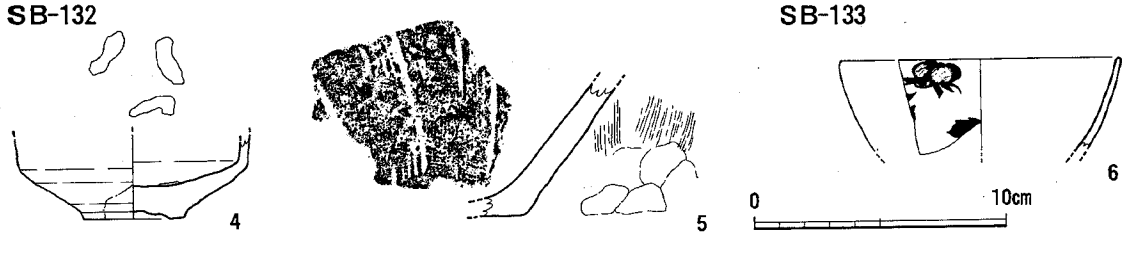



Fig. 8　第2地区出土遺物実測図（1）（1/3）

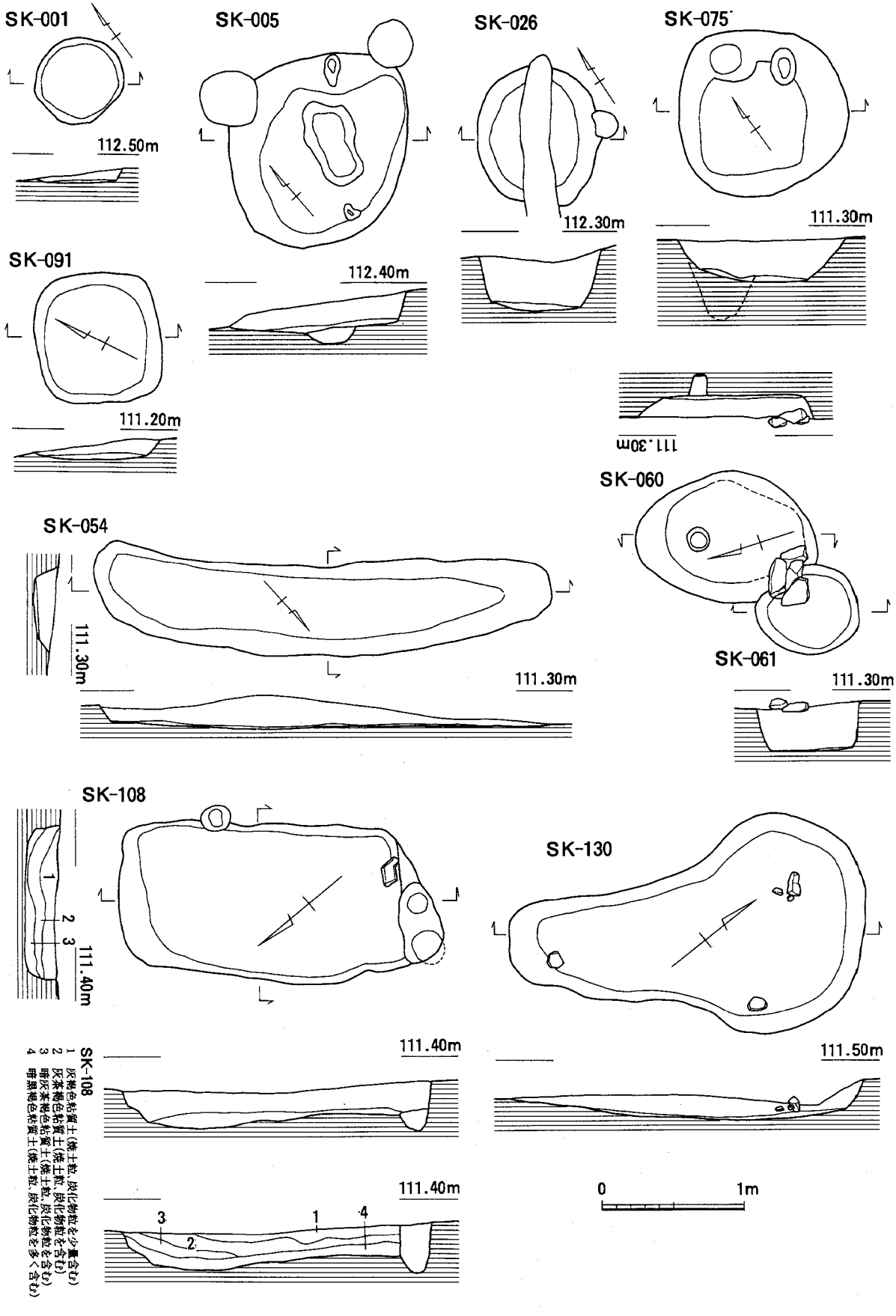



Fig. 9　土杭（SK）実測図（1/40）

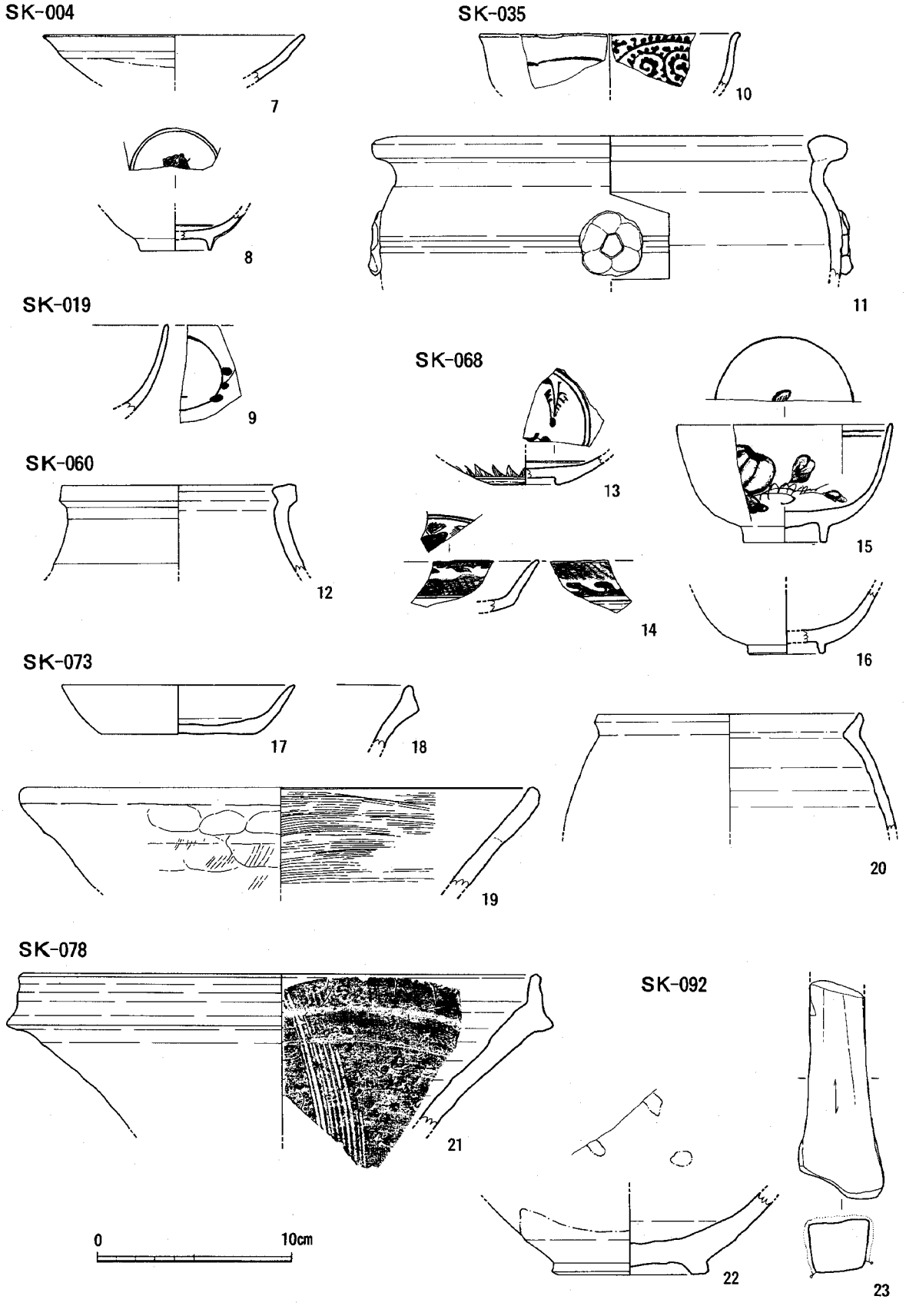



Fig.10　第２地区出土遺物実測図（２）（1/3）

考えられるがはっきりしない。

**出土遺物** (Fig.10　12)　　出土遺物は図示した１点のみ。**12**は施釉陶器壷。口縁端部は内面に突出し、外面は断面四角形に肥厚する。砂粒を多く含む淡褐色の粗い素地に暗緑茶色の不透明釉がかかる。内面には叩き成形のあて具痕が残る。口径12.0cm。国産と思われる。SK-061からは瓦質土器火鉢片が１点出土。時期は不明。

SK-075

隅丸方形の土坑で、幅1.2m、床面の幅75cm。床面はほぼ平坦で壁面は大きく開いて立ち上がる。

SK-091

方形の土坑で、大きく削平される。現況で幅90cm前後を測る。床面は平坦で壁は緩く立ち上がる。

SK-108

長方形を呈する焼土坑。全長212cm、幅110cmで、全調査地点中で最大規模の焼土坑である。床面はほぼ平坦で壁は直に立ち上がる。被熱は強く受けた痕跡はない。覆土には炭化物を多く含む。

**出土遺物** (Fig.10　26・27)　　土師器片、国産陶磁器(肥前系)、明代青花片が出土。**26**は肥前系染付手塩皿。内底を輪状に釉剝ぎする。口径11.2cm。**27**は肥前系染付筒型湯呑み碗。外面に山水文を描く。口径6.6cm。出土遺物が少なく不明確であるが、遺構の時期は18世紀代～19世紀初頭か。

SK-129

調査区北側で検出された焼土坑で、大きく削平を受け、床面付近のみ遺存する。現況で全長60cm。北東側は完全に失われている。壁面は薄く被熱し、覆土は炭化物を多く含む灰色粘土である。

SK-130

不整形の土坑で、大きく削平され、本来の形状は不明。床面には若干の凹凸が見られ、転石なども混入する。北側の壁は緩く立ち上がり、南側は現況では立ち上がりは見られない。

**出土遺物** (Fig.10　29)　　出土遺物は図示したもののみ。**29**は瓦質土器火鉢。胎土は砂粒を多く含み、焼成が不十分でやや軟質。口縁は短く直立し、肩がはる。磨滅が著しく不明瞭であるが、体外面にかすかにハケ目調整痕が残る。口径13.4cm。

その他の遺構出土の遺物を以下に挙げる。(Fig.10、11)

**7**は唐津焼皿。淡褐色の軟陶質の素地に白濁した不透明釉がかかる。体外面下半は露胎。口径13.4cm。**8**は肥前系青磁染付碗。内面は白磁釉、外面は青磁釉にかけ分けられ、見込み中心にコンニャク印判によ

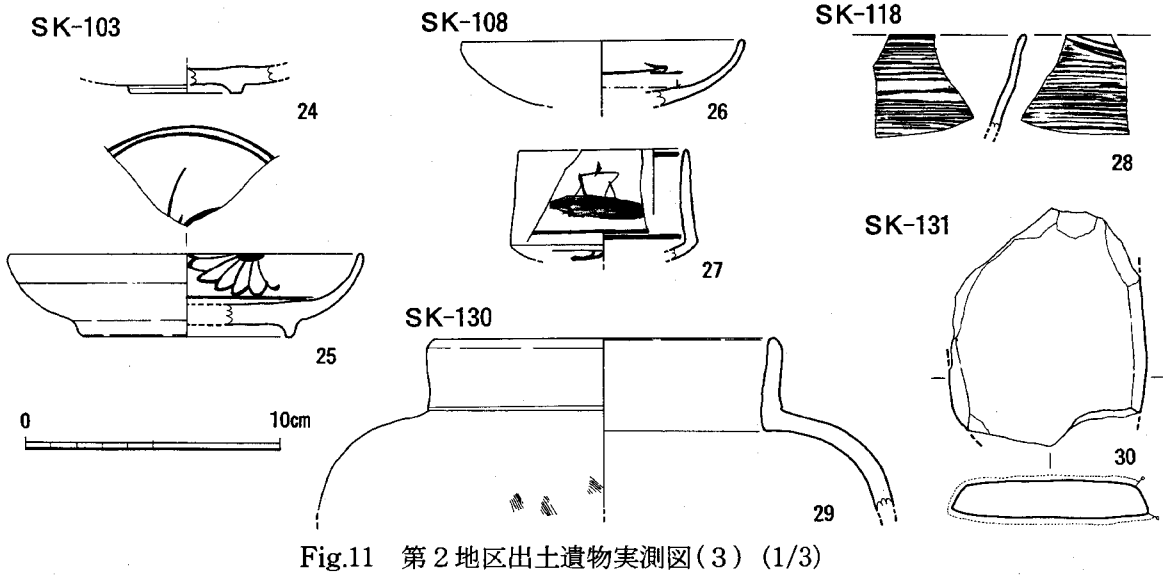



Fig.11　第２地区出土遺物実測図(３) (1/3)

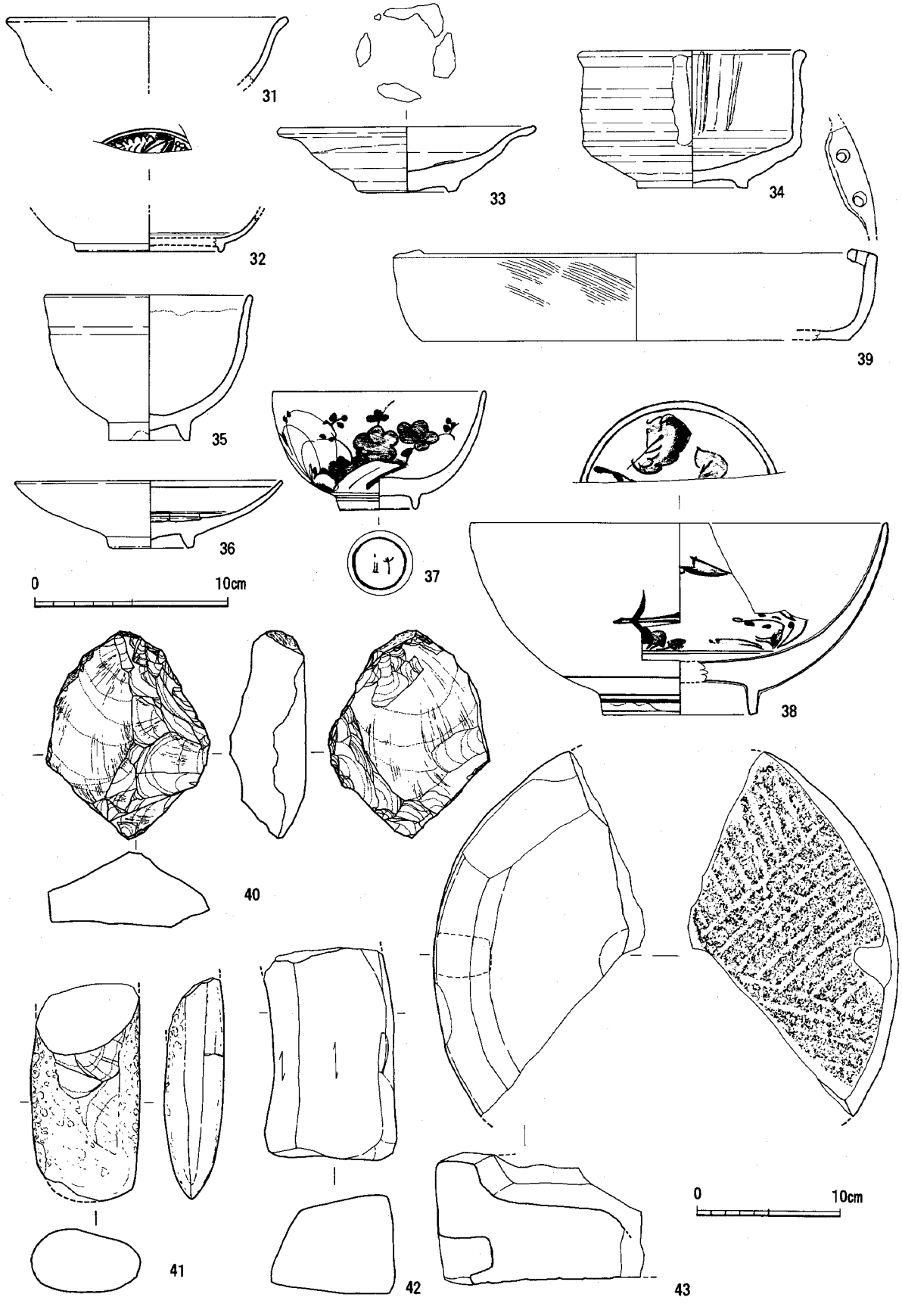



Fig.12　第２地区出土遺物実測図（４）（1/3・1/4）

り染付けされる。全面施釉後、畳付けを釉剝ぎする。高台径3.7cm。**8**は肥前系青磁染付碗。内面は白磁釉、外面は青磁にかき分けられ、全面施釉後畳付けを釉剝ぎする。**9**は肥前系染付碗。いわゆる"くらわんか碗"で外面に草花文を描く。18世紀前半～中頃のものとみられる。**10**は肥前系染付鉢。輪花口縁で、内面には蛸唐草文が描かれる。口径13.4cm。**11**は土師質土器鉢。胎土は明橙色で砂粒を多く含む。口縁はT字状に内に折り返し、肩部には花弁を貼付する。口径24.6cm。火鉢と考えられる。

**13**は明代青花碁笥底皿。全面施釉後、畳付けを釉剝ぎする。底径は3.2cm。15世紀後半～16世紀代。**14**は肥前系染付皿。内外面に波涛文が描かれる。**15**は肥前系染付碗。やや薄手の丸碗で高台が高い。口径11.2、器高6.1、高台径4.4cm。全面施釉後、畳付けを釉剝ぎする。**16**は施釉陶器碗。淡灰白色の硬陶質の素地に白濁した海鼠釉がかかる。高台外面から内面は露胎。高台径4.0cm。**17**は土師器坏。磨滅が著しく調整等は不明。口径12.0、器高2.5cm。**18**は須恵質土器鉢。口縁端部はやや上方へ引き上げ気味で、外面は断面三角形に肥厚する。東播系。**19**は瓦質土器鉢。内外面共にハケ目調整を施すが、外面は雑なため指押えの痕が顕著に残る。口径26.8cm。**20**は中国陶器B群鉢。口縁は「く」の字形に短く屈折する。釉は発色が悪く、白濁した不透明釉で、口縁内面まで施釉される。口径13.6cm。**21**は備前焼擂鉢。口縁は下方へ拡張する。口径26.4cm。内面の擂目は10本が１単位。備前焼編年Ⅳ～Ⅴ期。

**22**は唐津焼鉢。褐色～橙褐色の粗胎に暗茶色の不透明釉がかかる。体外面下位は露胎。見込みには目跡が残る。高台径8.2cm。17世紀前半頃か。**23**は砥石。石材は硬質砂岩。一側面を残して他はすべて使用している。**24**は唐津焼皿。淡灰褐色の粗い素地に、暗オリーブ色の半透明釉がかかる。高台外面から高台内は露胎。高台径は4.4cm。17世紀前半頃か。**25**は肥前系染付皿。口径14.0、器高3.3、高台径8.4cm。内面に菊花散らし文を描く。全面施釉後、畳付けを釉剝ぎする。18世紀中～末か。**28**は唐津系刷毛目碗。灰白色の硬陶質の素地にわずかに黄味がかった透明釉がかかる。釉下に刷毛により白泥を塗布する。17世紀末～18世紀前半代か。**30**は砥石。一側面以外はすべて使用。

## 4．その他の遺物 (Fig.12　31～43)

**31**は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類。口径14.6cm。14世紀中頃～後半か。**32**は明代青花皿と思われる。畳付けを釉剝ぎする。高台径7.8cm。16世紀前半代を主体とする端反り皿か。遺構面出土。**33**は唐津焼溝縁皿。淡橙色軟陶質の素地に白濁した淡褐色不透明釉がかかる。体外面下半は露胎。見込みに4ヶ所砂目が残る。口径13.4、器高3.4、高台径5.2cm。17世紀初頭～前半。**34**は唐津焼鉢。淡赤褐色の粗胎に、暗オリーブ色の不透明釉がかかる。外面高台脇から外底にかけては露胎。体部外面から４ヶ所を縦方向に押圧し、体部は瓜割状になる。口径12.0、器高7.2、高台径5.8cm。17世紀代か。遺構面出土。**35**は肥前系かけ分け碗。内面は白磁釉、外面から口縁内面にかけては鉄釉がかかるが、全く発色していない。畳付けから外底にかけては露胎。口径10.8、器高7.6、高台径4.2cm。17世紀前半～中頃。**36**は肥前系染付皿。全面施釉後、見込みを輪状に釉剝ぎする。口径14.0、器高3.5、高台径4.4cm。17世紀後半～18世紀前半か。**37**は肥前系染付碗。"くらわんか"碗で、外面に草花文を描き、外底に銘を染付けする。口径11.2、器高6.2、高台径4.1cm。18世紀前半～中頃。遺構面出土。**38**は肥前系染付大形鉢。釉はかなり厚い。全面施釉後、畳付けを釉剝ぎする。口径22.0、器高10.0、高台径8.0cm。内面に草花文を描く。遺構面出土。**40**はScraperか。サヌカイト製。表面に粗い剝離調整を施し、裏面には主要剝離面が大きく残る。片側縁辺にのみ粗い二次加工を加え、反対側には原石面が残る。使用痕は認められず、未完成品と思われる。**41**は磨製石斧。石材は玄武岩。全体に風化が著しく不明確であるが、刃部のみに研磨が施されたと思われ、他部分には剝離調整と啄彫痕が残る。表土出土。**42**は砥石。石材は硬質砂岩。全面を使用する。**43**は石臼。上臼で直径は32.8cm。側面に把手を差し込むための穿孔がある。下面には刻み目が入るが、使用のため磨滅が著しい。

# 第３節　第３地区の調査

## １．調査の概要

調査地は調査対象地全体のほぼ中央部に位置し、南西から北東へ高度を下げながらのびる台地上にあたる。台地の東側の傾斜は緩やかで数件の民家がみられるが、西側には川が流れ崖状に急激に落ちる。調査区は神社の北側を取り巻く形に設定し、1,180㎡調査を行った。現況は水田で、標高は97.5～96mを測る。遺構検出面は黄褐色ローム層の上面であるが、削平の著しい部分もあり、ところによっては下の礫層がみられるところもある。遺構は柱穴、土坑、焼土坑を検出した。また、遺構掘削終了後２×２ｍのグリッドを調査区内に８箇所設定しローム層の掘削を行ったが遺構・遺物は確認されなかった。

## ２．検出遺構

SK-**001** (Fig.14)

西側調査区南西隅にて検出した。平面は長軸２ｍの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。遺構壁の上部は被熱のため赤色化している。床面はほぼ平坦で、特に被熱などによるによる変化はみられないが、直上に炭化物層が覆っている。床面からやや浮いた状態で５～30cm大の石が40個ほど確認された。出土遺物はない。

SK-**002** (Fig.14)

西側調査区東寄りにて検出した。残存が悪く深さ約５cmほどで本来の平面形は不明であるが、現存で長軸約１ｍを測る。床面の大半は被熱により赤色化しており、上面には炭化物層がみられた。出土遺物は検出されていない。

SK-**003** (Fig.14)

西側調査区SK-002の東側にて検出した。規模は長軸1.3m、短軸75cm、深さ20cmを測り、平面は長楕円形を呈する。床面は船底形で中央部がもっとも深くなっている。残存する壁の上半部は被熱のため赤色化している。

**出土遺物** (Fig.15　44、45)

**44**は青白磁小碗。胎土は白色で精良、白色の半透明釉がかかる。かなり薄手で内面に陽刻印花文がある。恐らくロハゲになると思われる。**45**は中国産陶器A群盤と思われる。釉はほとんど剝落しているが、黄緑色の不透明釉が内外にかかる。内面に叩きのあて具痕がかすかに残る。遺構の時期は出土遺物が少なく不明瞭であるが、**44**の遺物から14世紀前後～前半代と思われる。

SK-**004** (Fig.14)

東側調査区の西寄りにて検出された。平面は不定形を呈し、２つの遺構の切り合いにもみえるが土層断面の観察から一つの遺構であることが裏付けられた。南側に比べ北側が約20cm深くなっており、覆土には炭化物や焼土の粒が混じる。

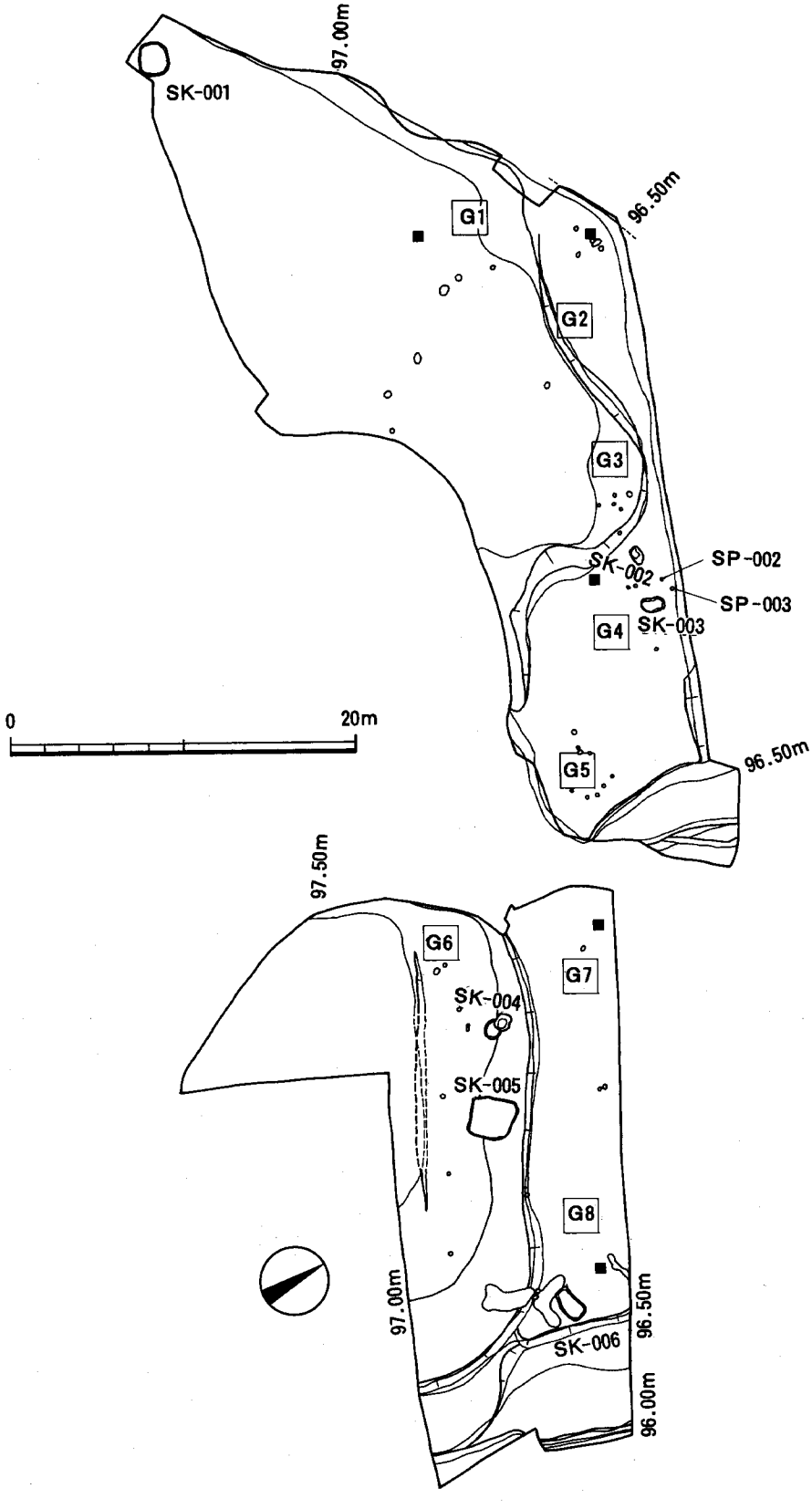



Fig.13　第３地区遺構配置図（1/400）

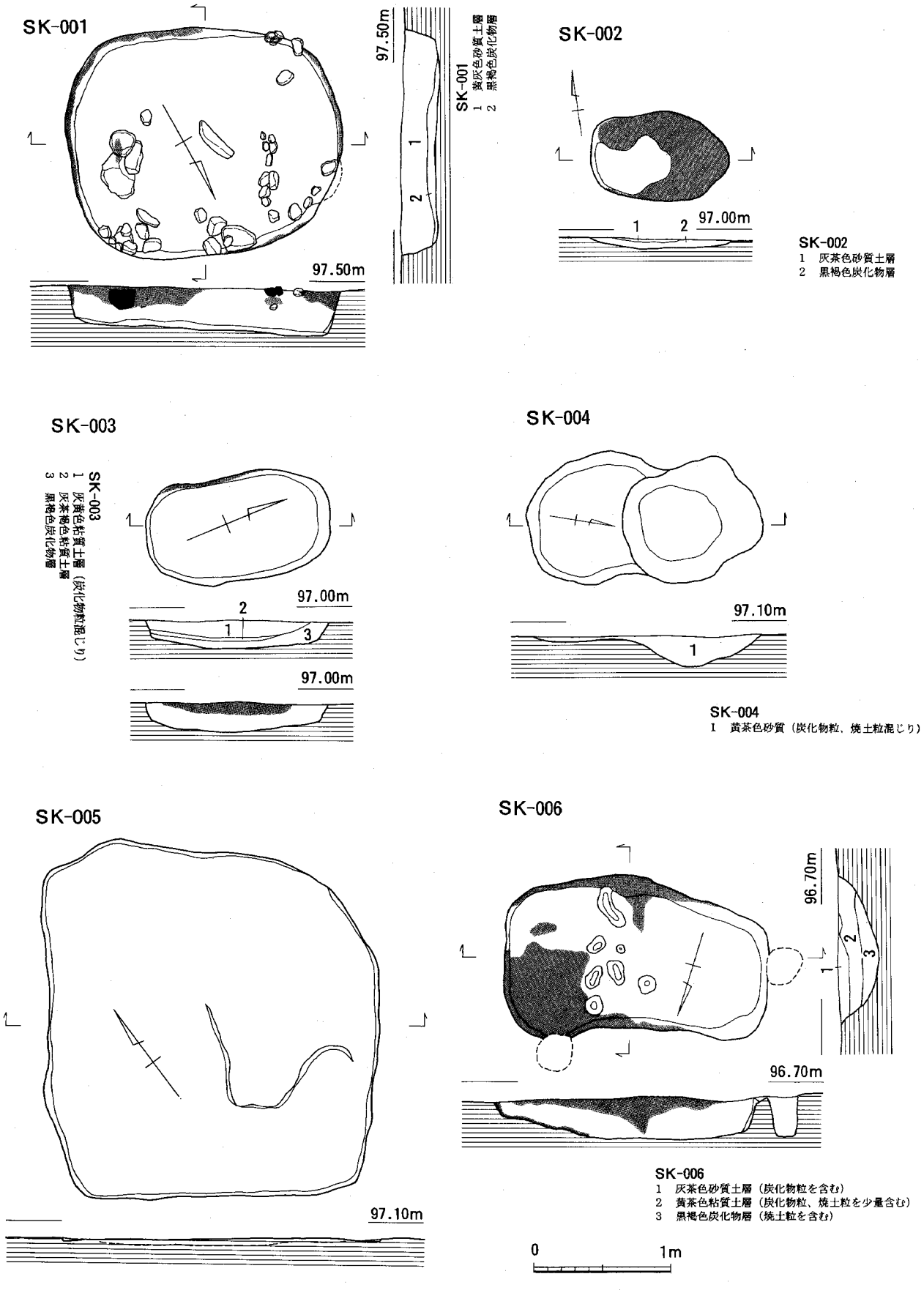



Fig.14　検出遺構実測図（1/40）

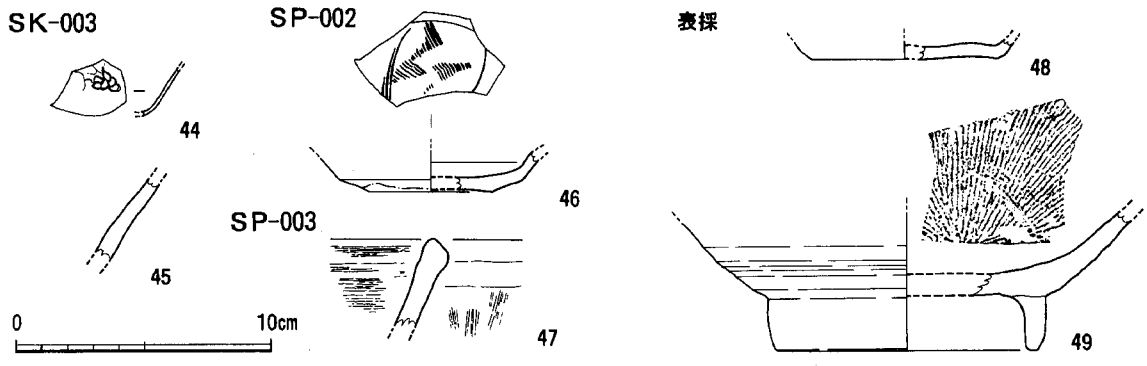



Fig.15　出土遺物実測図（1/3）

SK-005（Fig.14）

東側調査区のほぼ中央にて確認された。残存の良好な部分でも約３cmほどで全体のプランは不明である。遺構は南から北にかけて緩やかに傾斜するところに位置し、図化した範囲のみ地山の黄褐色土がやや黒く濁っていたため調査を行った。断定はできないがプランはほぼ方形を呈すると考えられるが、この遺構に伴うと考えられるピットなどはみられなかった。遺物は出土していない。

SK-006（Fig.14）

東側調査区の東側にて検出した。平面は略隅丸長方形を呈し、長軸1.9m、幅1.0m、深さ30cmを測る。床面の一部と壁の上部が被熱のため赤色化している。床面の西側はほぼ平坦であるが東側に向かって徐々に高くなっている。また、中央部に小さい不定形のへこみがいくつかみられるが不規則に蛇行することから遺構廃棄後の植物根の痕跡と思われる。出土遺物はない。

**その他の遺物**（Fig.15）

（SP-002）**46**は同安窯系青磁皿。釉調は透明の淡青色で外底は露胎となる。内面には櫛描文が施される。底径4.8cm。12世紀中頃～後半代。　（SP-003）**47**は土師質土器鍋と思われる。口縁端部がやや外に肥厚し断面形は鈍い三角形を呈する。胎土は橙褐色で白色の砂粒を多く含む。内外面ハケ目調整を施す。　（表採）**48**は土師器小皿。糸切り。底径7.4cm。**49**は国産陶器擂鉢。全面に鉄釉がかかる。高台は高く貼り付で、畳付け内外に砂粒が付着する。高台径10.2cm。

## 3．まとめ

遺構の密度は比較的薄いものであったが焼土坑４基、土坑を調査した。焼土坑は平面形からそれぞれタイプのことなるもので001は円形、002、003は小型で長楕円形、006は隅丸の長方形を呈する。今回の調査で60基ほどの焼土坑が調査されたが遺物を伴うものはたいへん少ない。そのなかで、SK-003からは14世紀代の遺物が出土しており注目されるが、第４章の分析結果と符合しないものである。今後の資料の増加を待ちたい。

# 第4節　第4地区の調査

## 1．調査の概要

第4地区調査地点は調査対象地全体のほぼ中央部分に位置し、第3地区の北側に近接して設定した。ほ場整備地内の道路部分の調査にあたる。調査区のうち、西側～中央部分は台地上の平坦面にあたり、東側は段丘端部の斜面に沿って緩く東に傾斜する。試掘結果によると、4区周辺を含む一帯には広く遺構が分布しているが、遺構面が表土直下で検出されたことなどを考慮すると、かなりの削平は受けたものと考えられる。

調査区は北に長く伸びる台地をほぼ横断する形で、調査面積は1,896㎡。遺構は黄褐色ローム層の上面で検出される。検出された遺構の種類は土坑、焼土坑、ピットで、土坑のうち1つは土壙墓の可能性もある。遺物の出土量は少ない。

なお、遺構が掘込まれるローム中に、鳥栖ローム形成時のものと見られる風倒木が良好な形で検出されたが、ここでは報告を控える。この際、九州大学の下山正一先生よりご教示をいただいたことをここに記して感謝する次第である。

## 2．検出遺構

SK-001（Fig.17）

調査区南側の斜面上段で検出した、焼土坑である。平面プランは不整形で、大部分削平され、床面のみ遺存する。床面は凹凸が著しく、焼土、炭化物が詰まる。遺構壁は被熱が弱い。

SK-002（Fig.17）

調査区南側斜面で検出した焼土坑である。平面プランは不整形。大部分削平され、床面のみ残存する。床面は平坦で、炭化物が覆土として堆積する。床面の小孔は焼土坑以後に穿たれたものである。

SK-003（Fig.17）

調査区南側の斜面上段で検出した、焼土坑である。平面プランは不整形。大部分削平され、床面のみ残存する。遺構壁の焼けは弱く、覆土中に炭化物が遺存するのみである。

**出土遺物**（Fig.18　50）

出土遺物は図示した1点のみ。50は瓦質土器鉢。外面にかすかに指押さえ痕残る。内面は磨滅が著しく擂目があったかどうかは不明。底径7.6cm。

SK-004（Fig.17）

調査区南側の斜面下段で検出した、焼土坑である。平面プランは長方形とみられるが、大部分削平され、床面のみ残存する。覆土中に炭化物が多く含まれ、壁面上端が熱を受ける。遺構内の小孔は焼土坑以後のものである。

SK-006（Fig.17）

調査区南側の斜面下段で検出した、焼土坑である。平面プランは長方形で整う。断面形は緩く上方に開き、壁と床面の境界の屈曲は弱い。床面は南側でごくわずかに窪む。床面北側で、炭化した木材が操業当時のものと思われる状態で検出されている。木材は土坑長辺に平行に並べられ、数段に積み

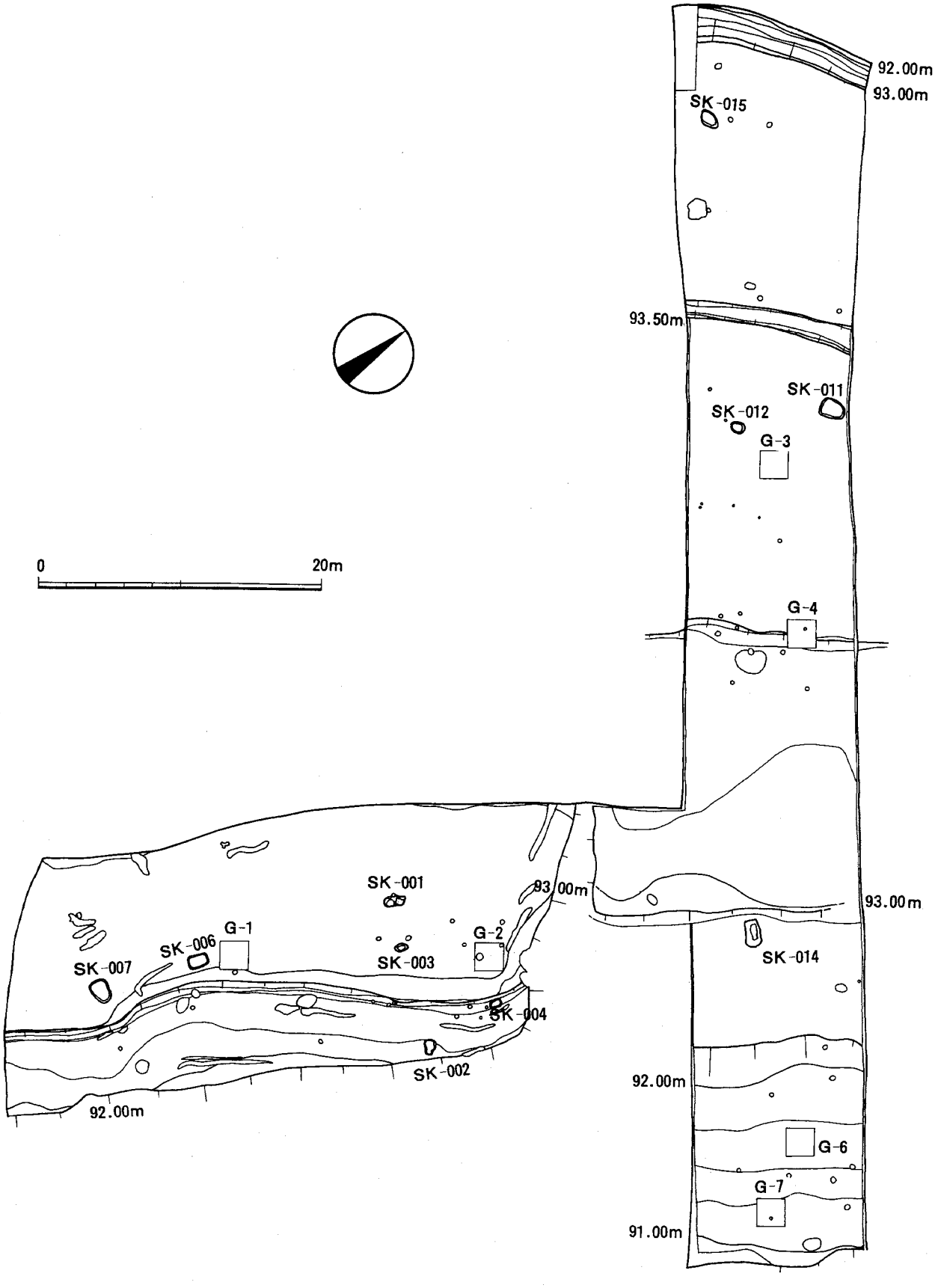



Fig.16　第４地区遺構配置図（1/400）

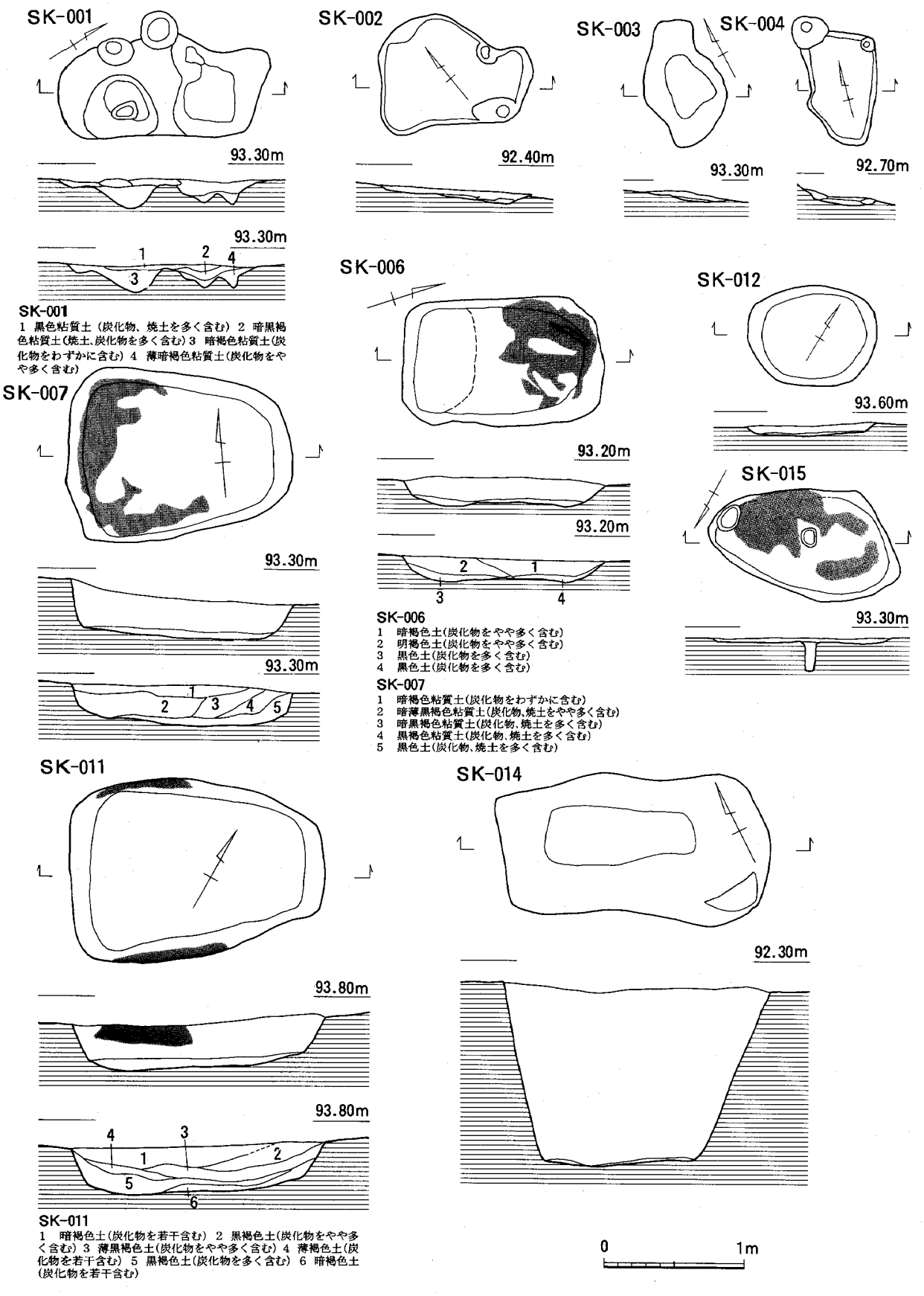



Fig.17　検出遺構実測図（1/40）

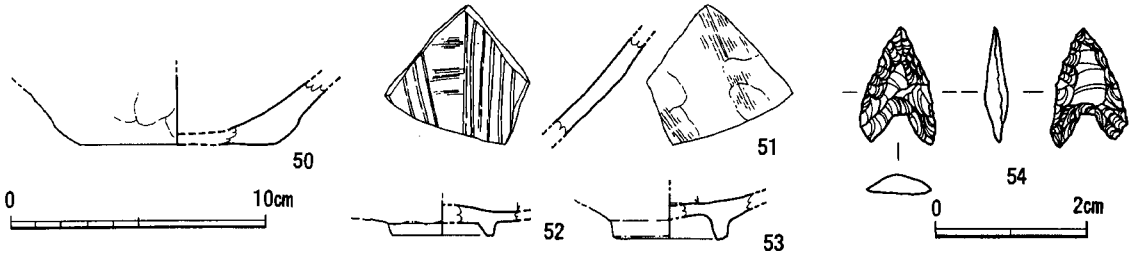



Fig.18　第４地区出土遺物実測図（1/3、1/1）

上げられ、製炭されていたものと考えられる。

SK-007（Fig.17）

調査区南側の斜面下段で検出した、焼土坑である。平面プランは台形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁面全体が強い熱を受けているが、特に西側で被熱が大きい。西側で炭化物が固まった状態で出土したが、遺存状態が悪く、個々の木材の単位や、方向は判明しない。

SK-011（Fig.17）

調査区西側の平坦面で検出した、焼土坑である。平面プランは台形を呈する。壁面は断面でやや開きぎみに立ち上がり、西側の両サイド上側で特に強く被熱する。覆土は軟質で、床面に炭化物を多く含む土が厚く堆積する。

SK-012（Fig.17）

調査区西側の平坦面で検出した焼土坑で、SK-11と近接する。大きく削平され、床面のみ遺存する。平面形は楕円形で、床面は平坦で皿状になる。覆土は炭化物を多く含む。壁、床面の被熱は弱い。

SK-013

調査区東端の斜面上で検出した、焼土坑である。大部分削平され、床面のみ残存する。平面形は不整形だが、本来は長方形か台形になる可能性もある。床面に２～３cmの厚さで焼土が堆積する。壁面の崩落に伴うとも考えられる。土坑内の小孔は焼土坑以後のものである。

SK-014（Fig.17）

調査区ほぼ中央の、台地頂部の平坦面から下りた地点に位置する土坑である。平面形は略長方形で、土坑南側は２段掘りの様相を示す。下端コーナーは不明瞭で、緩くカーブをもって壁面へと立ち上がる。また壁面に数ヵ所大きくえぐれた部分がある。遺構覆土はきわめて軟質の粘土で、床面から地表部までほぼ均質である。遺構の性格として、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

以上の報告のほかに、調査区東側の包含層から遺物が出土している。(Fig.18　51～54)
**51**は瓦質土器擂鉢。外面はハケ目調整を施すが、雑で指押えの痕が残る。**52**は施釉陶器碗。淡黄褐色の軟陶質の素地に明黄褐色の半透明釉がかかる。全面施釉で、畳付けを釉剝ぎする。高台径4.5cm。唐津焼か。**53**は肥前系染付筒碗か。見込みを円形に釉剝ぎする。外面高台脇に圏線が染付けされる。高台径4.0cm。**54**は凹基式石鏃。黒耀石製。全面に二次調整を加えるが、裏面一部に主要剝離面が残る。小ぶりで長さ1.6、幅1.0、厚み0.25cm。

# 第５節　第５地区の調査

## １．調査の概要

第５地区調査地点は調査対象地の北部に位置し、南西から北東に高度を下げながら延びる舌状台地の先端にあたる。台地の東西両側は急斜面になり、台地上面は現況では平坦部を形成し、水田として利用されるが、上面は水田構築時に相当の削平を受けていると考えられる。

遺構検出面は水田耕作土ほぼ直下の明褐色ローム層で、検出した遺構は掘立柱建物、土坑、焼土坑、中世墓である。遺構は調査区の東側に集中しており、調査区中央から西側では遺構密度は希薄になる。掘立柱建物は調査区南西側に集中し、当時の集落の中心がこの位置であったことが考えられるが、この部分が削平を免れた結果と考えることも可能である。焼土坑は規模・平面形からみて大きく3種類に分類可能である。土坑は方形の小型竪穴状遺構を含め、特殊な遺構を含む。遺構の時期は13世紀中頃から14世紀までを中心としている。

## ２．検出遺構

### １　掘立柱建物(SB)・柱穴(SP)

調査区東側を中心に柱穴群を検出した。柱穴は多くが直径30～50cmで、柱痕の残るものは少ない。柱穴覆土は黒褐色粘質土で、地山明褐色土とは明瞭に区別されるが、一部判別の困難な箇所があった。検出された柱穴は尾根方向に沿って並ぶ傾向があり、検討の結果、掘立柱建物を16棟認めることができた。２×３間の建物が最も多く、最大で３×４間、最小で１×２間の規模である。建物の方向は尾根線に平行で、当時の地形に制約された配置であったと考えられる。建物同士の重複が少なく、長期間に数度の立て替えを経たものではなく、短期間に存続した建物群と考えられる。

柱穴は建物が検出された部分のほかにも調査区全体に広く分布するが、遺構密度としては散漫で、建物としてまとまるものは少ない。特に台地西側では建物の想定は困難である。

**表１．掘立柱建物一覧表**

| 遺構番号 | Fig.番号 | 図　版 | グリッド番号 | 規　模 | 方　位 | 梁全長(m) | 桁全長(m) | 備　考・出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SB-016 | 20 | 6-1 | C2．C3 | － | — | 2.9 | 5.7 | 壁立ち建物 |
| SB-081 | 20 | 6-2 | B2 | 2間×3間 | N-40°-E | 3.7 | 4.7 | 土師器小皿・坏 |
| SB-082 | 20 | 6-3 | B2 | 2間×3間 | N-41°-E | 4.7 | 7.8 | 土師器片、中国産陶磁器(白磁片、青磁；龍泉Ⅱ類) |
| SB-083 | 20 | 6-4 | B2 | 2間×3間 | N-36°-E | 3.3 | 5.4 | |
| SB-084 | 21 | 6-5 | B3 | 2間×4間 | N-39°-E | 2.8 | 5.5 | 土師器片、中国産陶磁器(青磁；龍泉Ⅱ類) |
| SB-085 | 21 | 6-6 | A3．B3 | 3間×4間 | N-44°-E | 4.0 | 5.9 | 土師器小皿・坏、中国産陶磁器片 |
| SB-086 | 21 | | B3 | 2間×3間 | N-43°-E | 3.4 | 5.4 | |
| SB-087 | 21 | | A2 | 2間×2間 | N-48°-E | 3.6 | 3.6 | |
| SB-088 | 22 | 6-7 | B3 | 2間×3間 | N-32°-E | 3.5 | 6.5 | 土師器片、中国産陶磁器(青磁龍泉、陶器) |
| SB-089 | 22 | 6-8 | C4 | 2間×2間 | N-43°-E | 3.3 | 4.4 | 中国産陶磁器（青磁；龍泉Ⅰ類、Ⅱ類) |
| SB-090 | 22 | | B5．B6 | 2間×3間 | N-42°-E | 4.1 | 5.7 | 土師器小皿・坏 |
| SB-091 | 22 | | B7．B8 | 1間×2間 | N-56°-E | 2.5 | 4.4 | |
| SB-092 | 23 | | A2．B2 | 3間×4間 | N-84°-E | 5.5 | 9.1 | 土師器小皿・坏 |
| SB-093 | 23 | | B7 | 2間×3間 | N-59°-E | 3.9 | 6.5 | 土師器片、中国産陶磁器片 |
| SB-094 | 24 | | B5．B6 | 2間×2間 | N-40°-E | 2.9 | 3.7 | |
| SB-095 | 24 | | B2．B3 | 2間×3間 | N-55°-E | 3.1 | 5.1 | 土師器小皿片 |

90.00m
90.50m
90.50m
90.00m
SK-026
SK-027
SK-033
SK-003
SK-002
SK-024
D
90.75m
C
91.00m
90.50m
SK-023
SK-021
SK-019
SK-017
SB-016
SK-022
SK-020
SB-095
91.25m
SP-150
SK-018
SB-081
SP-147
SP-136
SK-014
SK-012
SK-090
SP-184
SB-086
B
SP-329
SB-082
SP-185
SB-084
SK-013
SB-083
SP-198
SP-164
SB-088
SB-092
SP-366
SK-010
SP-317
SK-007
SP-125
SK-015
SP-167
SK-009
SK-004
SK-006
SB-085
SK-008
90.00m
SK-001
89.50m
SP-301
SB-087
SP-319
SP-155
SK-011
90.50m
A
SK-005
SP-108
3
2
1

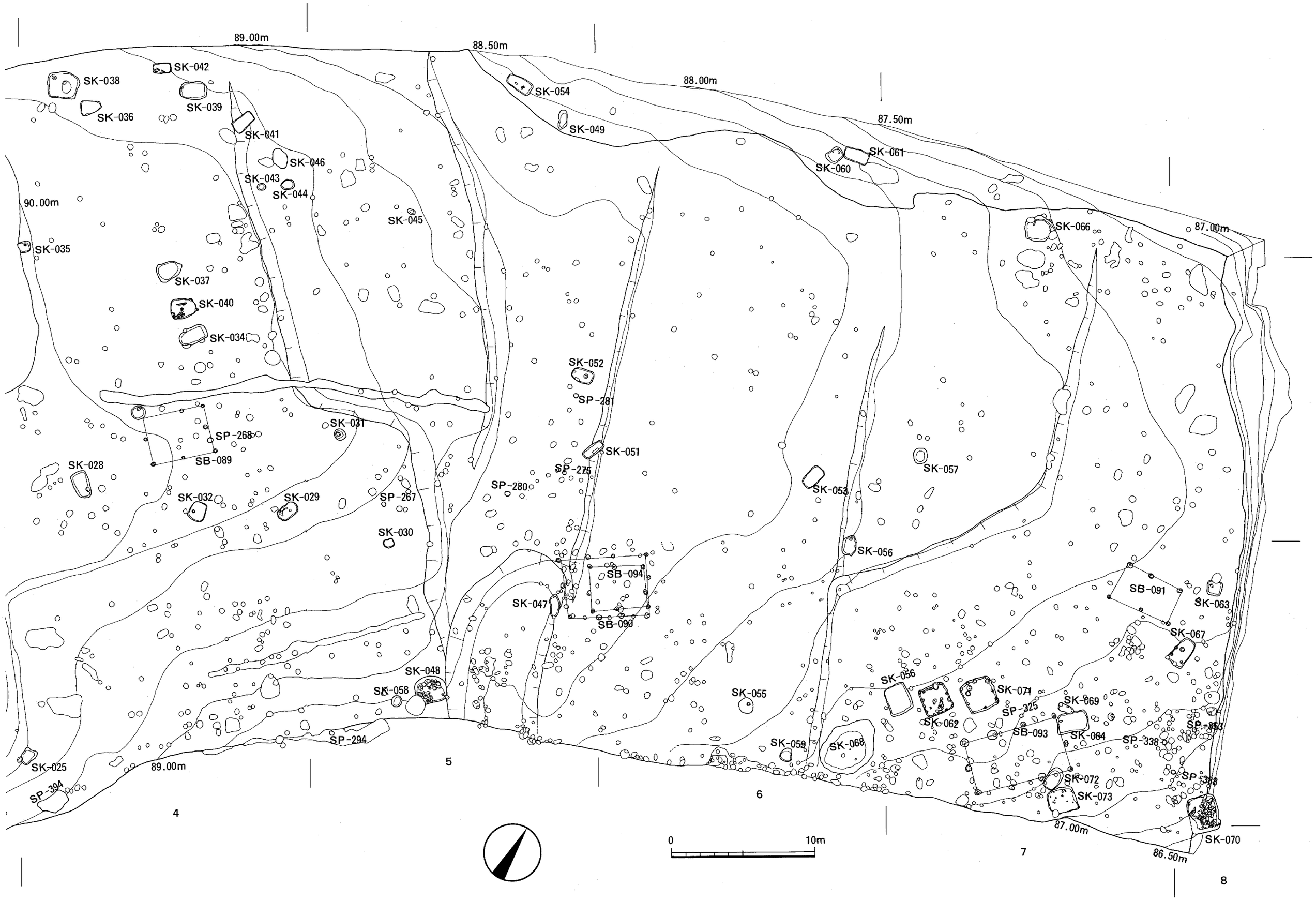



Fig.19　第５地区遺構配置図(1/250)

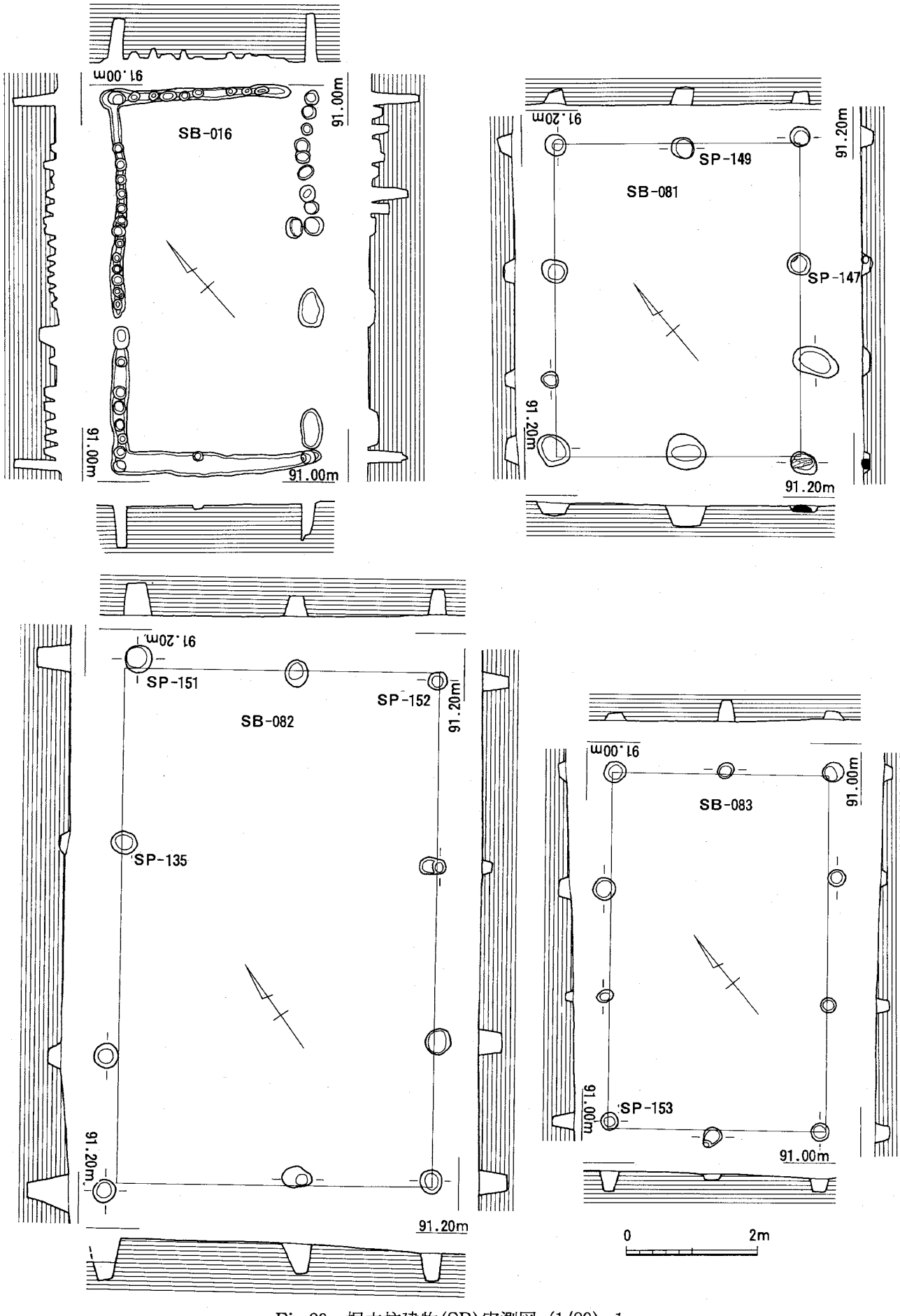



Fig.20　掘立柱建物(SB)実測図（1/80）1

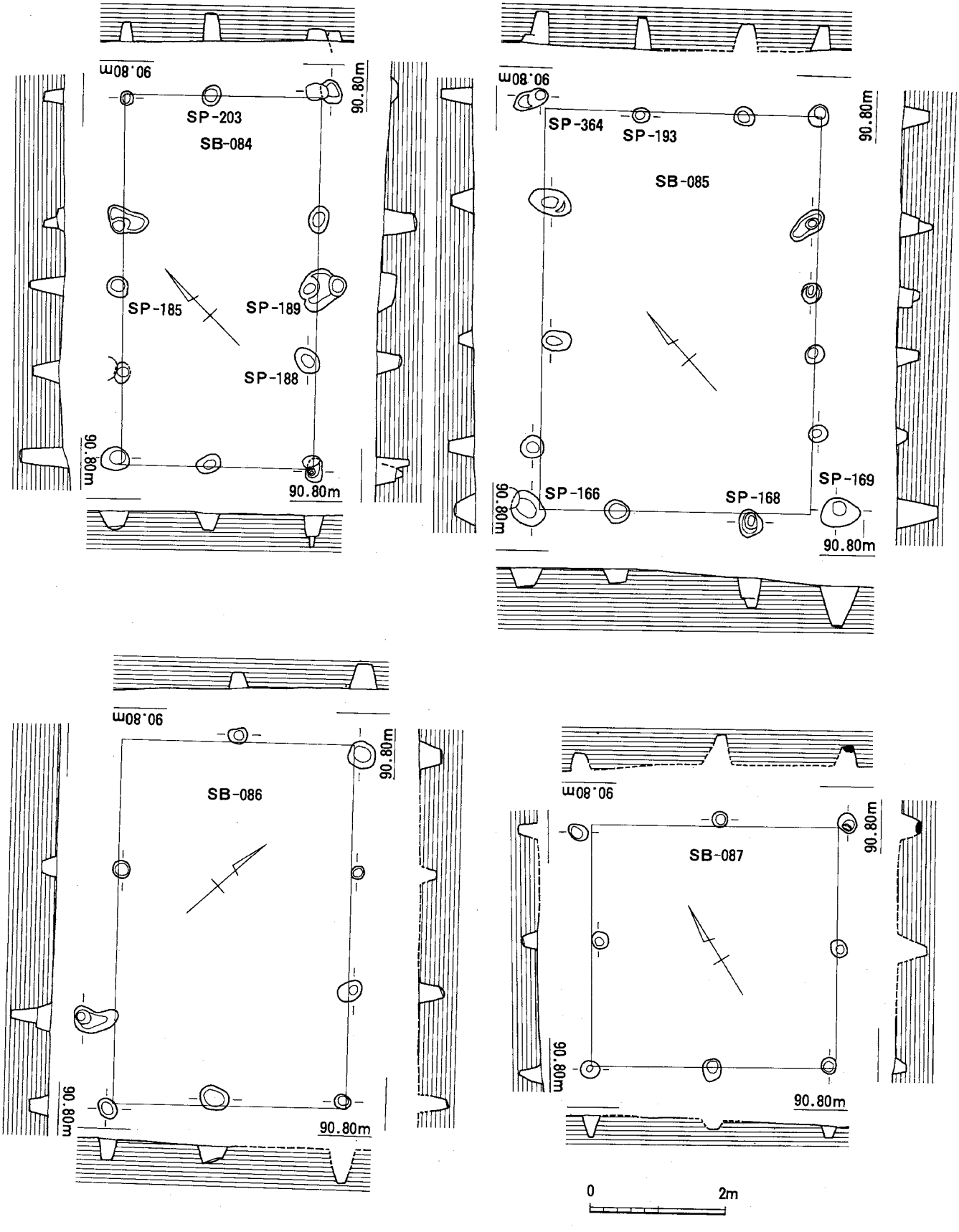



Fig.21　掘立柱建物(SB)実測図（1/80）2

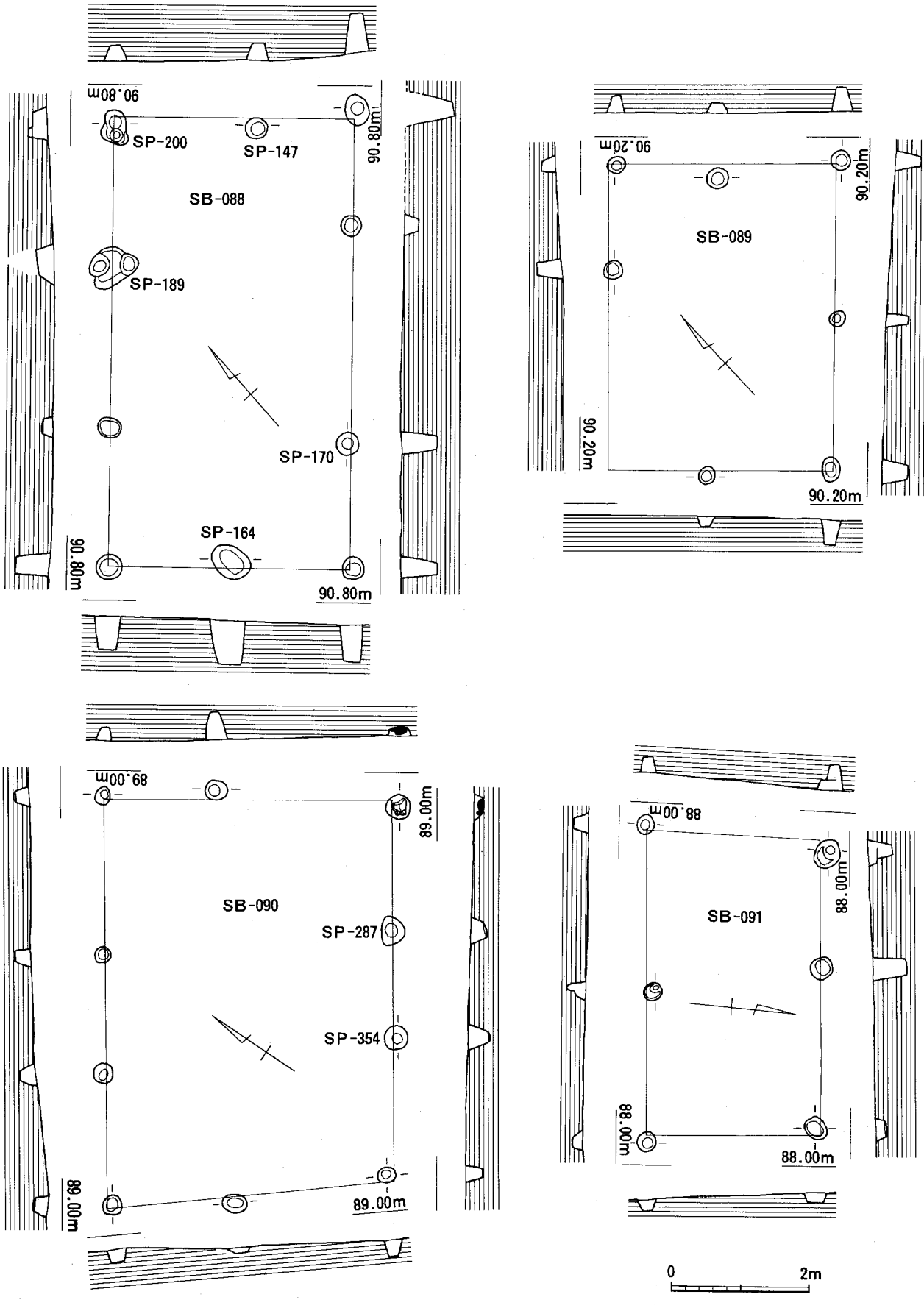
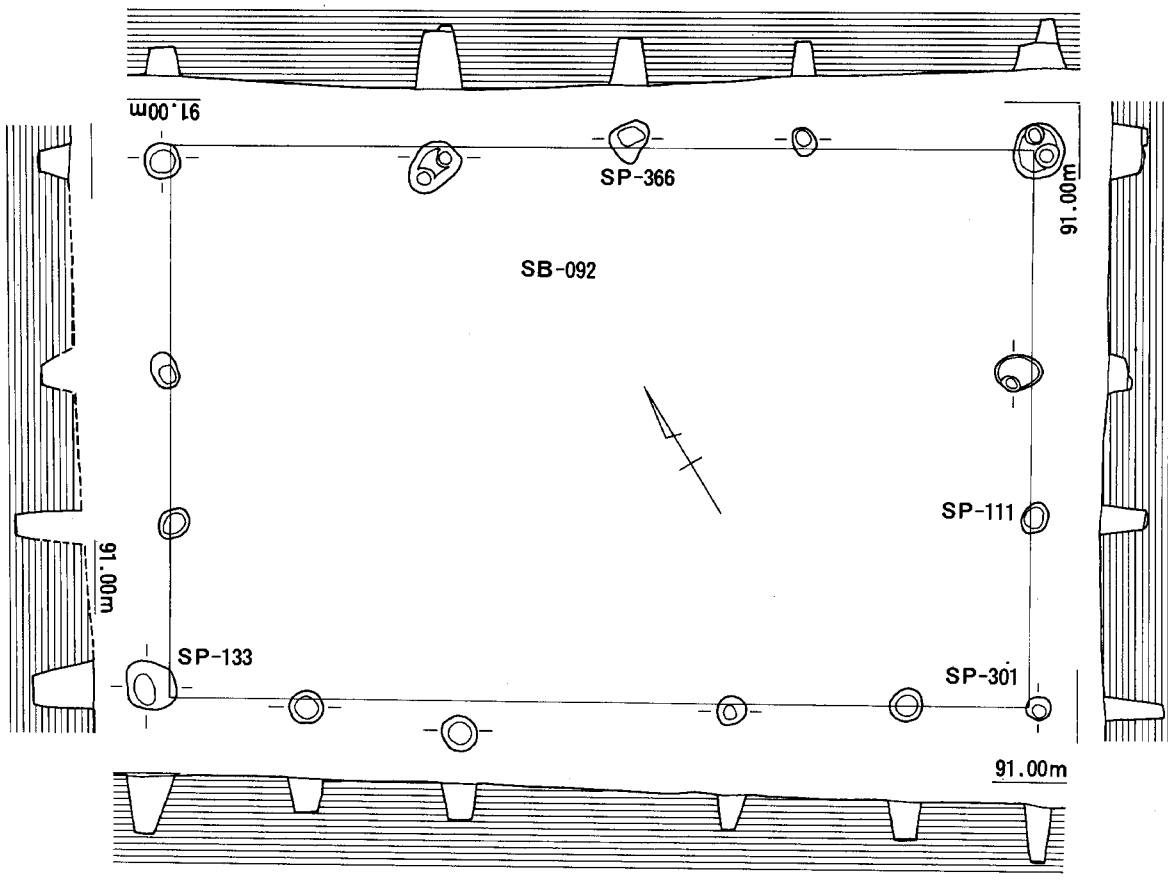



Fig.22　掘立柱建物(SB)実測図 (1/80) 3



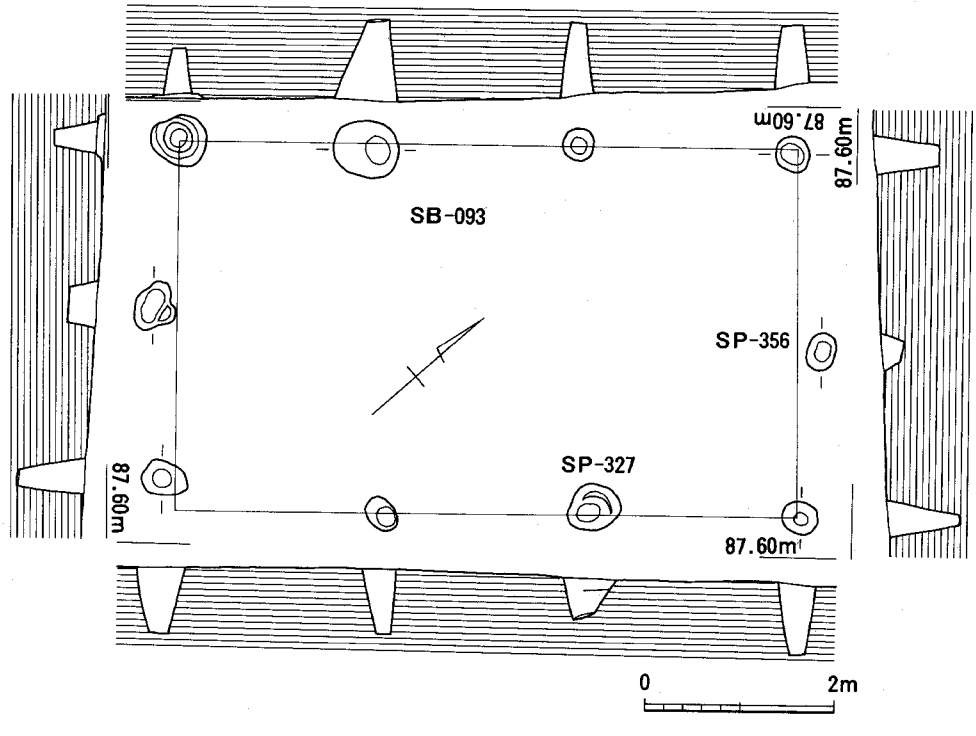




Fig.23　掘立柱建物(SB)実測図（1/80）4

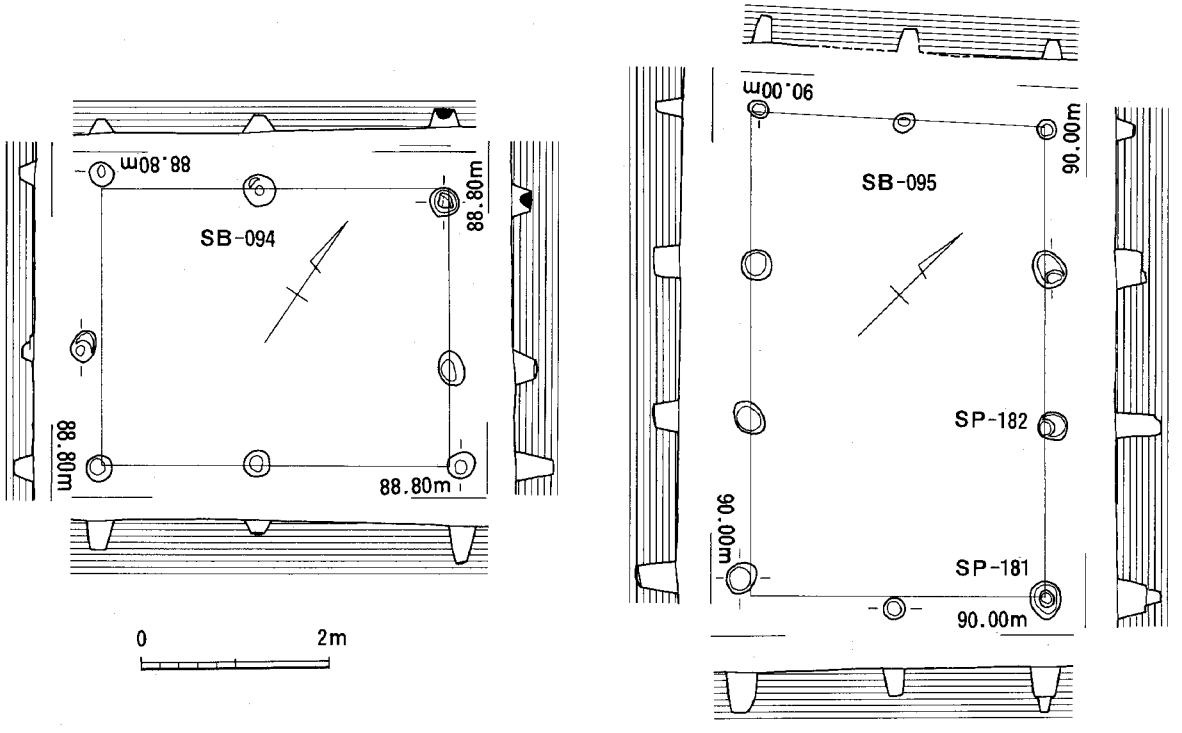



Fig.24　掘立柱建物(SB)実測図（1/80）5

**掘立柱建物出土遺物**(Fig.25　55～60)　**55**(SB-081)は土師器小皿、糸切り。口径9.1、器高1.3cm。SP-147出土。　**56**(SB-084)は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。白っぽい細かな胎土に淡オリーブ色の透明釉が厚くかかる。体外面には複弁鎬蓮弁文が施される。口径15.8cm。SP-185出土。　**57**(SB-088)は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。胎土は淡黄白色、釉は透明の黄味の強いオリーブ色で部分的に白濁する。釉は厚く全体に氷裂が入る。体外面には複弁鎬蓮弁文が施される。口径17.0cm。SP-164出土。　**58～60**(SB-092)**58・59**は土師器小皿。いずれも糸切り。**58**は口径7.8、器高1.3cm、**59**は口径9.0、器高1.0cm。いずれもSP-366出土。**60**は滑石製石鍋再加工品。鍋鍔部分の破片を利用。2ヶ所に穿孔を施すが、一つは穿孔途中で貫通していない。用途は不明。SP-301出土。

**その他の柱穴出土遺物**(Fig.25　61～83)**61**は白磁口ハゲ碗。淡灰白色の胎土にわずかに空色がかった半透明釉が体外面下位までかかる。高台径5.4cm。13世紀中頃～14世紀前後。SP-108出土。　**62**は白磁口ハゲ碗。淡灰白色の胎土にわずかに空色がかった淡灰白色不透明釉が体外面下位までかかる。口径14.2、器高5.7、高台径5.6cm。13世紀中頃～14世紀前後。SP-125出土。　**63**は土師器坏。糸切り。口径12.8、器高2.7cm。SP-136出土。　**64**は土師器小皿。糸切り。口径8.0、器高1.0cm。SP-150出土。

**65**は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類。淡灰色の細か胎土に淡青色不透明釉が高台内までかかる。高台は高く先細りとなり、畳付けを釉剝ぎする。高台径3.4cm。13世紀中頃～14世紀前後。SP-156出土。　**66**は土師器小皿。糸切り。口径9.2、器高1.4cm。SP-167出土。　**67**は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類。黄白色の胎土に黄味の強いオリーブ色半透明釉が高台内まで厚くかかる。高台は高く先細りとなり、畳付けを釉剝ぎする。体外面には鎬蓮弁文が施される。高台径4.6cm。13世紀中頃～14世紀前後。SP-184出土。　**68**は白磁口ハゲ碗。淡灰白色の胎土にわずかに空色がかった透明釉がかかる。口径15.2cm。13世紀中頃～14世紀前後。SP-198出土。　**69**は唐津焼皿。淡灰褐色の粗い素地に白濁した淡黄緑色釉がかかる。体外面下位は露胎。高台径3.9cm。16世紀後半～17世紀初頭。SP-267出土。　**70**は中国産陶器B群長瓶。釉はほとんど剝落し不明。口径5.8cm。**71**は滑石製ミニチュア容器。口径5.7、器高1.4、底径4.4ccm。ともにSP-268出土。　**72**は土師器坏。糸切り。口径13.0、器高2.7cm。SP-275出土。

**73**は土師器小皿。糸切り。口径8.8、器高1.0cm。SP-280出土。　**74**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。淡灰褐

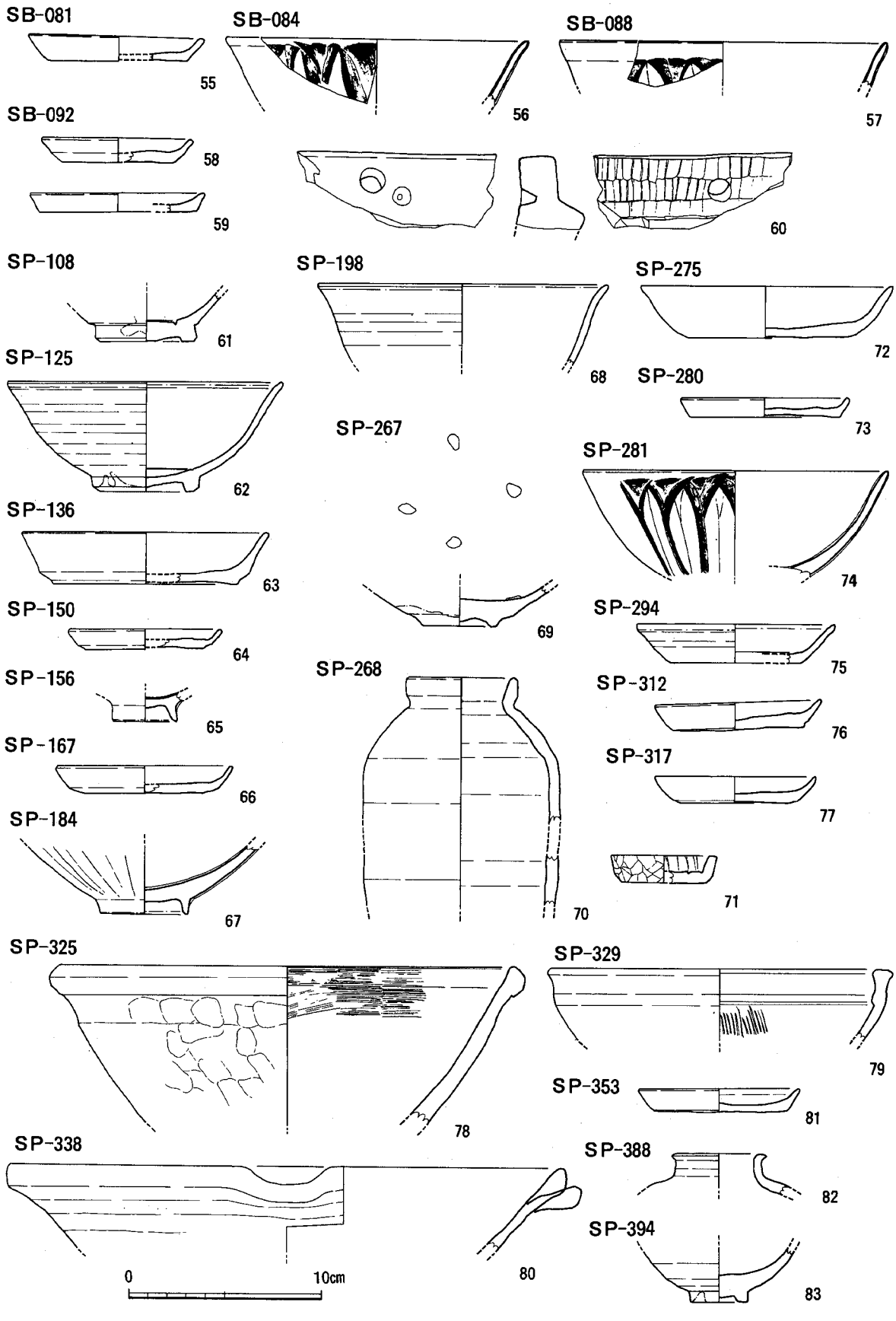



Fig.25　掘立柱建物(SB)・柱穴(SP)出土遺物実測図 (1/3)

色の細かな胎土に、黄味の強い淡オリーブ色透明釉が厚くかかる。体外面に複弁の鎬蓮弁文が施される。口径16.0cm。13世紀前後～前半代。SP-281出土。　**75**は白磁ロハゲ皿。淡灰白色の胎土にわずかに空色がかった半透明釉が外底までかかる。器高はやや低く口径10.2、器高2.0、底径6.7cm。13世紀中頃～14世紀前後。SP-294出土。　**76**は土師器小皿。糸切り。口径8.7、器高1.4cm。SP-312出土。**77**は土師器小皿。糸切り。口径8.4、器高1.4cm。SP-317出土。　**78**は瓦質土器鉢。口縁外面は丸く肥厚する。外面は再調整が十分でなく、指押えの痕が顕著、内面は使用のためかなり磨滅しているが、口縁部分には横方向の細かなハケ目調整痕が残る。口径23.6cm。SP-325出土。　**79**は中国産陶器C群擂鉢。口縁上端は平坦で内面口縁下に突帯が一条巡る。釉の発色悪く、不透明の暗茶灰色を呈する。内面は露胎。口径17.8cm。SP-329出土。　**80**は須恵質片口鉢。口縁外面は鈍く肥厚し、端部は尖り気味におさめる。東播系。口径28.8cm。12世紀後半～13世紀初頭位か。SP-338出土。　**81**は土師器小皿。糸切り。口径8.4、器高1.2cm。SP-353出土。　**82**は中国産陶器A群小口瓶。口縁は短く外反する。釉はほとんど剝落し不明。口径5.0cm。SP-388出土。　**83**は龍泉窯系青磁Ⅰ類小碗。淡灰白色の細かな胎土に淡青灰色の不透明釉がかかる。高台畳付けから高台内は露胎。高台径3.0cm。12世紀中頃～後半代。SP-394出土。

## 2　溝状遺構

調査区中央を南北に走る細い溝状遺構と、調査区南西側を北走し、直角に西に折れる溝状遺構の２遺構を検出した。いずれも水田開削に伴うものと考えられるが、中世集落に伴う良好な遺物を多量に含み、建物を区画する溝とも考えられるため、ここで報告する。

調査区中央の溝状遺構は幅50cm未満で、深さも浅い。覆土は薄灰色粗砂で、水路として使用されたと考えられる。溝北側は削平によって次第に浅くなり、中断する。

調査区南西側の溝状遺構は幅50cm前後で北走し、西に直角に屈曲して、１m以上の深さとなり、西側斜面に流れ落ちる。

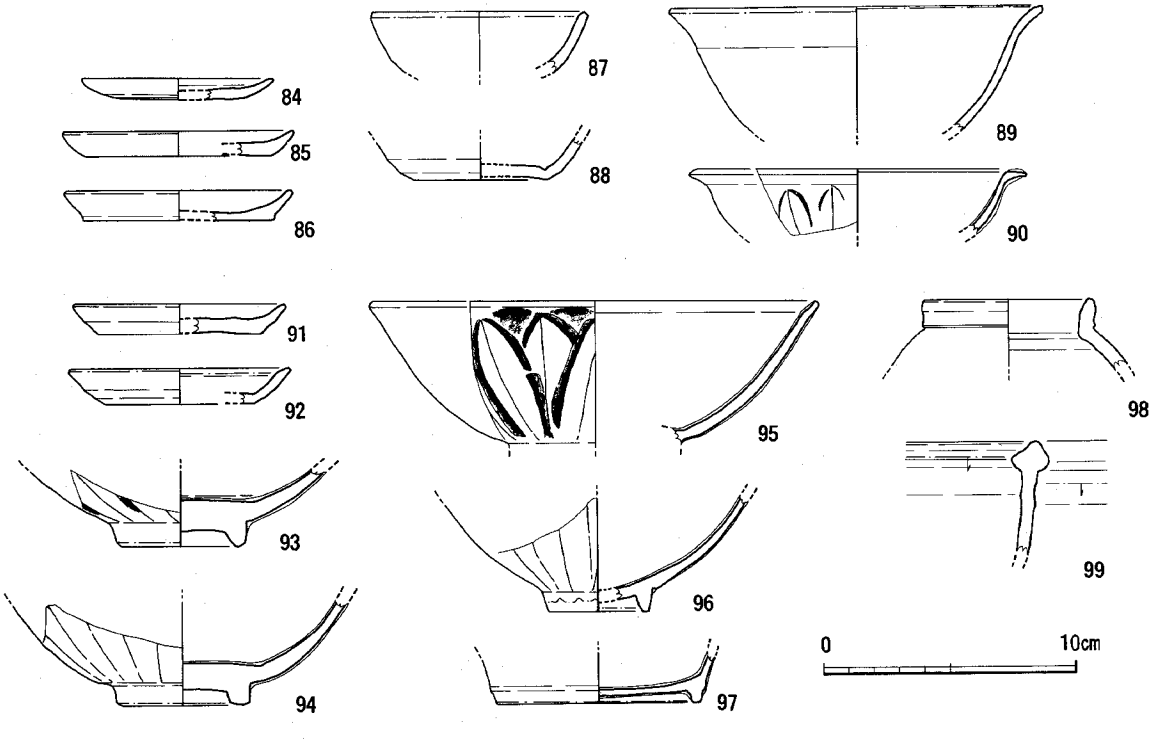



Fig.26　溝(SD)出土遺物実測図（1/3）

**出土遺物**(Fig.26　84～99)　**84～86**は土師器小皿。糸切り。**84**は口径7.6、器高0.8cm、**85**は口径9.1、器高1.cm、**86**は口径9.0、器高1.2cm。**87～89**は白磁ロハゲ。**87**は体部から口縁にかけてやや内湾気味の皿で、外面下半は露胎になる。高台が付く可能性あるか。口径8.6cm。**88**は平底皿で外底は露胎となる。底径5.2cm。**89**は碗。口縁は大きく外反する。口径15.0ccm。**90**は龍泉窯系青磁小鉢Ⅲ類。口径13.4cm。出土遺物は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。

**91**は土師器小皿。糸切り。口径8.4、器高1.2cm。**92**は白磁ロハゲ皿。器高が低く、口径8.8、器高1.4、底径5.8cm。**93～95**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。**93**は高台径5.2cm、**94**は高台径5.3cm、**95**は口径17.7cm。**96**は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類。高台径4.0cm。**97**は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類と思われる。高台外面は段が付き竹節状を呈する。高台径8.0cm。**98**は中国産陶器Ｂ群長瓶。釉は剝落しており不明。口径6.8cm。**99**は中国産陶器Ａ群黄釉盤。口縁上面を釉剝ぎする。

### 3　土坑(SK)

５区全体で22基検出している。検出した土坑は数パターンに分類できる。

(1)SK-001、004のように集石を伴う円形遺構、これらは覆土の状況や、出土遺物から他の遺構よりも時期が一段下るものと考えられる。具体的な時期は近世の可能性が高い。

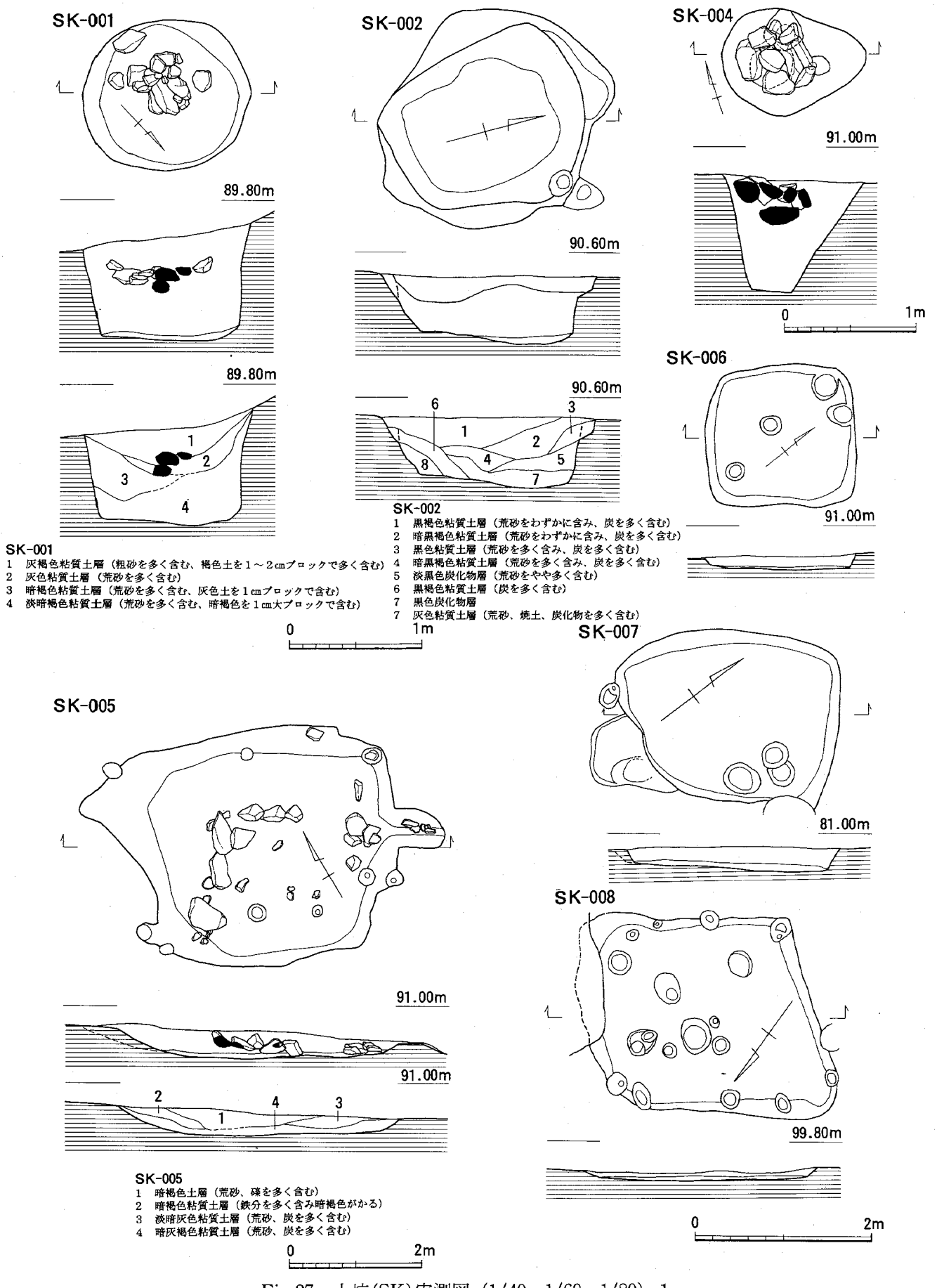
(2)SK-062のような方形や長方形の竪穴状遺構。SK-010、011、012、015、070等の一見不整形を呈する遺構も本来この種類の遺構とみられる。これらに類する遺構は博多遺跡群でも検出されており、中世の所産と考える。遺構の機能として、作業小屋的なものが想定される。SK-062の用に壁面に沿って柱穴が並ぶ遺構と、SK-065のように柱穴が認められないものがあるが、仮設小屋的な要素をもつことからみて、遺構の構造の多様なバリエーションはありうることである。SK-005もこの種の遺構で、東側に排水用溝を設ける。これらの遺構同士の切り合いも多い

(3)SK-002、007の様に、本来焼土坑であったものが崩れ、あるいは焼成が弱く、検出時に焼土坑としての要素を認められなかったもの。これらは覆土に炭化物や焼土を多く含むことが多い。

また、SK-060は中世墓で、龍泉窯系青磁碗が完形で出土している。

**表２．土坑観察表**

| | 地区 | Fig. | 図版 | 平面形 | 規模（長軸×短軸×深さ）cm | 長軸方向 | 備　考 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-001 | B-3 | 27 | | 略円形 | 126×114×82 | － | 集石あり | 土師小片 2 |
| SK-002 | D-3 | 27 | | 不整形 | 172×145×47 | － | | 土師小片 2 |
| SK-004 | B-2 | 27 | | 不整形 | 108×80×83 | － | 20～30cmの集石あり | 土師器坏、小皿片 |
| SK-005 | A-2 | 27 | 7-1 | 不整形 | 417×360×42 | － | 石組み構造あり | 土師器小皿、坏、須恵質土器、中国産陶磁器 |
| SK-006 | AB-2 | 27 | | 略方形 | 172×158×14 | N-38°-E | | |
| SK-007 | B-2 | 27 | | 不整形 | － | － | | 土師器坏、小皿片、龍泉窯系青磁片 |
| SK-008 | B-3 | 27 | | 不整形 | － | － | | 土師器小皿、坏、中国産陶磁器（白磁；ロハゲ、青磁；龍泉、陶器） |
| SK-009 | B-3 | 28 | | 不整形 | 450×322×24 | － | | 土師器小皿、坏、中国産陶磁器（白磁；合子・ロハゲ、青磁；龍泉Ⅲ類、陶器） |
| SK-010 | B-3 | 28 | 7-2 | 不整形 | － | － | 複数遺構の切り合いか | 土師器小皿、坏、須恵質土器、中国産陶磁器（白磁；水注・ロハゲ、青磁；龍泉、陶器） |
| SK-011 | A-2 | 28 | | 不整形 | － | － | 複数遺構の切り合いか | 土師器小皿、坏、中国産陶磁器（白磁；ロハゲ、青磁；龍泉Ⅰ類、陶器） |
| SK-012 | B-2 | 28 | | 略長方形 | － | － | | 土師器小皿、坏、須恵質土器、中国産陶磁器（白磁；ロハゲ、青磁；龍泉、青白磁、陶器） |
| SK-014 | B-3 | | | 略円形 | 110×100×５ | － | | 土師器小皿、坏、須恵質土器、中国産陶磁器（白磁；合子・ロハゲ、青磁；龍泉、青白磁、陶器） |
| SK-015 | B-3 | 28 | | 不整形 | － | － | | |
| SK-022 | C-3 | | 7-3 | 略方形 | 163×148×28 | N-45°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-038 | D-4 | 28 | | 不定形 | 221×185×11 | N-60°-E | | |
| SK-048 | B-5 | 29 | | 隅丸長方形 | 220×183×25 | N-46°-E | 石組み遺構あり | 土師器小皿、坏 |
| SK-060 | D-6 | 29 | 7-5 | 隅丸長方形 | 115×87×40 | N-21°-E | | 龍泉窯系青磁碗１ |
| SK-062 | B-7 | 29 | 7-6 | 略方形 | 205×197×24 | N-53°-W | 四隅にｐｉｔ | 土師器小皿、坏、中国産陶磁器 |
| SK-065 | B-7 | 29 | 7-7 | 略長方形 | 206×170×24 | N-50°-W | | 土師器坏片、中国産陶磁器（青磁；龍泉、陶器） |
| SK-068 | B-6 | 29 | | 不整形 | 444×321×20 | N-6°-E | | 土師器片、東播系須恵質鉢片、土鍋片、中国産白磁片 |
| SK-070 | B-8 | 29 | | 略長方形 | 255×210×43 | N-45°-W | 石組み遺構あり（焼け石を含む） | 土師器小皿、坏、須恵質土器、中国産陶磁器（白磁；ロハゲ、青磁；龍泉、陶器） |
| SK-071 | B-7 | | 7-8 | 略方形 | 229×219×16 | N-55°-E | 床面一部は被熱により赤色化 | 土師器坏片（糸切り） |




SK-001
1　灰褐色粘質土層（粗砂を多く含む、褐色土を1～2cmブロックで多く含む）
2　灰色粘質土層（荒砂を多く含む）
3　暗褐色粘質土層（荒砂を多く含む、灰色土を1cmブロックで含む）
4　淡暗褐色粘質土層（荒砂を多く含む、暗褐色を1cm大ブロックで含む）

SK-002
1　黒褐色粘質土層（荒砂をわずかに含み、炭を多く含む）
2　暗黒褐色粘質土層（荒砂をわずかに含み、炭を多く含む）
3　黒色粘質土層（荒砂を多く含み、炭を多く含む）
4　暗黒褐色粘質土層（荒砂を多く含み、炭を多く含む）
5　淡黒色炭化物層（荒砂をやや多く含む）
6　黒褐色粘質土層（炭を多く含む）
7　黒色炭化物層
7　灰色粘質土層（荒砂、焼土、炭化物を多く含む）

SK-005
1　暗褐色土層（荒砂、礫を多く含む）
2　暗褐色粘質土層（鉄分を多く含み暗褐色がかる）
3　淡暗灰色粘質土層（荒砂、炭を多く含む）
4　暗灰褐色粘質土層（荒砂、炭を多く含む）

Fig.27　土坑(SK)実測図（1/40、1/60、1/80）1

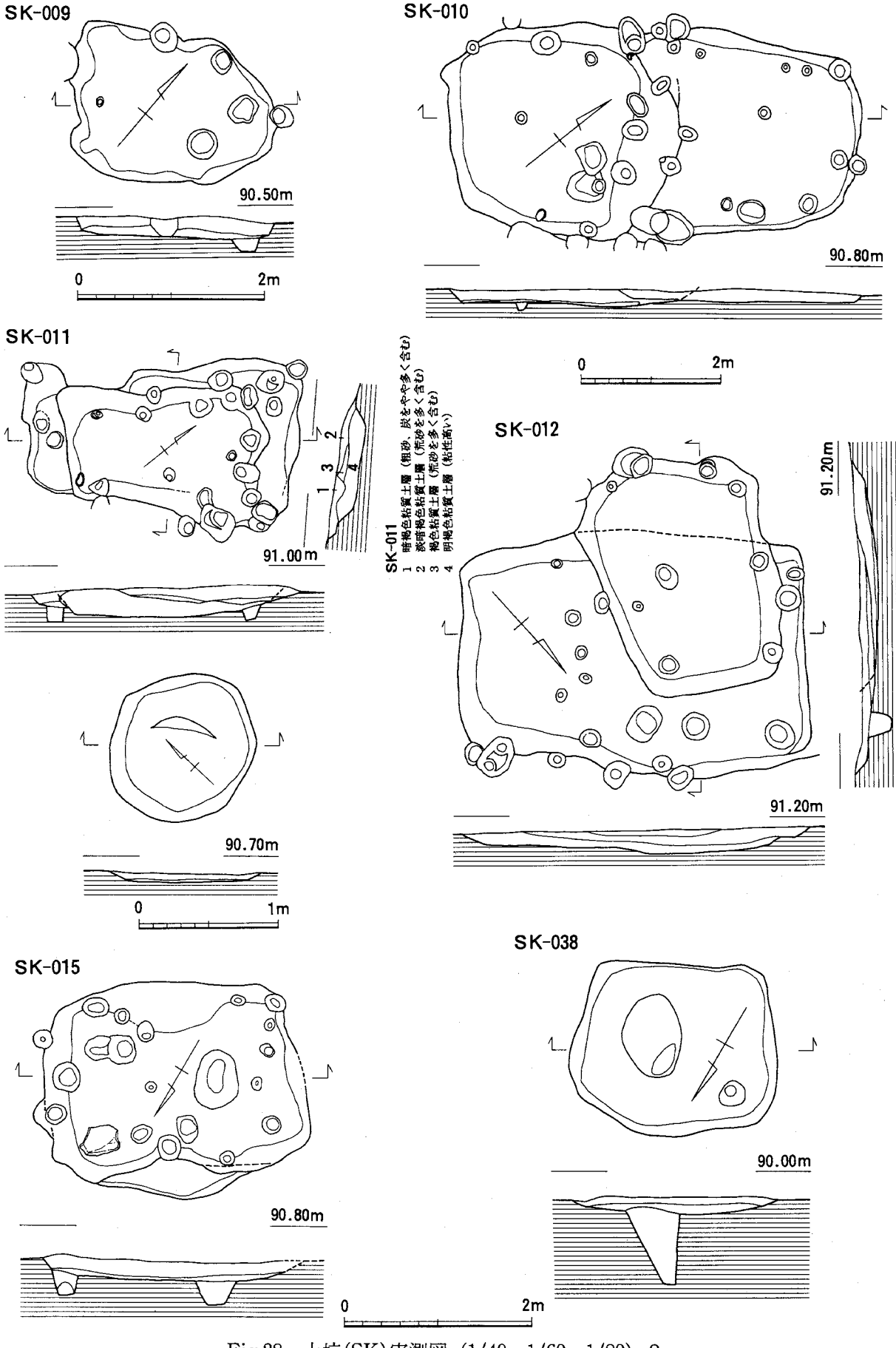



Fig.28　土坑(SK)実測図（1/40、1/60、1/80）2

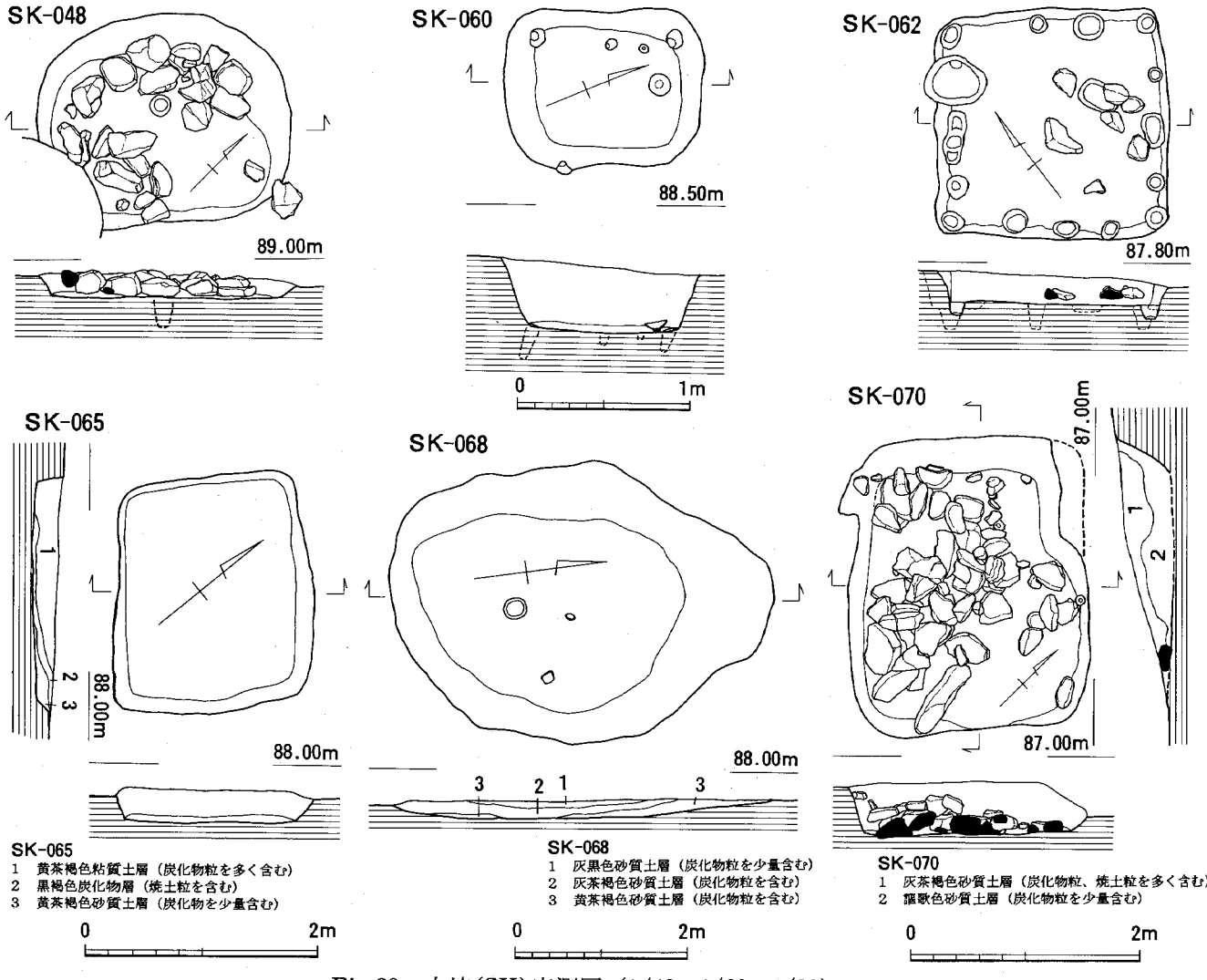



Fig.29　土坑(SK)実測図（1/40、1/60、1/80）3

**土坑出土遺物**　SK-005(Fig.30　100～110)　**100**、**101**は土師器小皿。糸切り。**100**は口径7.2、器高0.8cm。**101**は口径8.7、器高1.0cm。**102**は土師器坏。糸切り。口径11.0、器高2.2cm。いずれも石組み内出土。**103**は須恵質土器鉢。口縁部外面は丸味を帯びて肥厚し、内湾気味で、内面にV字状の段が付く。口径27.0cm。東播系。掘り方出土。**104～107**は白磁ロハゲ皿。**104**は平底で全面施釉後、体外面下位から外底の釉を雑に拭いとる。口径8.8、器高2.6、底径5.2cm。**105**、**106**は口縁が外反する。口径はそれぞれ10.8cm、10.2cm。**107**は平底で外底まで施釉、底径6.0cm。**104**、**105**は石組み内、**106・107**は掘り方出土。**108**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。灰白色のやや粗めの胎土に、黄味の強い淡オリーブ色の半透明釉がかかる。体部は大きく外に開き、体外面下半は露胎、見込みに4ヶ所目跡が付く。口径17.0、器高6.1、高台径6.1cm。**109は**龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。白味の強い細かな胎土に、淡青灰色透明釉がかかる。畳付けから外底にかけては露胎。体外面に鎬蓮弁文、見込みに印花文が施される。高台径5.6cm。いずれも掘り方出土。**110**は滑石製石鍋。外面には煤が付着。底径15.7cm。石組み内出土。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。　SK-008(Fig.30　111～113)　**111**は土師器小皿。糸切り。口径8.6、器高1.0cm。**113**は龍泉窯系青磁Ⅲ類小鉢。胎土は黄白色の軟陶質、釉は淡黄茶色不透明で厚く高台内までかかり、畳付けを釉剝ぎする。口縁は先端を上方につまみ上げた鍔状になっており、高台は先端が先細りとなる。体部内面には蓮弁文が施される。口径13.5、器高4.0、高台径5.3cm。**112**は中国産施釉陶器合子身。きめ細かな淡黄白色の軟陶質の胎土に、黄茶色の透明釉がかかる。口縁上面から内面のみに施釉しており外面は露胎。型作りで内面のみ再度横ナデ調整を加えている。口径

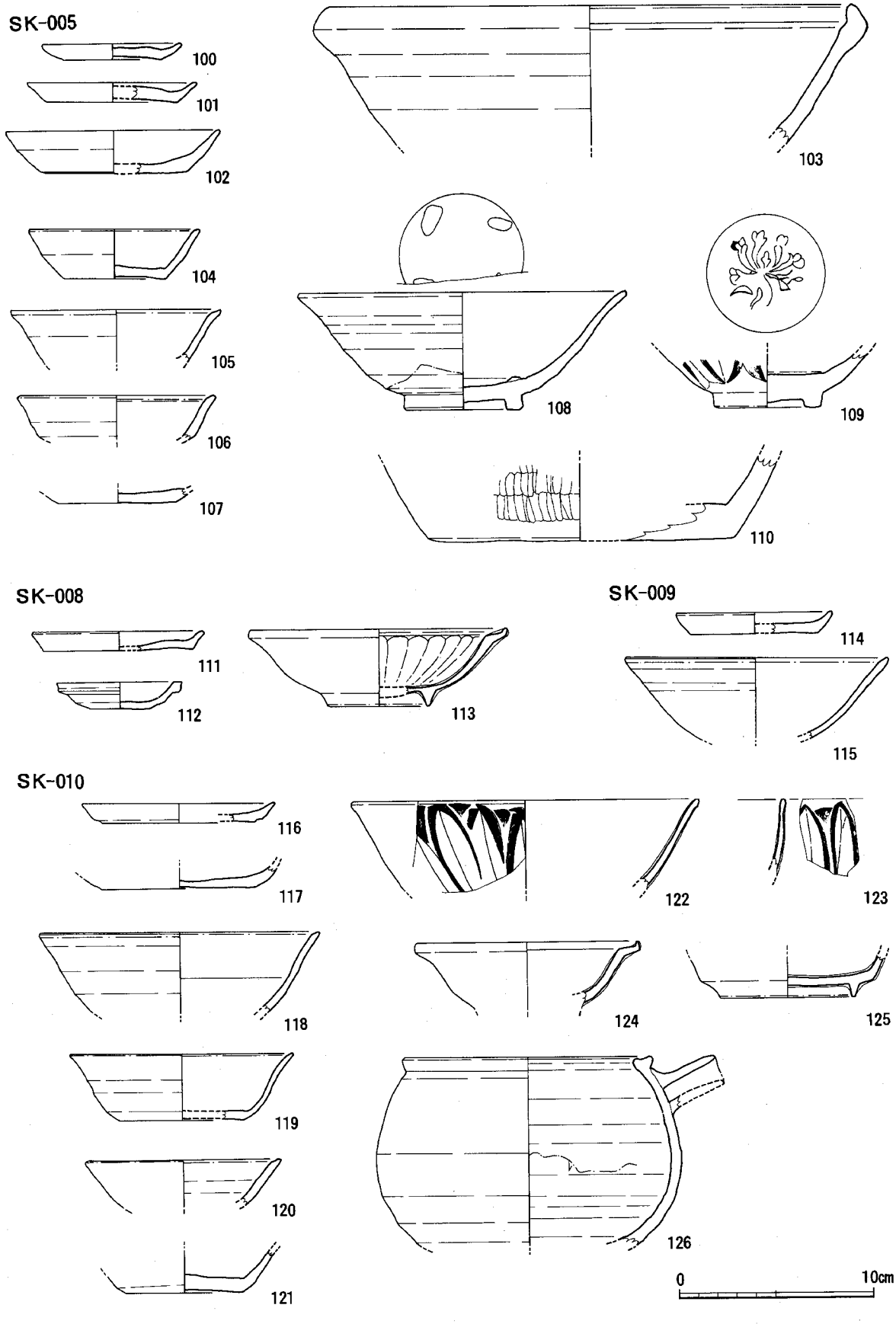



Fig.30　土坑(SK)出土遺物実測図（1/3）1

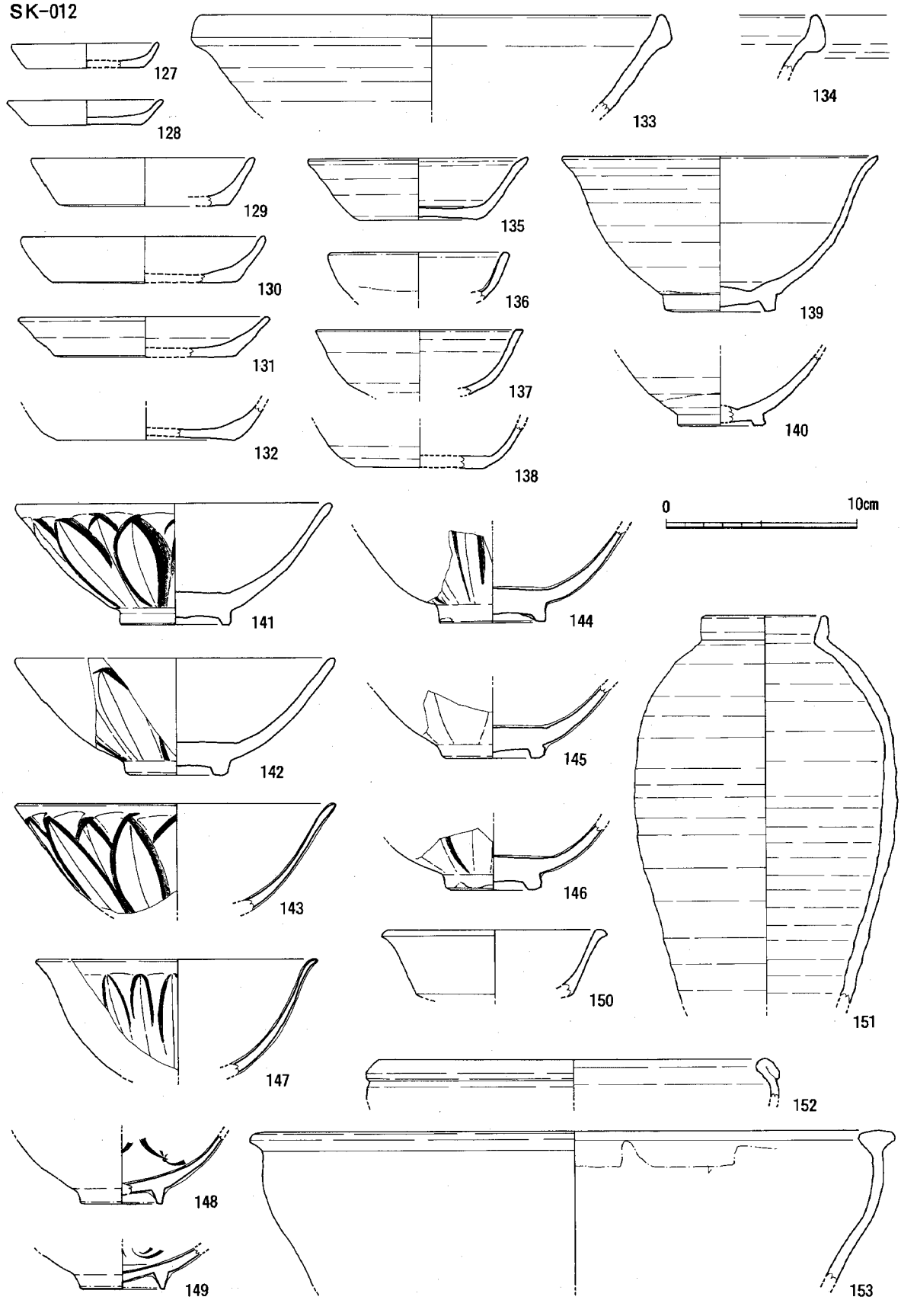



Fig.31　土坑(SK)出土遺物実測図 (1/3) 2

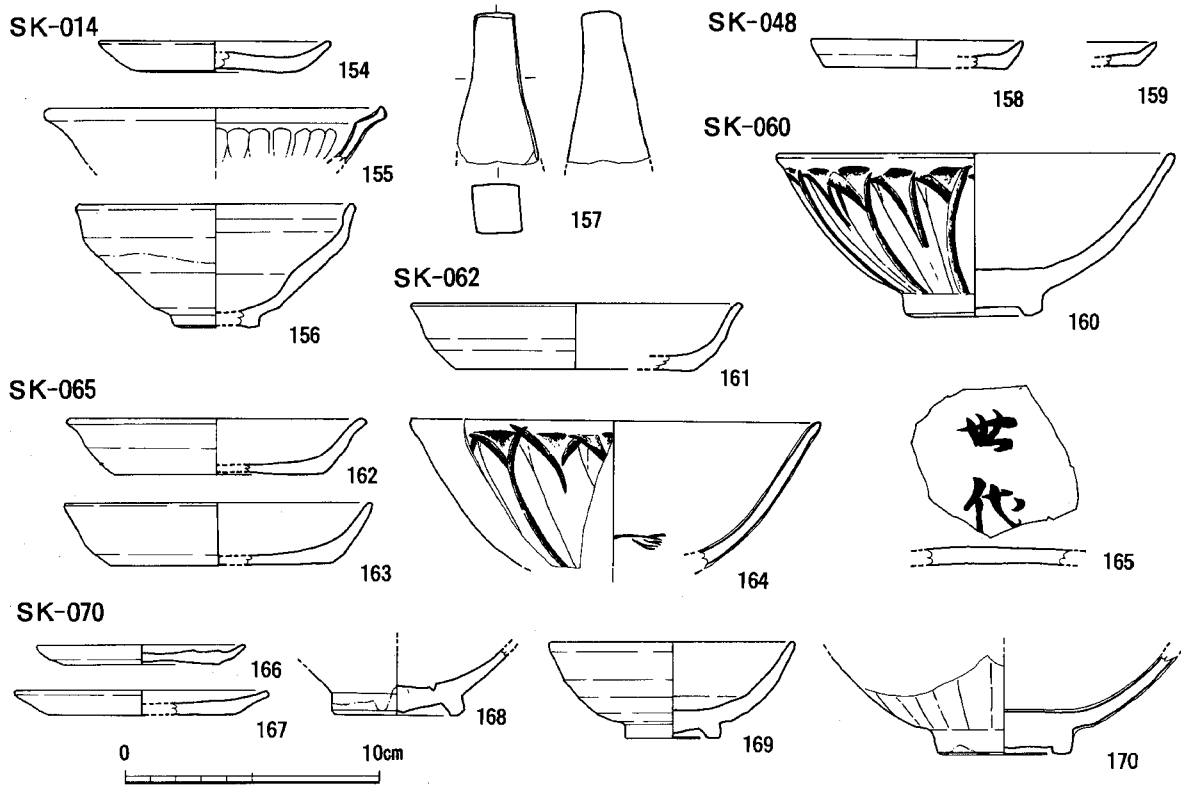



Fig.32　土坑(SK)出土遺物実測図 (1/3) 3

6.4、器高1.4、底径3.2cm。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。　SK-009 (Fig.30　114・115)　**114**は土師器小皿。糸切り。口径8.0、器高1.1cm。ただし、小片のため法量は不明確。**115**は白磁口ハゲ碗。体部はまっすぐ大きく外に開く。白味の強い胎土に、わずかに空色がかった半透明釉をかける。口径13.6cm。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。

SK-010(Fig.30　116～126)　**116**は土師器小皿。糸切りと思われる。口径10.0、器高1.0cm。ただし、小片のため法量は不明確。**117**は土師器坏。糸切りと思われる。底径8.0cm。**118～121**は白磁口ハゲ。いずれも白味の強い細かな胎土に、わずかに空色がかった釉がかかる。**118**は碗。内面中位に浅い段が巡る。口径14.6cm。**119～121**は皿。**119**は平底で、口縁は外反し、釉は外底までかかる。口径11.6、器高3.5、底径6.4cm。**120は**器高が低く、体部はまっすぐ開く。口径10.2cm。**121**は平底で、全面施釉後外底の釉を雑に拭いとる。底径6.0cm。**122～125**は龍泉窯系青磁。**122**は碗Ⅱ類。体外面に鎬入り複弁蓮弁文を施す。白っぽい胎土に、深いオリーブ色の透明釉が厚くかかる。口径18.0cm。**123**は碗Ⅲ類と思われ、体外面に細身の鎬蓮弁文が施される。**124**、**125**はⅢ類小鉢。いずれも淡褐色の胎土に、黄味の強い淡緑色の透明釉が厚くかかる。**124**は口縁は先端を上方につまみ上げた鍔状になり、口径11.7cm。**125**は外底まで施釉し、畳付けを釉剝ぎする。高台径は7.0cm。**126**は中国産陶器A群行平。外面口縁下に把手が付く。内面下半に施釉され、釉は黒茶色で全く発色していない。体外面下半は回転ヘラ削りを施す。口径13.0cm。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。　SK-012(Fig.31　127～153)　**127**、**128**は土師器小皿。磨滅が著しく調整等不明。**127**は口径7.6、器高1.3cm。**128**は口径8.0、器高1.3cm。**129～132**は土師器坏。糸切り。**129**は口径11.4、器高2.5、**130**は口径12.6、器高2.4cm、**131**は口径13.0、器高2.1cm。**133**、**134**は須恵質土器鉢。口縁端部は上方へ引き出され尖り気味におさまる。外面は肥厚、内面は内湾気味に凹み断面形は三角形を呈する。**133**は口径24.0cm。いずれも東播系。**135～140**は白磁口ハゲ。いずれも白味の強い細かな胎土に、白色の不透明釉がかかる。**135**～

**138**は皿。**135**は口縁がやや外反する平底皿。外底まで施釉される。口径11.4、器高3.2、底径6.0cm。**138**も同タイプと思われる。底径6.6cm。**136**は口縁がやや内湾し、器壁が厚い。体外面下位は露胎。口径9.4cm。**137**は体部下位が大きく内湾し、高台が付く可能性が強い。外面下位は露胎。口径10.6cm。**139**、**140**は碗。いずれも体外面下位は露胎。**139**は内面中位に細い沈圏線が巡る。外面やや上位から以下は回転ヘラ削りを施す。口径16.4、器高8.1、高台径5.8cm。**140**は高台径4.6cm。**141～150**は龍泉窯系青磁。**141～146**は碗Ⅱ類。淡灰白色の胎土に、淡青灰色～淡青緑色の釉がかかる。畳付けから高台内は露胎。外面には鎬蓮弁文が施される。**141**は口径16.4、器高6.3、高台径5.8cm。**142**は器高が低く、口径16.6、器高6.1、高台径5.2cm。**143**は口径16.6cm。**144**は高台径5.6cmで、高台内にハマが付着する。**145**は高台径5.4cm、146は5.0cm。**147～149**は碗Ⅲ類。白味の強い細かな胎土に、淡青緑色の透明釉が厚くかかる。**147**は体外面に細身の鎬蓮弁文が施される。口径14.6cm。**148**、**149**は高台は高く先細りになっており、内面には劃花文が施される。全面施釉で高台畳付けを釉剝ぎする。高台径は**148**は4.2、**149**は4.4cm。**150**は坏Ⅲ類。胎土は淡灰白色で、釉は白濁しており発色は悪い。腰折れで口縁端部は短く外へ屈折する。口径11.6cm。**151**は中国産陶器Ｂ群長瓶。口縁は短く直立し、肩が張る。体外面下半は回転ヘラ削りが施される。釉は剝落しており不明。口径6.6cm。**152**、**153**は中国産陶器Ａ群盤。**152**は口縁を外に折り返し丸く肥厚する。口縁内外の釉をふきとっており、上端部には目跡が付く。口径21.6cm。**153**は口縁がＴ字状になる。口縁端部から内面にかけて化粧土が施され、釉は黄味がかった淡いオリーブ色不透明釉で内面口縁下に施される。上端面には目跡が付く。口径33.6cm。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。 SK-014(Fig.32　154～157)　**154**は土師器小皿。糸切りと思われる。口径9.6、器高1.2cm。**155**は龍泉窯系青磁小鉢Ⅲ類。鍔状口縁で端部をやや上方へ引き上げる。体部内面には蓮弁文が施される。淡灰白色の胎土に青緑色の釉が厚くかかる。口径13.4cm。**156**は天目碗。高台は小さく、高台内の削りは浅い。大きく開いた体部から、口縁は直立気味に屈折する。灰色のやや粗い胎土に黒色の釉がかかる。体外面下半は露胎。口径11.0、器高4.9、高台径3.4cm。**157**は砥石。全面を使用している。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。 SK-048(Fig.32　158～159)　**158・159**は土師器小皿。いずれも磨滅著しく調整等は不明。158は口径8.4、器高1.1cm。 SK-060(Fig.32　160)　**160**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。体外面に複弁の鎬蓮弁文が施される。淡灰色の精良な胎土に、淡青緑色の透明釉がかかる。高台畳付けから高台内は露胎で、高台内にはハマの痕が付く。口径15.6、器高7.0、高台径5.5cm。遺構の時期は13世紀前後～前半。 SK-062(Fig.32　161)　**161**は土師器坏。糸切りと思われる。口径13.0、器高2.6cm。 SK-065(Fig.32　162～165)　**162**、**163**は土師器坏。糸切り。**162**は口径11.8、器高2.2cm、**163**は口径12.1、器高2.4cm。**164**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。体外面に複弁の鎬蓮弁文、内面に劃花文が施される。淡灰色の胎土に、深いオリーブ色透明釉が厚くかかる。口径16.2cm。**165**は中国産陶器A群盤。ややくすんだ淡黄白色不透明釉が内面にかかる。内底面には鉄釉により、詩が描かれる。釉下は化粧掛けされる。出土遺物少なく不明確だが、遺構の時期は13世紀中頃～14世紀か。 SK-070(Fig.32　166～170)　**166**、**167**は土師器小皿。糸切り。166は口径8.2、器高0.8cm。**167**は口径10.0、器高1.0cmだが、小片のため不明確。**168**は白磁口ハゲ碗。白味の強い細かな胎土に、わずかに空色がかった半透明釉が外面下位までかかる。高台径5.3cm。**169**は龍泉窯系青磁小碗Ⅰ類。胎土は淡灰白色で細かく、釉は透明淡オリーブ色。高台畳付けから高台内は露胎。口径9.7、器高3.8、高台径3.7cm。**170**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。外面に鎬蓮弁文が施される。胎土は淡灰白色で細かく、釉は黄味の強い透明オリーブ色でかなり厚く、高台畳付けから高台内は露胎。高台径5.2cm。出土遺物から遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後と思われる。

## 表3．焼土坑観察表

| 遺構番号 | 地区 | 平面形 | 規模(長軸×短軸×深さ)cm | 長軸方向 | 備　　考 | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-003 | D-3 | 不整形 | 197×147×55 | — | 壁面は被熱のため赤色化 | |
| SK-013 | B-3 | 略長方形 | 184×97×26 | N-88°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 土師器片、須恵質土器、中国産陶磁器(青磁；龍泉) |
| SK-017 | C-3 | 略長方形 | 176×109×42 | N-16°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 炭化材 |
| SK-018 | B-2 | 略長方形 | 164×88×28 | N-43°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 中国産白磁片1 |
| SK-019 | C-2 | 略円形 | 84×81×6 | — | | |
| SK-020 | BC-2·3 | 隅丸長方形 | 155×102×8 | N-48°-E | 壁上部は被熱により赤色化 | |
| SK-021 | C-2 | 略長方形 | 145×62×18 | N-48°-E | 床に焼土面、炭化物層あり | 炭化材 |
| SK-023 | C-2 | 略長方形 | 145×76×20 | N-35°-E | 炭化物層あり | |
| SK-024 | C-2 | 略長方形 | 148×89×16 | N-20°-W | 壁は被熱により赤色化 | |
| SK-025 | B-4 | 不整形 | 149×86×19 | N-36°-E | 壁・床は被熱により赤色化 | |
| SK-026 | D-1 | 羽子板形 | 173×115×22 | N-29°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 土師器小皿・坏、須恵質土器、中国産陶磁器(白磁片、青磁；龍泉) |
| SK-027 | D-1 | 不整形 | 171×119×25 | N-42°-E | 北側壁は被熱により赤色化、覆土に炭化物を多く含む | 土師器小皿、坏片 |
| SK-028 | C-4 | 略長方形 | 187×113×34 | N-55°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-029 | C-4 | 略長方形 | 152×95×19 | N-21°-E | (壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 炭化材 |
| SK-030 | BC-5 | 不整形 | 75×57×5 | — | | |
| SK-031 | C-5 | 略円形 | 80×75×64 | — | 北側壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-032 | C-4 | 略方形 | 135×114×24 | N-11°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 炭化材、土師器坏片 |
| SK-033 | D-2 | 略円形 | 110×104×13 | — | 壁・床ともに被熱により赤色化 | |
| SK-034 | C-4 | 略長方形 | 202×116×27 | N-34°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | 土師器片 |
| SK-035 | D-4 | 略長方形 | 85＋α×74×25 | N-48°-E | 壁は被熱により赤色化 | |
| SK-036 | D-4 | 羽子板形 | 140×94×29 | N-48°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-037 | C-4 | 羽子板形 | 173×117×32 | N-23°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-039 | D-4隅 | 丸長方形 | 193×121×45 | — | 壁は被熱により赤色化 | 炭化材 |
| SK-040 | C-4 | 羽子板形 | 180×140×47 | N-55°-E | 壁は被熱により赤色化 | 炭化材 |
| SK-041 | D-4 | 略長方形 | 159×90×21 | N-18°-E | 壁は被熱により赤色化 | 炭化材 |
| SK-042 | D-4 | 長方形 | 130×70×37 | N-38°-E | | 炭化材 |
| SK-043 | D-4 | 楕円形 | 57×47×5 | — | 壁の一部は被熱により赤色化、炭化物層あり | 炭化材 |
| SK-044 | D-4 | 楕円形 | 92×67×4 | N-50°-E | 炭化物層あり | 炭化材 |
| SK-045 | D-5 | 楕円形 | 58×38×6 | N-76°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-047 | B-5 | 不整形 | 158×64×12 | N-27°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-049 | D-5 | 不整形 | 134×58× | N-24°-W | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-050 | B-2 | 楕円形 | 05×62×5 | N-73°-E | 炭化物層あり | |
| SK-051 | C-5·6 | 略長方形 | 153×68×32 | N-16°-E | 壁・床は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-052 | C-5 | 隅丸長方形 | 152×95×17 | N-70°-E | 壁・床は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-053 | C-6 | 略長方形 | 162×94×20 | N-13°-E | 壁は被熱により赤色化 | |
| SK-054 | D-5 | 略長方形 | 185×90×23 | N-88°-E | 壁は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-055 | B-6 | 略円形 | 110×104×25 | — | 壁・床は被熱により赤色化、炭化物層あり | 染付け片1　肥前系か明染かは不明 |
| SK-056 | BC-6 | 不整形 | 120×95×8 | N-37°-W | 炭化物層あり | |
| SK-057 | C-7 | 略円形 | 110×95×8 | — | 壁は被熱により赤色化 | |
| SK-058 | B-5 | 略円形 | 80×68×8 | — | | |
| SK-059 | B-6 | 不整形 | 97×90×29 | — | | 炭化材 |
| SK-061 | D-6 | 略長方形 | 174×90×25 | N-72°-E | 壁・床は被熱により赤色化、炭化物層あり | |
| SK-063 | B-8 | 略方形 | 106×105×30 | N-27°-W | 壁は被熱により赤色化 | 土師器片 |
| SK-064 | B-7 | 略長方形 | 215×144×11 | N-44°-W | | 土師器小皿片 |
| SK-066 | D-7 | 不整形 | 203×185×56 | — | 壁は被熱により赤色化 | 炭化材 |
| SK-067 | B-8 | 羽子板形 | 219×121×43 | N-5°-E | 壁は被熱により赤色化 | 東播系須恵質鉢片 |
| SK-069 | B-7 | 不整形 | 107×52×20 | N-89°-E | 壁は被熱により赤色化 | |
| SK-072 | B-7 | 長楕円形 | 171×102×46 | N-2°-W | 壁は被熱により赤色化 | |
| SK-073 | B-7 | 略長方形 | 203×168×11 | N-36°-E | | 土師器小皿・坏、須恵質土器、中国産陶磁器(白磁；ロハゲ、青磁；龍泉Ⅱ類)、砥石 |

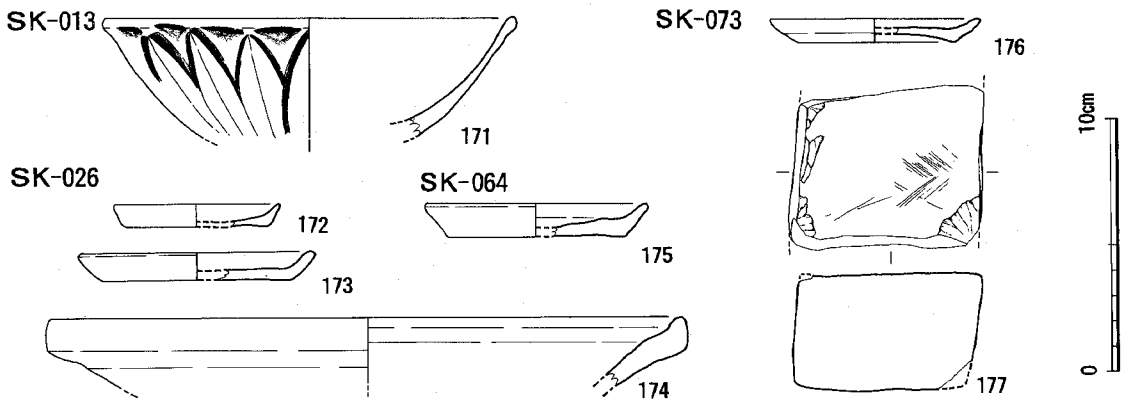



Fig.33　焼土坑(SK)出土遺物実測図（1/3）

## 4　焼土坑(SK)

峯遺跡群本次調査では各調査地点を通じて焼土坑が多数出土している。各調査地点での報告は別記する次第だが、５区の焼土坑についての各遺構の詳細は簡潔に述べる。また、ここで述べる焼土坑は、遺構壁面に明瞭に焼土が遺存するものを指す。覆土中に焼土、炭化物を多く含む土坑は焼土坑の可能性もあるが、ここでは除外する。

５区では49基の焼土坑を検出している。これらの焼土坑の分布を見ると、調査区全体に万遍なく分布していることが判る。また焼土坑同士の切りあいも見られず、相互に間隔をとって位置している。土坑主軸の方向は一定しないが、地形の等高線に平行もしくは直行するものが多い。これは焼土坑の操業状態に関係するものと考えられる。

これらの焼土坑は、他の調査区で検出されたものも含め、規模、平面形態から大きく3つのタイプに分けることができる。

（Ⅰ）平面形が台形または三角形に近い形になるもの、すなわち短辺の一方がみじかくなるもの。(SK-003,020,022,024,026,027,028,034,036,037,039,040,066,067,072) これらの共通した特徴として全長が1.5m以上と比較的大型で、掘り方が深いことがあげられる。壁面は強く被熱する。床面は平坦かやや窪み、壁は床から緩く立ち上がり、上方向へ広がる。この類型のなかには隅丸長方形の崩れた形で、掘り方の深いものも含める。

（Ⅱ）平面形は長方形で、コーナーがはっきりするもの。(SK-013,017,018,021,023,029,035,041,042,051,052,053,054,061) なかには台形に近いものもある。Ⅰよりもやや小型で、全長１m前後のものが多い。掘り方はやや浅いものもあるが、一般にある程度の深さをもち、壁面は強く焼ける。この類型の最も大きな特徴として壁面が床から垂直に立ち上がり、内面は箱状を呈する。

（Ⅲ）平面形は円形、または不整形。(SK-014,019,025,030,031,032,033,038,043,044,045,046,047,049,050,055,056,057,058,059,063,069) 掘り方は現況では皿のように浅く、床面と壁面の境界がはっきりしない。周壁の被熱は非常に弱い。床面は凹凸が目立つ。

これらの焼土坑に共通して、床面の被熱が弱いことがみられる。これは、熱の伝導が上方向へ上りやすく、床面に熱がこもることが少ないことが考えられる。

これらのパターン分類は別記される科学的分析でも関連させている。科学分析では「構築年代の違いがタイプの違いに関連するとは言い難い」としているが、分析結果を熟考すると、Ⅰ、Ⅱの比較的しっかりした構造をもつタイプについては、タイプⅠがタイプⅡに先行する傾向もみられる。ただ、分析結果が出土遺物が示す時期よりもかなり古い数値を示しており、さらに製炭という分野はドラスティックな技術変化に乏しいため、近年まで検出された遺構に類する設備での製炭を行っていた話も

あり、正確な時期比定は現段階でも困難である。

**焼土坑出土遺物**　SK-013(Fig.33　171)　**171**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。胎土は淡灰白色で細かく、暗緑色の不透明釉がかかる。体外面には複弁鎬蓮弁文が施される。口径16.2cm。出土遺物少なく不明瞭だが、遺構の時期は13世紀前後～前半か。　SK-026(Fig.33　172～174)　**172・173**は土師器小皿。糸切りと思われる。**172**は口径6.6、器高0.9cmだが、小片のため不明確。**173**は口径9.4、器高1.1cm。**174**は須恵質土器鉢。口縁端部は尖り気味で外面は断面三角形に肥厚する。口径25.0cm。東播系。出土遺物少なく不明瞭だが、遺構の時期は13世紀前後～前半か。SK-064(Fig.33　175)　**175**は土師器小皿。糸切りと思われる。口径8.8、器高1.3cm。　SK-073(Fig.33　176・177)　**176**は土師器小皿。磨滅著しく調整等不明。口径8.4、器高0.9cm。**177**は砥石。出土遺物少なく不明確だが、遺構の時期は13世紀中頃～14世紀前後か。

## 3．小結

第５地区では、調査面積が約6200㎡と広かったため、ある程度の削平があったものの中世の建物群や焼土坑群を広く捉えることができた。

集落の時期は出土遺物の年代から、13～14世紀の限定された年代幅で考えることができよう。集落の範囲は調査区の南側にも広がる可能性が高いが、第５調査区内の建物については建て替えのほとんどない時間幅であったとされ、ほとんど重複のない建物の配置からもそれが伺える。この集落が短期間で絶えた理由は明らかでない。内野・脇山地区の台地上の開墾が中世に進められたことも要因の一つかもしれない。

集落と関連して、調査区西側で中世墓が1基検出されている（SK-060)。時期的に集落と同じ時期に当たるため、調査区東側の集落に直接関係するものと見てよいだろう。集落との距離や、尾根を挟んで立地する位置関係から見て、屋敷墓的な意味合いももつだろう。ただし１基のみ孤立して存在するという点で問題が残る。

調査区東側を中心として点在する方形の小型竪穴状遺構については、作業小屋的なものではないかとの見解が、中世博多の発掘結果から出されている。第５地区で検出された方形竪穴は、各々構造が微妙に異なっており、規模もさまざまである。上部構造を推定するのは困難であるが、その中で、SK-062は壁面に沿って柱穴がめぐっており、いわゆる壁立の建物を想定できる。他の方形竪穴については、主柱穴の確定が難しいものも多く、簡便な小屋状の建物であったと考えるのが妥当であろう。

建物群のなかで特筆すべきものとして、SB-016がある。SB-016はほぼ全周に柱がめぐり、壁溝を伴う。四隅の柱は他の柱より深くなり、主柱穴とみられる。内部には他からの切りあいも含め、柱穴は見られない。この建物の機能として最も考えやすいのは家畜小屋的な性格であろう。建物の配置も他の掘立柱建物と平行しており、同じ時期に併存していたものとみられる。

出土した遺物の傾向として、輸入陶磁器の量が比較的多い。遺物の種類は、白磁、青磁、その他中国陶器のほか、東播系陶器が主である。これらの遺物から見て、中世博多との強い関係を裏付けるものといえよう。

また、今回の調査では脇山地区で大量に検出された焼土坑が、ほぼ同じ様な形で検出されている。脇山地区の調査では炭化材が良好に遺存し、操業時の状況を伺える資料だったが、本次調査では良好な遺構が少なく、土坑形態のみ明らかにしている。今回、科学分析を行ったが、この結果も踏まえながら今後同様の遺構の調査の際には検討していきたい。

# 第６節　旧石器時代の遺物

## １．峯遺跡出土旧石器時代資料について

本遺跡からは５点の旧石器時代と考えられる石器、剥片が出土した。残念ながらすべて本来の包含位置を遊離したものであり、共伴関係や帰属石器群の詳細などは不明である。また、石材の特徴や剥離技術から旧石器時代に所属することは明らかでも、定形石器がなくその編年的位置も明確にし難い。
以下では、個別石器、剥片の観察を通じてそれらを明らかにする手がかりを得たい。

## ２．出土石器の観察

**１**は尖頭状石器もしくは、スクレイパーである。石材は古銅輝石安山岩である。表面は風化し、摩滅が進んでいる。色調は灰黒色から灰褐色を呈し、鉄分の付着をみる。長さ7.8cm、幅5.0cm、厚さ1.4cm、重さ52.66ｇを測る。背面は平坦な板状素材面であり、不明確であるが、ポジ面の可能性がある。剥片は入念な打面調整後、剥離される。基本的に不整な横長剥片であり、この打面では初期の剥離であったと見られる。剥片の右側辺と基部に二次調整を施し石器に仕上げている。調整は背面からの剥離によっている。厳密にシンメトリーではないが基部調整の存在から、ここでは尖頭器的用途を考慮しての尖頭状石器と理解していきたい。

**２**は削器である。石材は漆黒色の黒曜石であり、自然面の状態から腰岳産出と見られる。表面は風化しパティナが進んでいる。長さ5.1cm、幅3.8cm、厚さ1.1cm、重さ18.33ｇを測る。不整な縦長剥片の基部と先端部、自然面の残る右側面を粗く調整し、左側面に微調整により刃部を造り出している。

**３**は微細剥離のある剥片である。石材は漆黒色の黒曜石であり、色調から星鹿半島など北松浦地域産出と考えられる。表面は風化しパティナが進んでいる。長さ4.5cm、幅2.1cm、厚さ1.0cm、重さ9.29ｇを測り、分厚い縦長剥片である。この縦長剥片はわずかな打面調整、剥離面調整があり、打面単設と見られる。剥離過程の進んだ石核から剥出されたものである。打角は鈍くなり、階段状剥片に近づいている。両側辺に微細な剥離が認められるが、使用痕かは明確でない。

**４**は掻器である。石材は漆黒色の黒曜石であり、色調から淀姫系の石材に類似する。表面は風化しパティナが著しい。調査時に一部欠損した。長さ2.3cm、幅4.2cm、厚さ1.1cm、重さ10.93ｇを測り、不整な横長剥片である。剥離面の平坦打面であるが、背面の調整が粗く、打面転移の多いサイコロ状の石核か、石核再生に伴う調整剥片の利用の可能性がある。横長剥片の右側端部に背面から二次調整を施し刃部を造り出している。

**５**は横長剥片である。石材は漆黒色の黒曜石であり、色調から淀姫系の石材に類似する。表面は風化しパティナが認められる。長さ1.5cm、幅3.3cm、厚さ0.6cm、重さ2.06ｇを測り、不整な横長剥片であり、剥離面打面で底面に右からの縦長剥離面があり、ネガ面となっている。背面には左右からの縦長剥片の剥離面があり、こうした状況からみて本剥片は縦長剥片剥離行程で石核先端部の再調整に伴い剥出されて調整剥片であると考えられる。側辺などに二次調整や微細剥離は認められない。

## ３．出土石器の評価

以上に観察した石器、剥片は石材や剥離技術からは共通性が少ない。１の尖頭状石器は形態と二次調整から見て刺突具の機能が想定される。器面は他の石器類とは風化の度合いが異なり、摩滅が進んでいる。これは早く耕作などにより転磨した可能性が残る。打点の位置や主軸の取り方などから見て今峠型ナイフ形石器の要件を有している。また、より古段階の斜軸尖頭器としての理解も否定できない。次に２～５の石器、剥片については縦長剥片剥離を基調とし、剥離面による平坦打面を主としている点で共通点はある。打面単設の縦長剥片剥離と両設、もしくはサイコロ状剥離は共伴し得るものである。これらは、後期旧石器段階の後半期に所属する可能性が高いといえる。ただし、石器組成や石材については今後周辺での資料集積に待たねばならない。

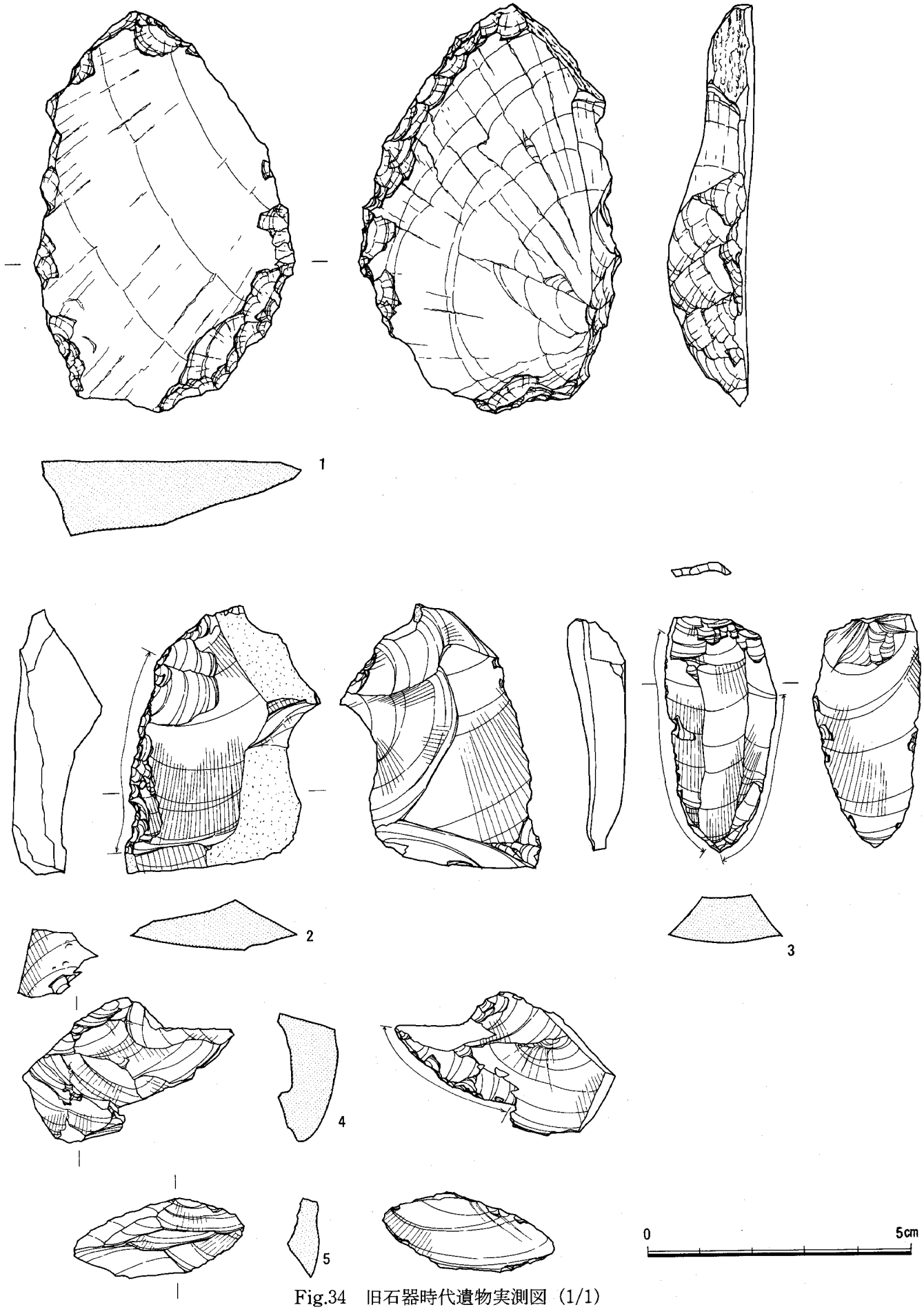



Fig.34　旧石器時代遺物実測図（1/1）

# 第４章　峯遺跡の自然化学分析

－峯遺跡から出土した炭化材の年代と樹種－

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

峯遺跡では、中世と考えられる炭化材や焼土を伴う土坑群が検出されている。土坑は、形態的特徴から、Ⅰ～Ⅲの３タイプに分類されている。

本報告では、各土坑から検出された炭化材の放射性年代測定および樹種同定を行い、形態分類と年代や使用樹種に関連性があるか否かを確認し、土坑の性格を検討する情報とする。

## １．試料

試料は、11基の土坑から出土した炭化材各１点である。樹種同定は全点について行うが、年代測定はSK-017,29,39,40,41,43,44,66の８点について実施する。各試料の詳細は、測定結果・同定結果と共に表１に記した。

## ２．方法

（１）放射性炭素年代測定

ａ）前処理

炭化材を乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

ｂ）測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした）にシンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

ｃ）測定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

ｄ）計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

（２）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

## 3．結果

年代測定結果および樹種同定結果を表に示す。各遺構から出土した炭化材は、1000～1690y.B.P.の年代値が得られた。一方、樹種同定結果は、保存状態の悪いために、樹種の同定に至らない試料が多かった。 それらの試料については、観察できた範囲での結果を表記した。 樹種が同定できたのは

**炭化材の年代測定および樹種同定結果**

| 遺構名 | タイプ | 炭化材の用途 | 樹種 | 年代値 | 誤差 | | Lab No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | ＋ | － | |
| SK-017 | Ⅱ | 燃料材？ | 樹　種 | 1,240 | 250 | 240 | PAL-190 |
| SK-021 | Ⅱ | 燃料材？ | ハイノキ属 | — | — | — | — |
| SK-029 | Ⅱ | 燃料材？ | コナラ属アカガシ亜属 | 1,470 | 190 | -190 | PAL-191 |
| SK-032 | Ⅲ | 燃料材？ | 広葉樹 | — | — | — | — |
| SK-039 | Ⅰ | 燃料材？ | カツラ | 1,470 | 230 | 230 | PAL-192 |
| SK-040 | Ⅰ | 燃料材？ | 広葉樹 | 1,560 | 1,210 | 1,050 | PAL-193 |
| SK-041 | Ⅱ | 燃料材？ | 広葉樹（散孔材） | 1,170 | 220 | 210 | PAL-194 |
| SK-043 | Ⅲ | 燃料材？ | 不明 | 1,000 | 230 | 230 | PAL-195 |
| SK-044 | Ⅲ | 燃料材？ | コナラ属アカガシ亜属 | 1,690 | 1,030 | 910 | PAL-196 |
| SK-059 | Ⅲ | 燃料材？ | 広葉樹（散孔材） | — | — | — | — |
| SK-066 | Ⅰ | 燃料材？ | 広葉樹 | 1,390 | 270 | 260 | PAL-197 |

注.（1）年代値：1,950年を基点とした値。
（2）誤差：測定誤差2σ（測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

SK-017,021,032,043の４点で、広葉樹３種類（コナラ属アカガシ亜属・カツラ・ハイノキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。

・カツラ（Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.）　　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。壁孔は観察できなかった。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～30細胞高。

・ハイノキ属（Symplocos）　　ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および２～５個が複合する。道管は階段穿孔を有する。壁孔は観察できなかった。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、１～４細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。

## 4．考察

炭化材が出土した土坑は、形態的特徴から３タイプ（Ⅰ～Ⅲ）に分類されている。各タイプ別の年代測定結果を図１に示す。各土坑の年代値は、弥生時代後期～平安時代を示しており、発掘調査所見から指摘されている中世よりも古い。木材の年代測定値は、その木材が植物としての活動を停止した時期を示している。木材の活動が停止する時期は、１本の木でも形成された年輪によって異なり、中心に近い年輪ほど古い年代値が得られる（東村，1990）。また、古材の再利用なども知られているため

（東村，1990）、得られた年代値が遺構の構築時期を示すとは断定できない。しかし、試料中に中世を示す年代値が１点も存在しないこと、700年の差はあるものの比較的年代値がまとまっていること、樹種がいずれも広葉樹で樹齢による誤差は小さいと考えられること等を考慮すると、遺構は中世よりも

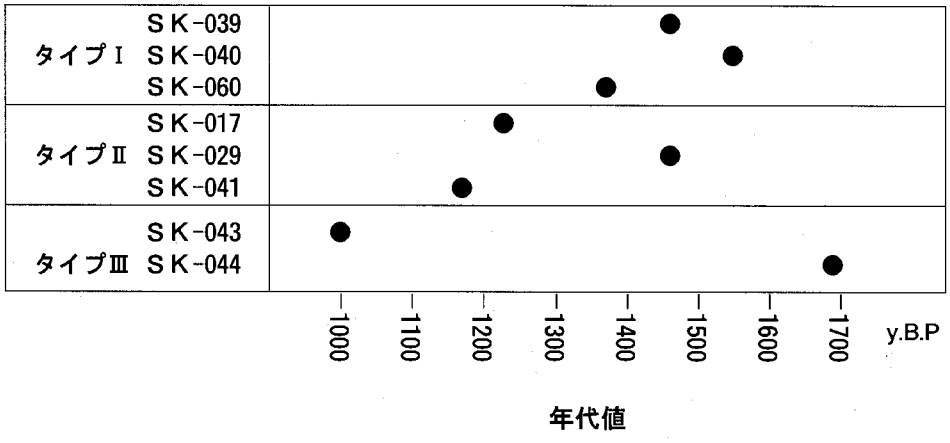



**図１　土坑のタイプ別の年代値の比較**

古い時期に構築された可能性もある。

各タイプ別に年代値を見ると、タイプⅠは３基の土坑で比較的近接している。タイプ２では、SK-041とSK-017で近接するが、SK-029はやや離れている。タイプⅢでは、今回測定した中で最も新しい年代値と最も古い年代値が得られ、その差は700年に近い。また、各タイプ間で比較すると、タイプⅠとタイプⅡの年代値はほぼ連続しており、一部では重なっている。この結果から、タイプⅠについては、構築時期が近いために特徴が似た可能性がある。しかし、タイプⅡおよびⅢでは、構築時期がやや離れており、タイプⅠとタイプⅡで一部年代値が重なっていること等を考慮すると、必ずしも構築年代の違いがタイプの違いに関連するとは断定できない。

一方、樹種同定結果では、３種類が認められたが、多くは保存状態が悪く樹種の同定には至らなかった。各土坑の形態別に見ても、タイプによって樹種が異なるような傾向はなく、用材選択と土坑の形態との間に明確な関係は見られない。

以上、土坑の形態と年代・炭化材の樹種との関係について述べてきたが，今回調査を実施しなかった土坑についても同様な調査を行うことにより、より詳細な傾向が把握できるものと思われる。また、土坑覆土の理化学分析や水洗選別なども合わせて実施し、総合的に検討していきたい。

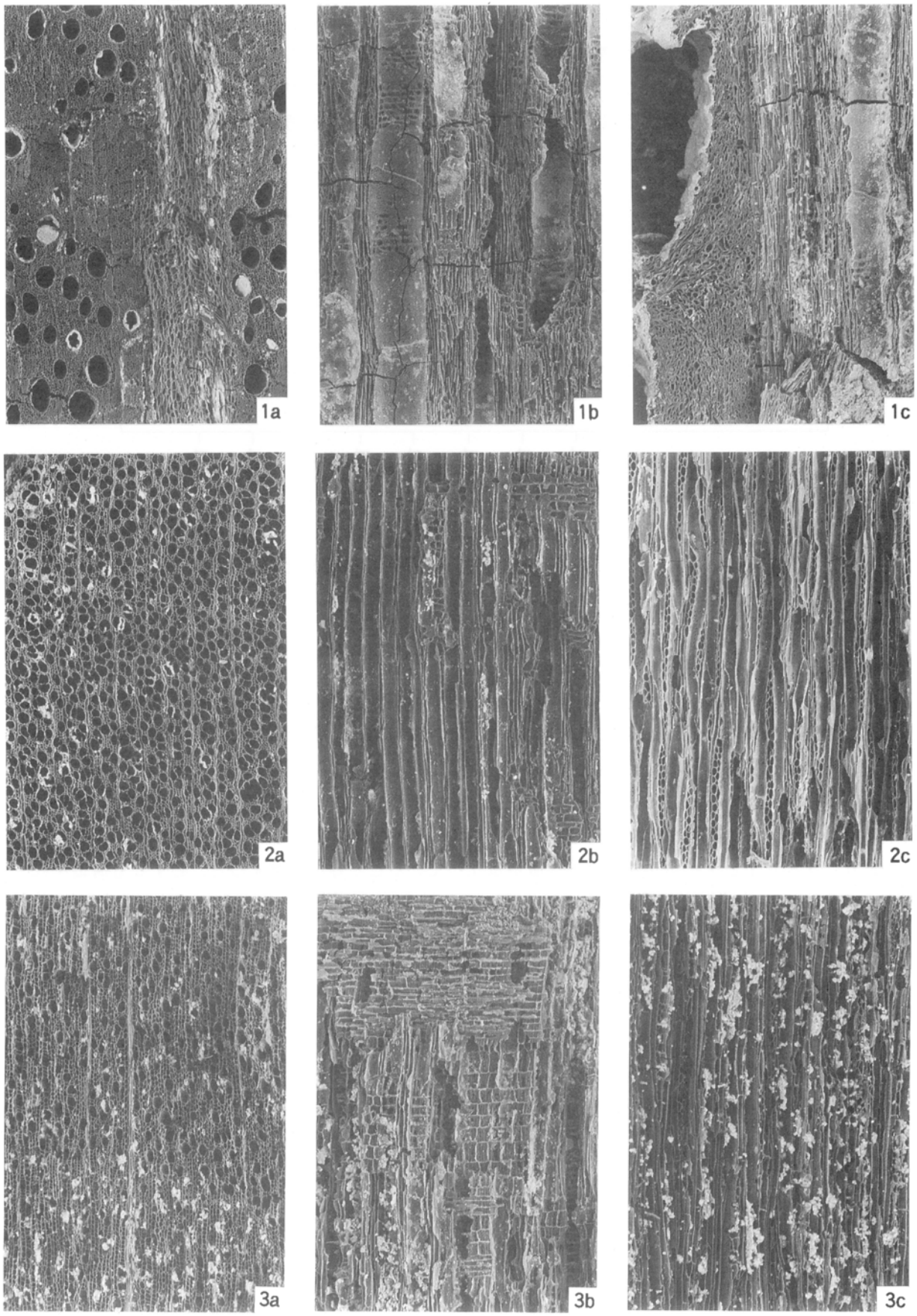

＜引用文献＞

東村武信（1990）改訂　考古学と物理化学．212p.，学生社．

石河寛昭（1977）最新液体シンチレーション測定法．189p.，南山堂．

日本化学会編（1976）同位体，年代測定．「新実験化学講座10　宇宙地球科学」，p.337-353，丸善．

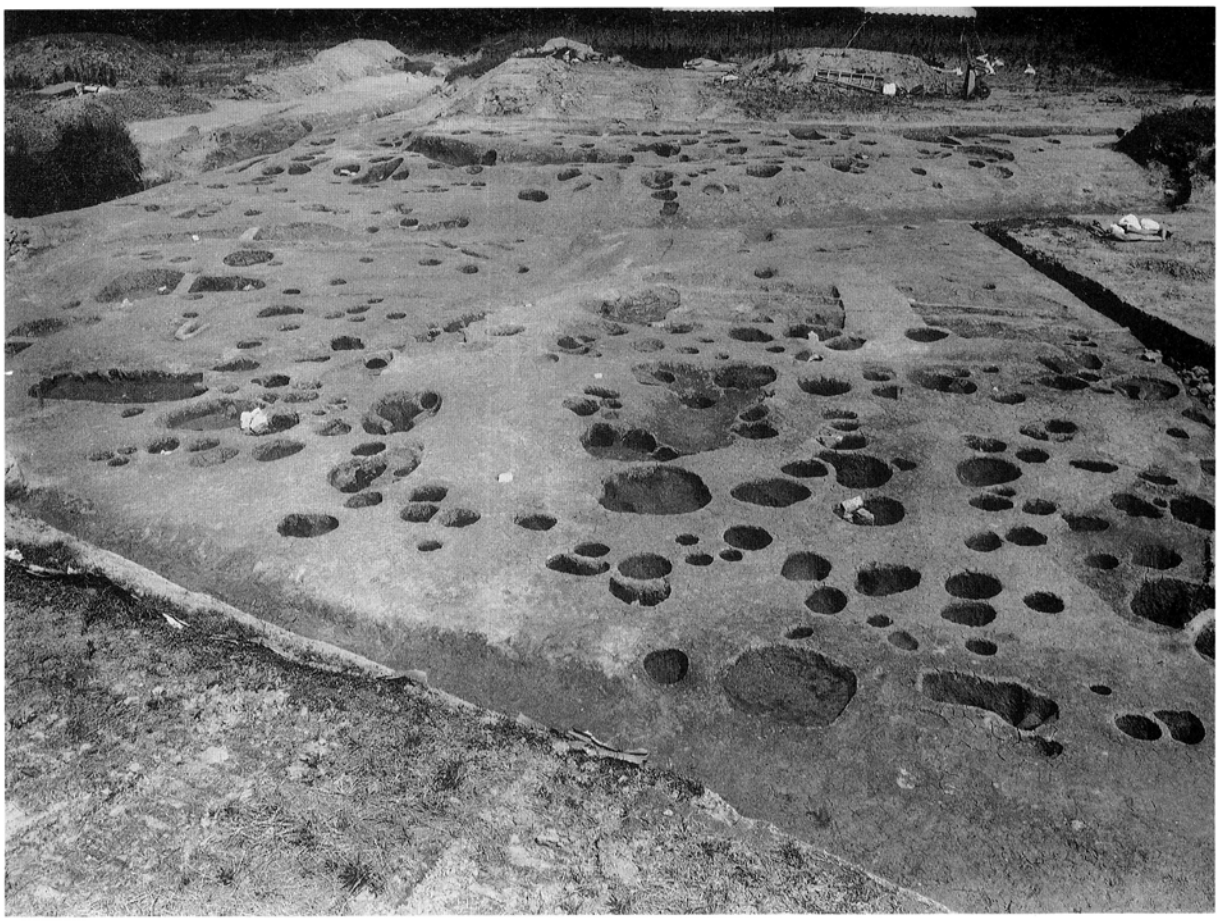
富樫茂子・松本英二（1983）ベンゼン－液体シンチレーションによる14C年代測定法．地質調査所月報，34，p.513-527．




1. コナラ属アカガシ亜属（SK-021）
2. カツラ（SK-032）
3. ハイノキ属（SK-017）
a：木口，b：柾目，c：板目

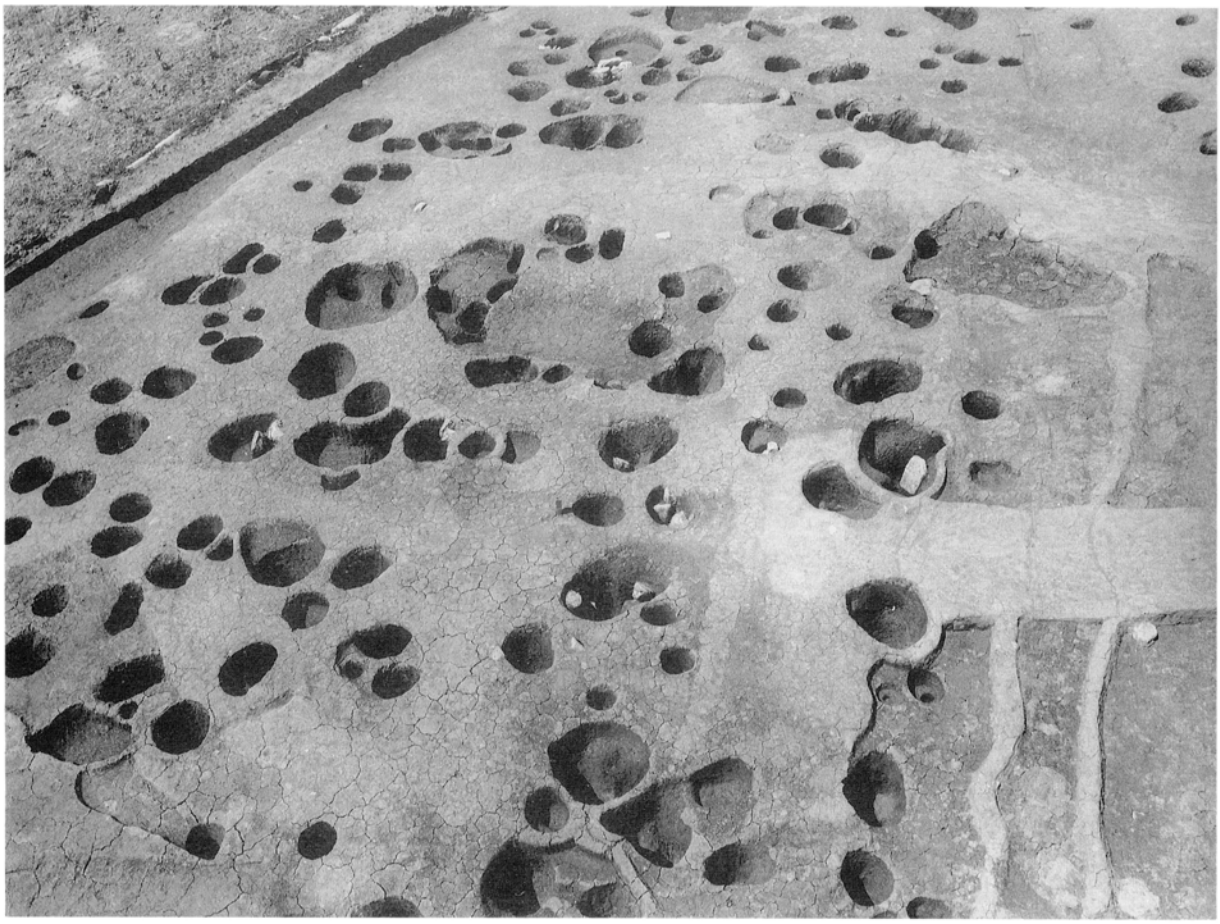
200μm：a
200μm：b, c

（1）第1地区全景（南東から）



（2）第2地区全景（西から）

図版2



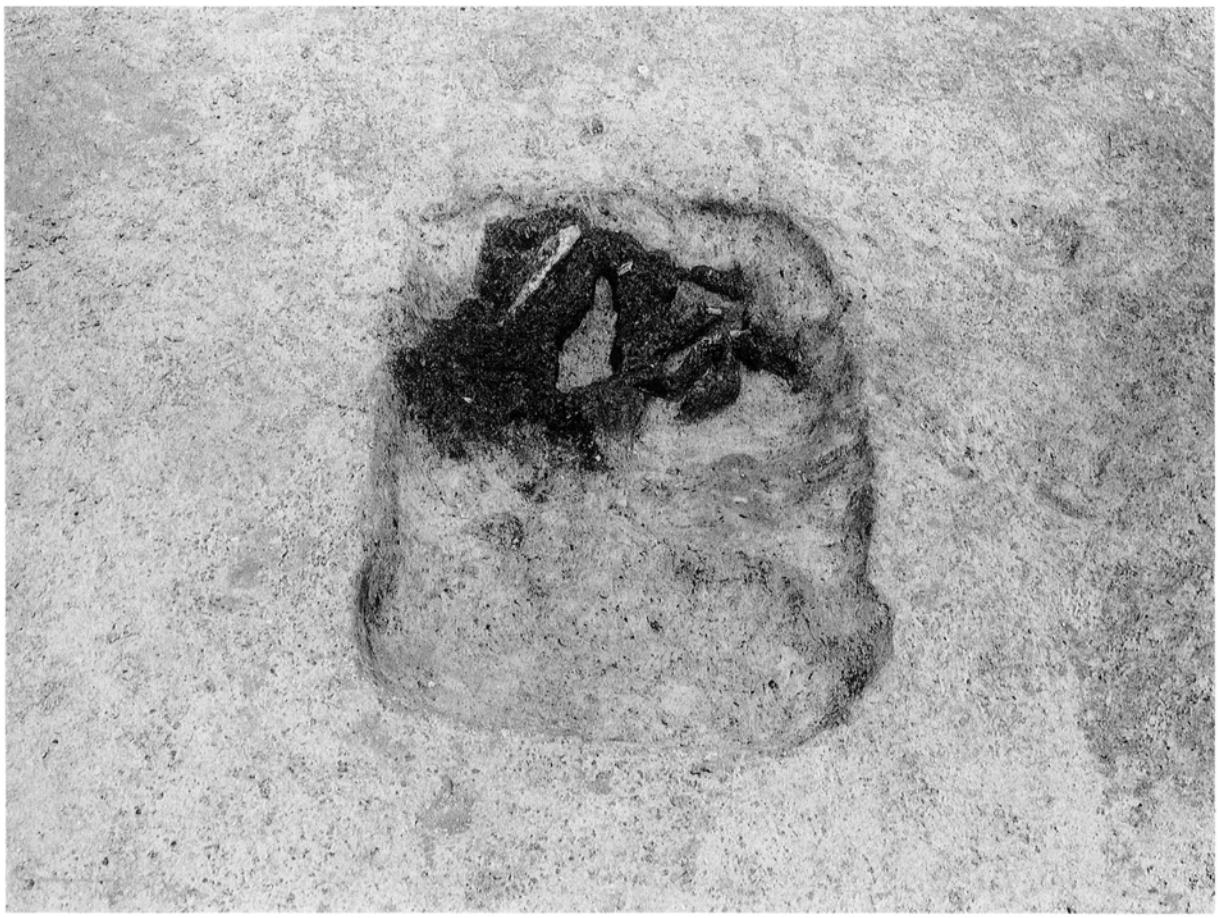
（1）第２地区西半全景（南から）

（2）ＳＫ-108（南から）

（1）第３地区西側全景（北東から）

（2）第３地区東側全景（北東から）

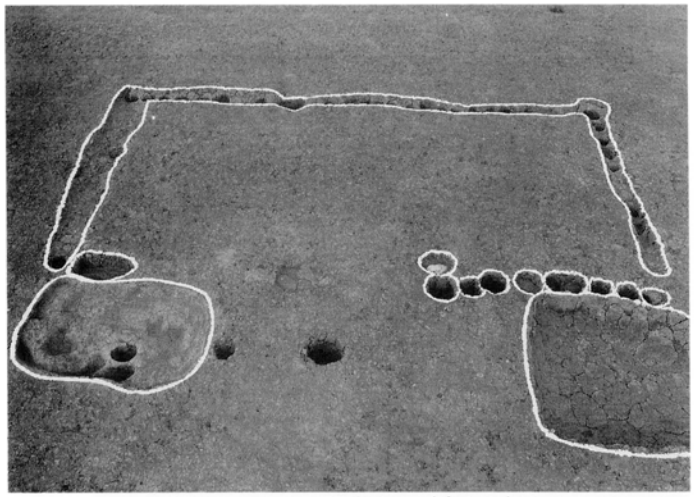
（1）第４地区西側全景（北東から）



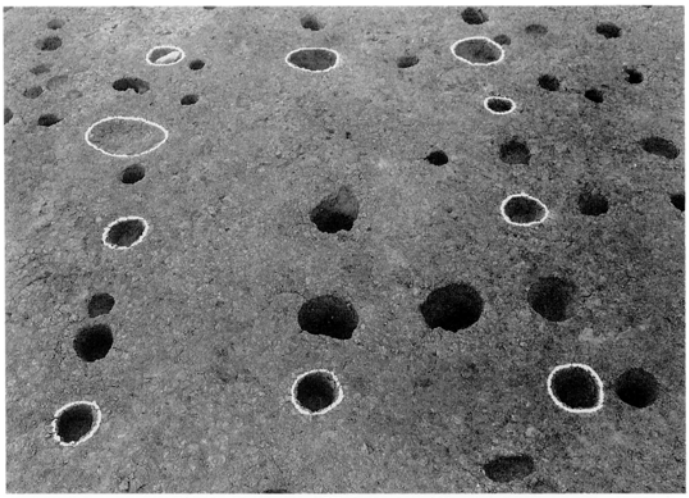
（2）ＳＫ-006（南から）

（1）第５地区全景（北東から）

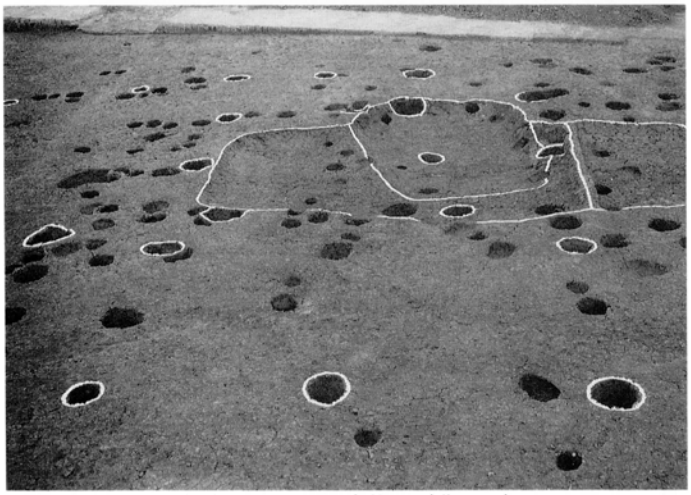
（2）第５地区南側遺構集中部（南東から）



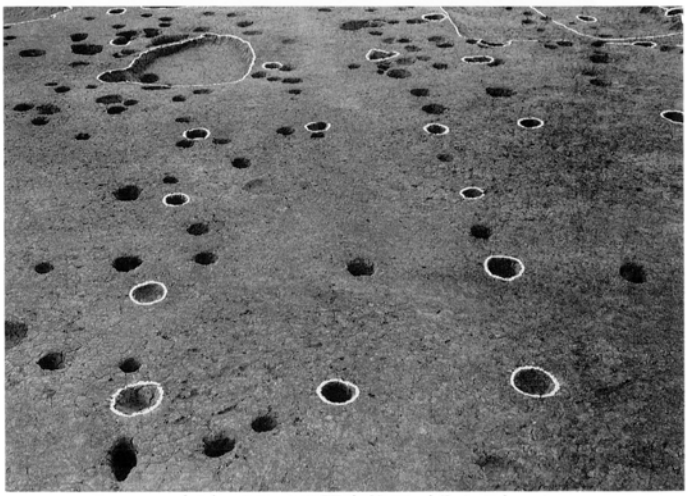
（1）SB-016調査状況（東から）



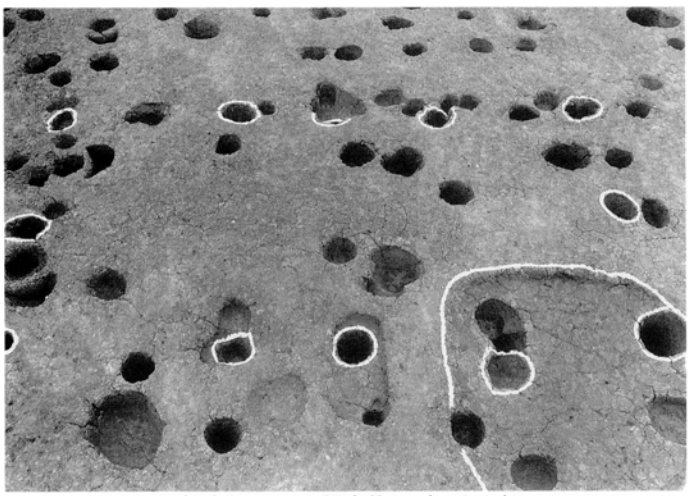
（2）SB-081調査状況（北から）



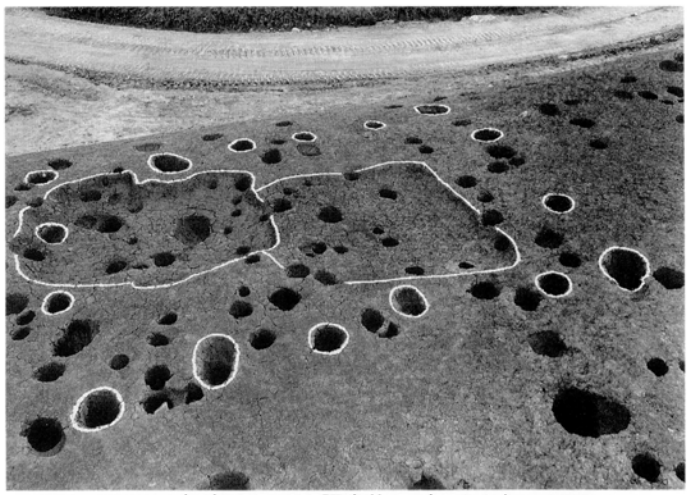
（3）SB-082調査状況（北から）



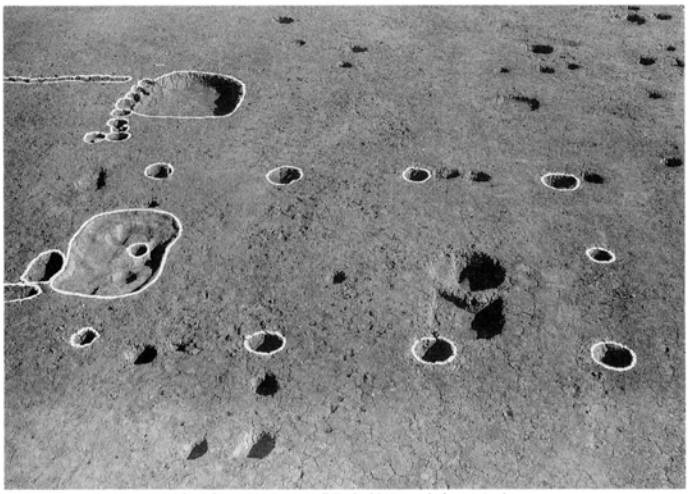
（4）SB-083調査状況（北から）



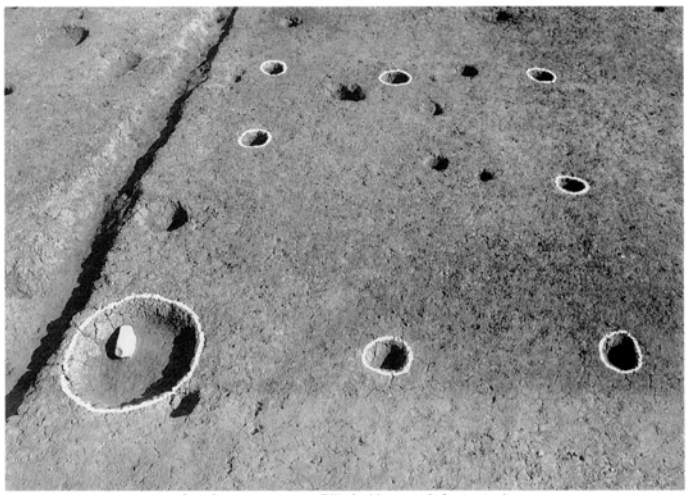
（5）SB-084調査状況（西から）



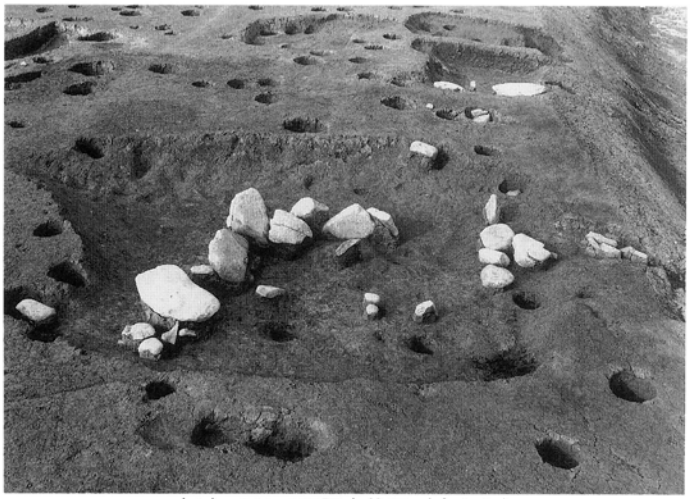
（6）SB-085調査状況（西から）



（7）SB-088調査状況（南から）

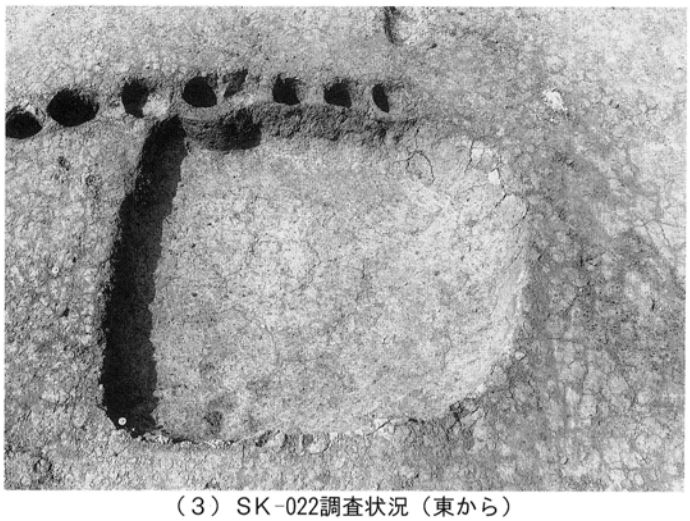


（8）SB-089調査状況（南から）



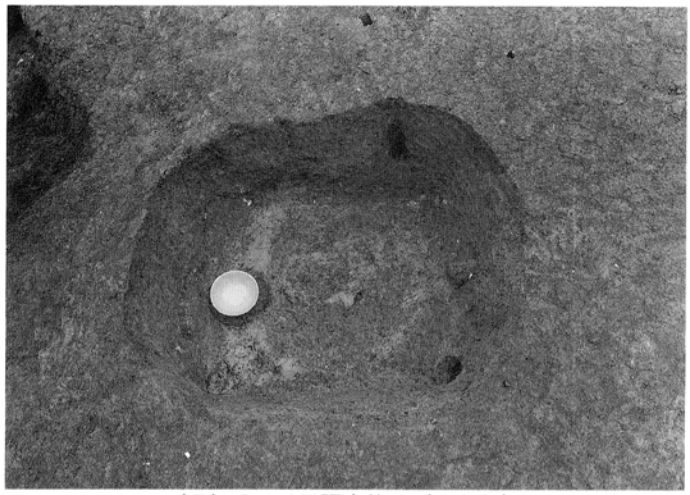
（1）SK-005調査状況（南から）

（2）SK-010調査状況（西から）

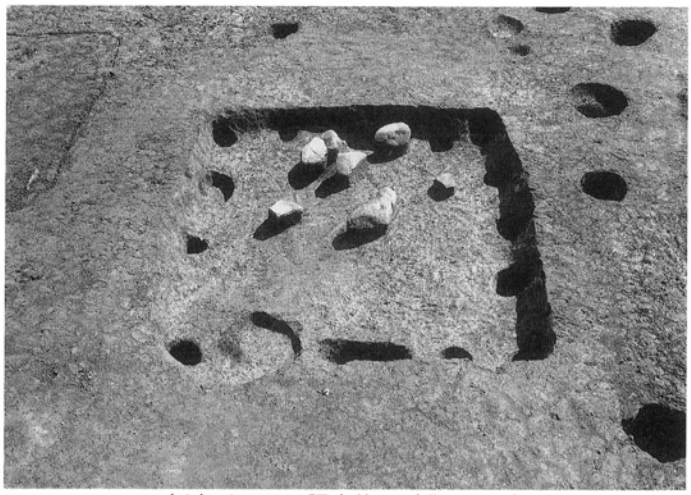


（3）SK-022調査状況（東から）

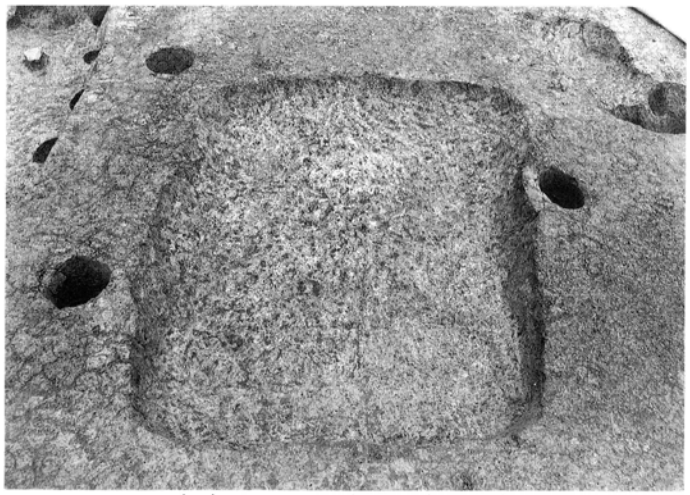
（4）SK-048調査状況（東から）



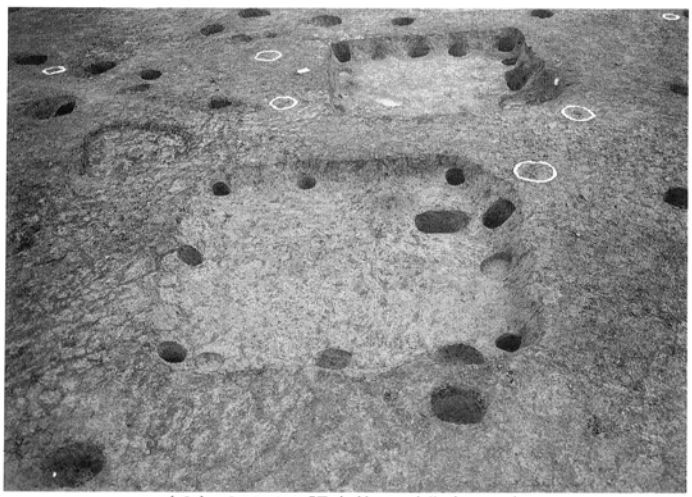
（5）SK-060調査状況（西から）



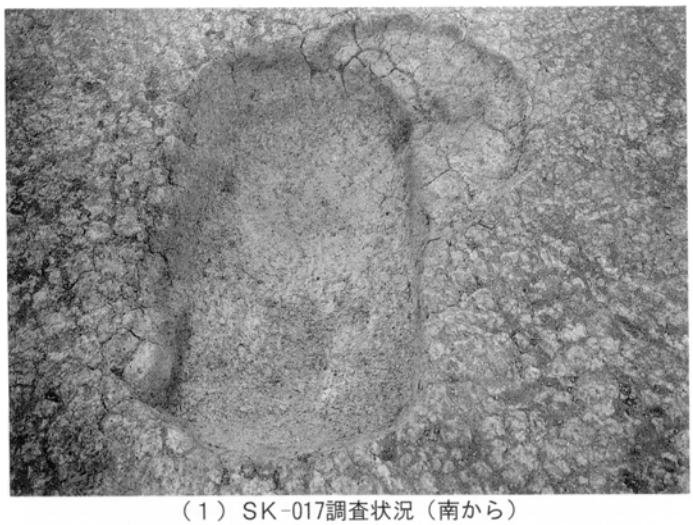
（6）SK-062調査状況（北西から）



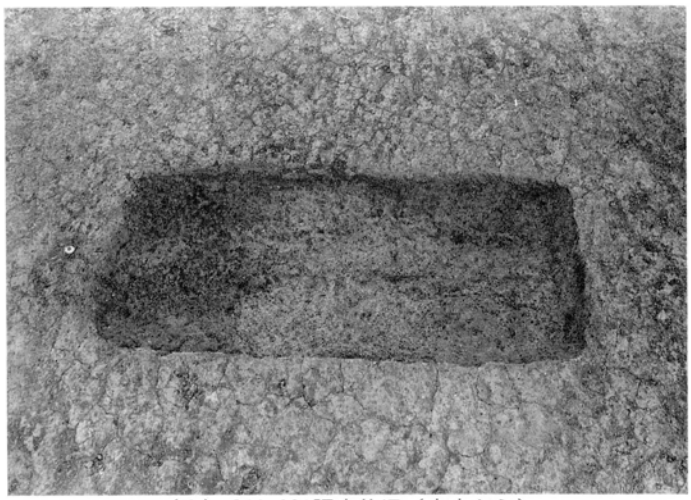
（7）SK-065調査状況（西から）



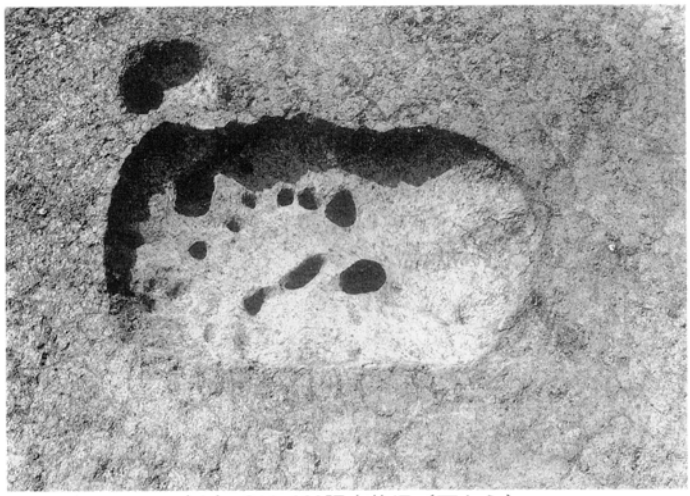
（8）SK-071調査状況（北東から）



（1）SK-017調査状況（南から）

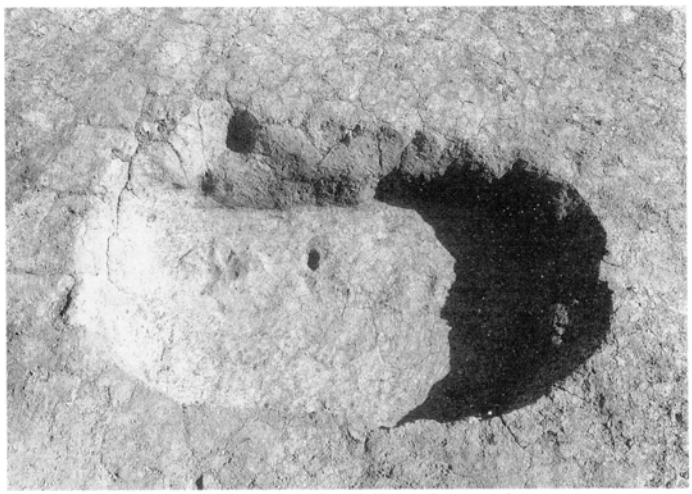


（2）SK-021調査状況（南東から）

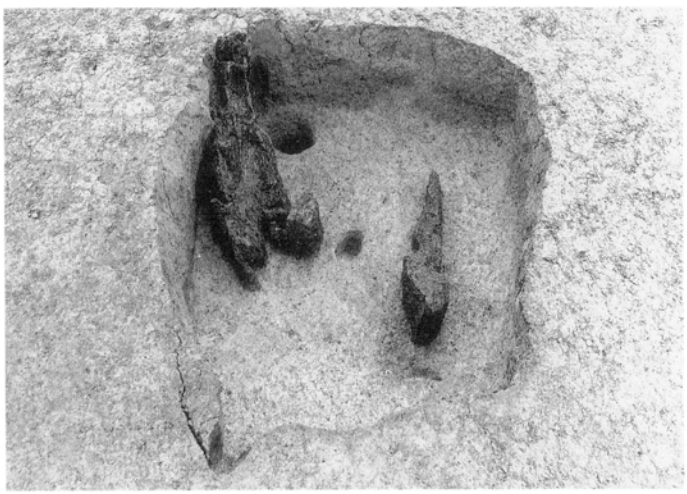


（3）SK-029調査状況（西から）

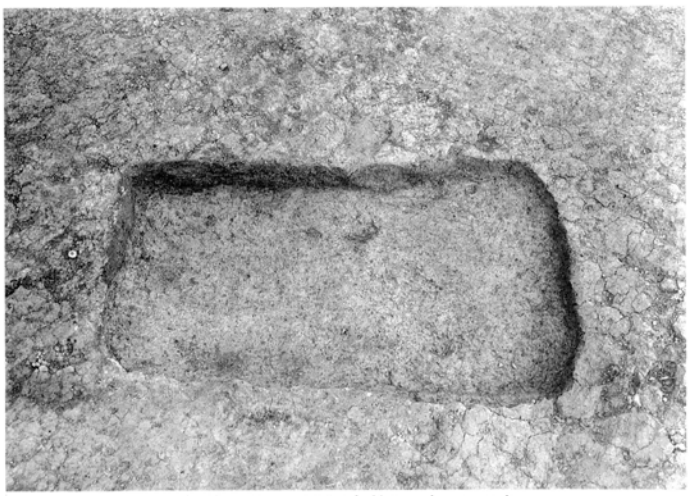
（4）SK-032調査状況（南西から）



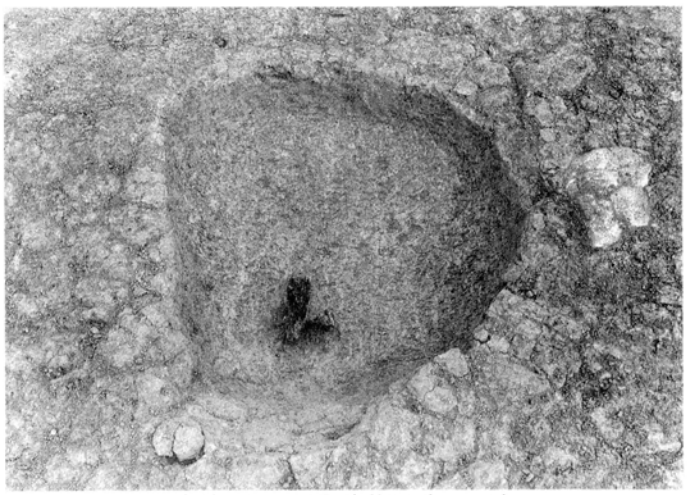
（5）SK-039調査状況（西から）



（6）SK-040調査状況（北から）



（7）SK-041調査状況（西から）



（8）SK-059調査状況（西から）

# 峯 遺 跡 2

—ほ場整備事業に伴う峯遺跡第２次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第618集

1999．3．31

発行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印刷　田 堀 印 刷 有 限 会 社
福岡市中央区草香江１丁目8-24